

(岡)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 第100集

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第14集

熊野堂遺跡(2)

遺構編 2

1990

群馬県教育委員会
(岡)群馬県埋蔵文化財調査事業団
東日本旅客鉄道株式会社

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団発掘調査報告 第100集

上越新幹線関係
埋蔵文化財発掘調査報告

第14集

熊野堂遺跡(2)

遺構編 2

1990

群馬県教育委員会
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
東日本旅客鉄道株式会社

例 言

- 1 本書は、上越新幹線建設に伴い事前調査された群馬県高崎市大八木町、群馬郡群馬町大字井出に所在する「熊野堂（くまのどう）遺跡」—第II地区—の発掘調査報告書である。体裁は、遺構編2冊、遺物編1冊、まとめ編1冊の4分冊からなり、本書はその第2分冊—遺構編(2)である。
- 2 第2分冊 遺構編(2)は、住居以外の遺構を一括掲載した。
- 3 遺構の縮尺、法量の計測基準と方法、方位は第1分冊と同様である。

目 次

例 言

目 次

第1章 調査に至る経過と遺跡の概要

第2章 検出された遺構

第1節 遺構の概要と時代別変遷

第2節 竪穴住居（以上 第1分冊 遺構編 (1)）

第3節 掘立柱建物 ……………299

第5節 水田と畠 ……………314

第7節 1号方形周溝墓 ……………351

第9節 竪穴状遺構 ……………377

第4節 井 戸 ……………310

第6節 溝 ……………345

第8節 土 坑 ……………355

第10節 東京電力鉄塔用地調査区 ……………381

挿 図 目 次

第183図	4区31号住居址遺構図……………277
第184図	1号・2号・4号掘立柱建物……………300
第185図	3号・5号掘立柱建物……………301
第186図	6号・7号・9号掘立柱建物……………303
第187図	8号・10号掘立柱建物……………304
第188図	掘立柱建物全体図(1)……………306
第189図	掘立柱建物全体図(2)……………307
第190図	1号・3号井戸……………310
第191図	2号井戸……………311
第192図	C水田(1)……………315
第193図	C水田(2)……………318
第194図	C水田(3)……………319
第195図	C水田畝列……………320
第196図	8号溝……………322

第197図	C水田耕土下の遺構分布図……………323
第198図	C水田・F A水田基本土層……………326
第199図	F A水田 1区……………329
第200図	F A水田 2区……………330
第201図	F A水田の水口と足跡(1)……………333
第202図	F A水田の足跡(2)……………334
第203図	F A水田水口断面図……………335
第204図	2区畠址……………337
第205図	3区畠址……………338
第206図	C水田・F A水田面積比グラフ図……………339
第207図	C水田・F A水田区画……………340
第208図	3区1号・2号・3号溝……………346
第209図	1号前方後方形周溝墓遺構図(1)……………353
第210図	1号前方後方形周溝墓遺構図(2)……………354

第211図	縄文時代土坑分布図	356
第212図	縄文時代土坑	357
第213図	弥生時代土坑	358
第214図	土坑・溝全体図①	359
第215図	土坑・溝全体図②	360
第216図	土坑・溝全体図③	361
第217図	土坑・溝全体図④	362
第218図	土坑・溝全体図⑤	363
第219図	土坑①	364
第220図	土坑②	365

第221図	1号・2号・4号・5号・6号竪穴状遺構	380
第222図	東電鉄塔用地調査区全体図	383
第223図	東電鉄塔用地調査区1号住居址	384
第224図	東電鉄塔用地調査区2号住居址	385
第225図	東電鉄塔用地調査区3号住居址	386
第226図	東電鉄塔用地調査区4号住居址	388
第227図	東電鉄塔用地調査区1号竪立柱建物	389
第228図	東電鉄塔用地調査区土坑	390
第229図	東電鉄塔用地調査区溝	392

図 版 目 次

図版 95-1	2次調査区全景 (南から)	
	2 3区全景 (北から)	
図版 96-1	1号～5号竪立柱建物 (北から)	
	2 1号～3号竪立柱建物 (北から)	
	3 1号竪立柱建物	
図版 97-1	2号竪立柱建物 (北から)	
	2 3号竪立柱建物 (南から)	
	3 4号竪立柱建物 (西から)	
図版 98-1	5号竪立柱建物 (西から)	
	2 6号竪立柱建物 (北西から)	
	3 7号竪立柱建物 (南から)	
図版 99-1	7号竪立柱建物 (西から)	
	2 7号竪立柱建物 (南から)	
	3 8号竪立柱建物 (南から)	
図版100-1	1号井戸	
	2 2号井戸 (北から)	
	3 2号井戸 (断面)	
図版101-1	3号井戸	
	2 3号井戸・246号住居址 (南から)	
	3 3号井戸付近全景 (北から)	
図版102-1	C水田北半部 (南から) 2 C水田 (西から)	
図版103-1	C水田の畦畔と8号溝 (南から)	
	2 8号溝 (側道 西から)	
	3 C水田 (側道中央部 北西から)	
図版104-1	8号溝 (南から)	
	2 8号溝断面	
	3 C水田畦畔断面	
図版105-1	C水田畝線列 (東から)	
	2 C水田畝線列	
	3 C水田畝線	
図版106-1	C水田下11号・12号溝 (北から)	
	2 C水田下遺物出土状態	
	3 C水田下遺物出土状態	
図版107-1	F A水田北半部 (南から)	
	2 F A水田南半部 (北から)	
図版108-1	F A水田 (手前) とC水田 (奥) (北から)	
	2 F A水田の冠水状態 (北から)	
	3 F A水田大畦と小区画 (南から)	
図版109-1	F A水田の畦畔と水口	
	2 F A水田の冠水状態	
	3 8号溝とC水田区画 (北から)	
図版110-1	F A水田の畦畔と足跡	
	2 F A水田中足跡の拡大	
	3 F A水田調査風景	

図版111-1, 2, 3	F A水田 (側道 南西から 北西から)	
図版112-1, 2	1区畝址 3 2区畝址	
図版113-1	1号溝 2 2号溝 3 3号溝 4 4号溝	
図版114-1	5号溝 2 6号溝 3 7号溝 4 13号溝	
図版115-1	4号溝断面 2 14号溝 3 16号溝	
図版116-1	26号溝 2 28号溝 3 4号, 36号溝	
図版117-1	36号溝 2 29号溝 3 40号溝	
図版118-1	24号溝 2 34号溝 3 37号溝	
図版119-1	1号方形周溝墓 (南から)	
	2 1号方形周溝墓 (南から)	
	3 1号方形周溝墓前方部 (北から)	
図版120-1	1号方形周溝墓土層断面図	
	2 1号方形周溝墓土層断面図	
	3 1号方形周溝墓北東隅C軽石上出土土器群	
図版121-1	1号土坑 2 7号土坑 3 11号, 12号土坑	
図版122-1	13号土坑 2 30号, 31号土坑 3 50号土坑	
図版123-1, 2	36号土坑 3 69号, 70号土坑	
図版124-1	123号土坑	
	2 151号土坑	
	3 152号 (中), 153号 (左上), 154号土坑	
図版125-1	155号土坑 2 158号土坑 3 205号土坑	
図版126-1	192号土坑 (南から)	
	2 192号土坑馬歯出土状態	
	3 192号土坑付近全景 (南から)	
図版127-1	199号土坑緑輪出土 (西から)	
	2 199号土坑緑輪脱胎出土状態	
	3 205号土坑遺物出土状態 (西から)	
図版128-1	1号竪穴状遺構	
	2 3号竪穴状遺構	
	3 4号竪穴状遺構	
図版129-1	5号竪穴状遺構	
	2 5号竪穴状遺構	
	3 6号竪穴状遺構	

表 目 次

第1表	熊野堂遺跡II地区住居址一覧表	311
第2表	熊野堂遺跡II地区竪立柱建物址一覧表	311
第3表	古墳時代C水田計測表	343
第4表	古墳時代F A水田計測表	344
第5表	熊野堂遺跡II地区溝一覧表	349
第6表	熊野堂遺跡II地区土坑一覧表	358
第7表	熊野堂遺跡II地区竪穴状遺構一覧表	371

第3節 掘立柱建物（第184図～189図，図版96-1～99-3）

掘立柱建物址は、2区、3区、4区の3箇所から約100mの距離をおいて合計10棟が確認された。これらは、重複する遺構との関係や柱穴掘り方の特徴の2点から、遺物からの明確さを欠くが奈良時代のもので位置付けられる。また、2区での掘立柱建物址自身の重複例や棟方向のちがいは、大別して新旧2時期のあったことと、周囲や隣接地に尚、多数の柱穴相当のピットがあることから、建替えのあったことが十分に考えられる。さらに、平行、直行する棟方向からは、2～4棟を単位とする計画性のある建物配置が復元される。特に、奈良時代から居住域となった2区では、梁や桁の方向を同じくする4号、7号、36号といった区画溝に囲まれた、南北約50mの区画内での建物配置が復元され、住居群と対応しつつも1区、2区の中で中核的な存在として位置付けられる。

この時間差を持ち、竪穴住居とやや画されて群在する傾向は、北のI地区、東へのびるIII地区や鉄塔用地調査区（第10節）でも見られ、掘立柱建物が居住域を区分する指標となり、かつ中核をなして集落全体を構成すると考えられる。

ここでは、群在する分布傾向を基に、住居群との対応関係から、I地区を北群、II地区の2区を南群、III地区をII地区10号を東一1群、鉄塔用地調査区を東一2群とし、II地区のものについて個別の特徴をあげた後に、II地区を主とした全体構成と配置についてのべる。

個別の平面図は第184図～第187図に、法量、重複関係等の特徴については第2表に集成して示し、全体の配置については第188、189図にまとめた。

1号掘立柱建物址（第184図，図版96-1、96-2、96-3）

規模は、東西2間、南北1間の東西棟で、辺長は、南と北が360cm、西が260cm、東が275cmである。東西方向はN55°Eを測り、2号～4号、7号と近似する。

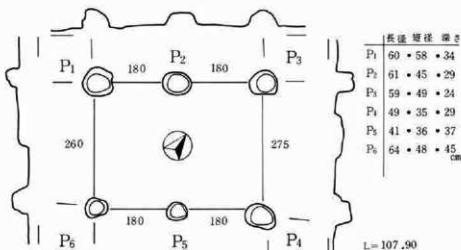
柱穴は、長径で41～64cmの隅丸方形から円形を基本とし、深さは24～45cmを測る。柱痕は確認されていない。中央部から西桁間にかけて70住、76住と重複するが、本址が最も古い。東梁間線上の小ピットを始めとして、周囲を含めて直径24～32cm、一段浅い掘り方のピットが4基あるが、関係は不明である。

2号掘立柱建物址（第184図，図版96-1、96-2、97-1）

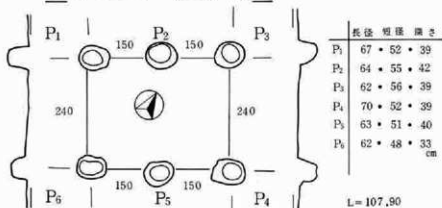
規模は、東西2間、南北1間の東西棟で、辺長は南と北が300cm、東と西が240cmである。東西方向は、1号と同じN55°Eを測り、南北に並列する1号と3号の中間的な位置を占める。

柱穴は、長径で62～70cmの隅丸方形から小判形で、概して大型であることを特徴とする。深さは33～42cmで柱痕は確認されていない。また、西梁側の中心線上で対をなす位置に小ピット2基がある。直径26～28cm、深さ16～22cmで、梁間からの芯々で60cm、ピット自身は110cmの間隔にある。位置から見て、入口に関する施設か、庇に伴うものと考えられる。

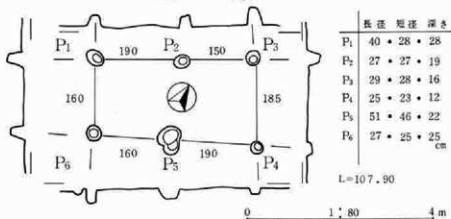
1 号



2 号

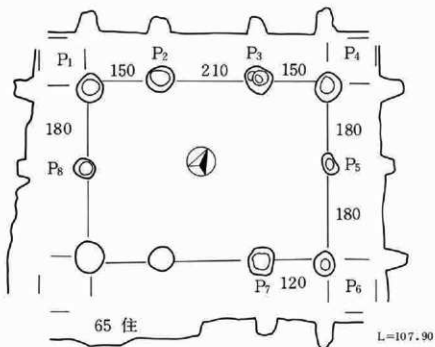


4 号



第184図 1号・2号・4号掘立柱建物

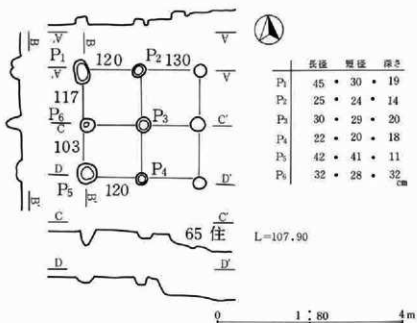
3号



	長径	短径	深さ
P ₁	57	52	35
P ₂	57	54	23
P ₃	58	53	28
P ₄	58	53	40

	長径	短径	深さ
P ₅	48	30	22
P ₆	45	46	43
P ₇	45	40	28
P ₈	45	36	27

5号



	長径	短径	深さ
P ₁	45	30	19
P ₂	25	24	14
P ₃	30	29	20
P ₄	22	20	18
P ₅	42	41	11
P ₆	32	28	32

3号掘立柱建物址 (第185図, 図版96-1、96-2、97-2)

規模は、東西3間、南北2間の東西棟であるが、南西隅側は64住から66住との重複のために消失している。辺長は、南と北で510cm、東と西が360cmで、東西方向はN65°Eである。東西の桁間については180cmを基本とするが、南北の梁間については120～最大210cmまでと一定しない。面積としては、庇部分を除いた7号に相当し、棟方向の近似することと合わせて1号～4号までのものでは中心的な建物と考えられる。

柱穴は、長径で45～58cm、深さ22～43cmの隅丸方形を基本としている。柱底は確認されていない。南西側は、軸方向を変えて5号が重複した上に64住から66住が切っている。

4号掘立柱建物址 (第184図, 図版96-1、97-3)

規模は、東西2間、南北1間の東西棟で、辺長は北が340cm、南が350cm、東が185cm、西が160cmを測り、接近する1号から5号の中では最も小型である。東西方向はN60°Eで3号に最も近い。

柱穴は、長径で25～51cmと一定しないが円形から方形で、深さは12～28cmである。1号から5号の中では、小ぶりの掘り方である。隣接する3号とは50cmの余地しかなく、掘り方の特徴と占地のあり方からすると、最も後出する建物であろう。

5号掘立柱建物址 (第185図, 図版96-1、98-1)

規模は、2間四方の総柱で辺長は南北方向で少し歪んでいるが240cmを基本としている。東側では、3号と棟方向を約30度ずらして重複している所を64住に切られ、消失している。

柱穴は、長径で22～45cmの円形を基本とし、深さ11～32cmを測る。中でも隅の柱穴は、西辺で見る様に一段と大型の掘り方を持ち、小判形をしているが各隅に共通するものと推定される。

棟方向は、8号、9号と近似し、4号、36号溝とも同様で溝に区画された中に配置されている。

6号掘立柱建物址 (第186図, 図版98-2)

規模は、東西2間、南北2間の東西棟で、辺長は北が320cm、南が315cm、東が335cm、西が310cmで東南寄りに少し歪んでいる。

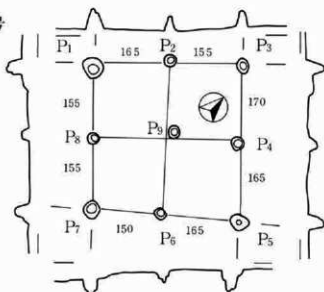
柱穴は、長径で22～43cmの3円形から隅丸方形を基本とし、深さ23～53cmである。周囲を含めて20基を越す大小のピットがあるが、57号土坑に接した直径24cm、深さ14cmのものを加えると総柱の可能性はある。占地の上では、2区と4区の間で単独で位置するが、周辺に密集する(第186図参照)ピットの様子からすると、2区の一団よりは時期が少し下がるが複数で一団を形成した可能性がある。

7号掘立柱建物址 (第186図, 図版98-3、99-1、99-2)

規模は、東西3間、南北2間の総柱の東西棟で、南面に奥行130cmの庇が付設されている。東南隅は、調査区域外に当たるために未確認である。辺長は、北が492cm、西が378cm、庇部分を含めると502cmで南と東についても同様な数値と推定される。

柱穴は、長軸で56～76cmの隅丸方形を基本とし、深さ28～55cmを測る。庇の柱穴と東柱は、やや小

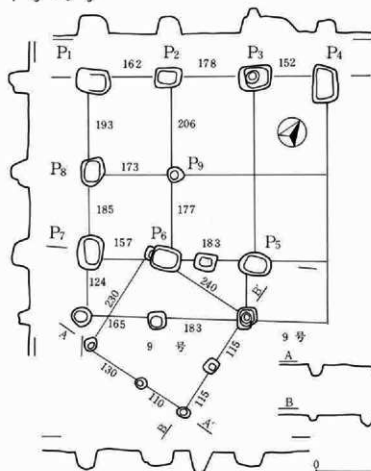
6号



	長径	短径	深さ
P ₁	43	41	43
P ₂	26	25	31
P ₃	30	24	33
P ₄	27	27	15
P ₅	39	29	29
P ₆	24	20	13
P ₇	34	32	43
P ₈	24	24	19
P ₉	27	26	10

L=107.20

7号・9号



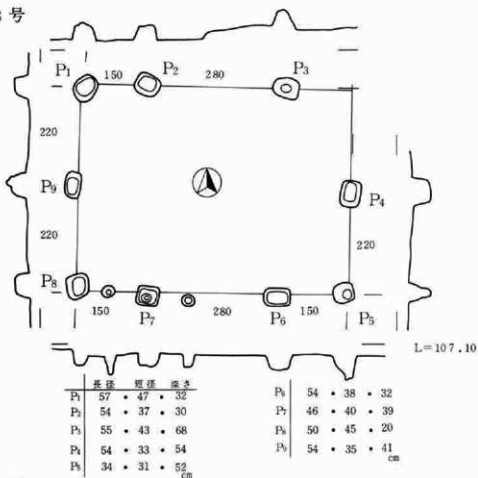
	長径	短径	深さ
P ₁	70	50	40
P ₂	54	42	42
P ₃	64	52	54
P ₄	76	48	28
P ₅	66	48	32
P ₆	62	48	46
P ₇	72	52	48
P ₈	60	52	34
P ₉	22	20	22

L=107.20

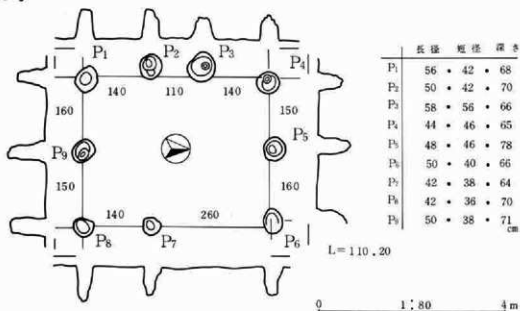
0 1:80 4m

第186図 6号・7号・9号掘立柱建物

8号



10号



第187図 8号・10号獨立柱建物

ぶりの方で10cm前後浅いのが特徴である。柱痕は、北辺の東側2本に顕著な状態で見られたが、直径26cm、24cmの円形で掘り方面下約10cmまで掘りこんでいる。

柱穴の配置は、各辺で長軸を同一線上にのせるが、隅を少し斜交させるのが特徴である。また、南梁間の中央には、やや小型の方形柱穴があり、入口施設に相当する。

占地上は、遺構がやや希薄な中にあるが、東北側で244住を切り、南西側に棟方向を約45度ずらして9号が半分程重複している。全体の構成では、1号から4号までと近似する棟方向をとり、一群を構成する。その中でも、底部分を除いても3号の18.4㎡を上回る19㎡という面積を持ち、しかも総柱で底を持つといった構造からも主屋に相当するものと考えられる。

時期は、244住との重複に疑義を残し、明確な時期決定遺物の出土がないが、近似する1号から4号との棟方向の近似、柱穴掘り方の類似する点から、2区の一群の中では奈良時代でも後出する第II期とする。

8号掘立柱建物址（第187図、図版99-3）

規模は、東西3間、南北2間の東西棟で、東北隅を未確認としている。棟方向は、南梁でN92°Eである。辺長は、南が580cm、西が440cmを測り、北と東もこれに近似すると推定される。

柱穴は、長軸で34～57cmの隅丸方形を基本とし、深さ20cm～68cmを測る。東西の桁間は、220cmで一定するが、梁間は中央が280cmと大きく開口する反面、桁寄りが150cmと狭いのが特徴である。南梁間は、入口施設を備えるためか、中央寄りと西桁寄りに各1本の円形で一段浅い掘り方の補助柱穴がついている。柱痕は、南梁で1本確認されたが直径18cm、掘り方底面下19cmの深さで、7号等の例と大差がない。柱穴の配置は、7号に見た長軸平行は同様で隅柱の斜交が一層明瞭である。

全体の構成では、5号、9号と近似した棟方向を持ち、2区の中でも第II期に相当する。特に、方向からは、4号、36号溝が平行と直交の位置関係にあり、各建物を計画的に配置するための区画を示している。この中で8号は、7号に続く面積25.6㎡を持ち、遺構が希薄な中に作られたという点では、主屋の性格を受け継いだものといえる。

9号掘立柱建物址（第186図）

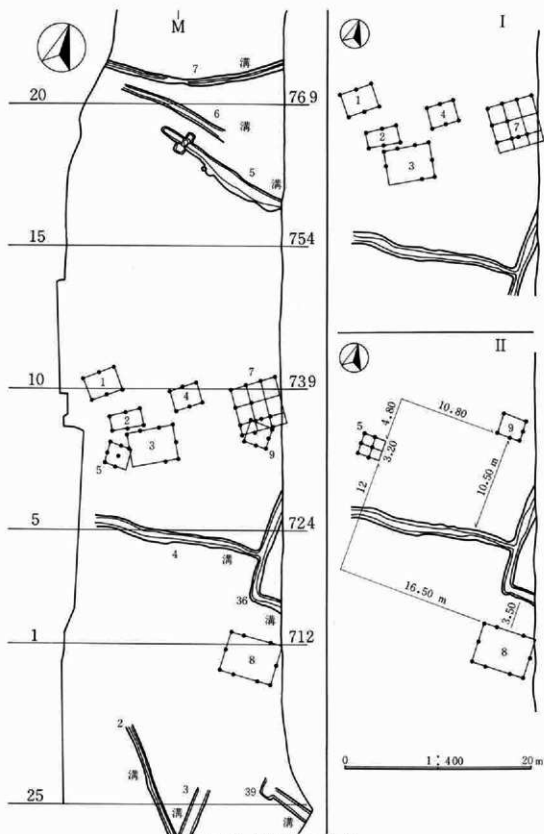
規模は、辺長240cmの2間四方であるが、北と西の2辺について中心の柱を欠いている。全体は、棟方向を約45度ずらして7号の南梁から底部分に重複し、東北隅では柱穴が同じ位置にある。

柱穴は、長軸24～35cmの方向で、深さ20～25cmを測る。その規模と特徴は、西にある5号と類似し同一の企図で作られた建物であり、全体配置の中では5号、8号とともに第2期に位置付けられる。

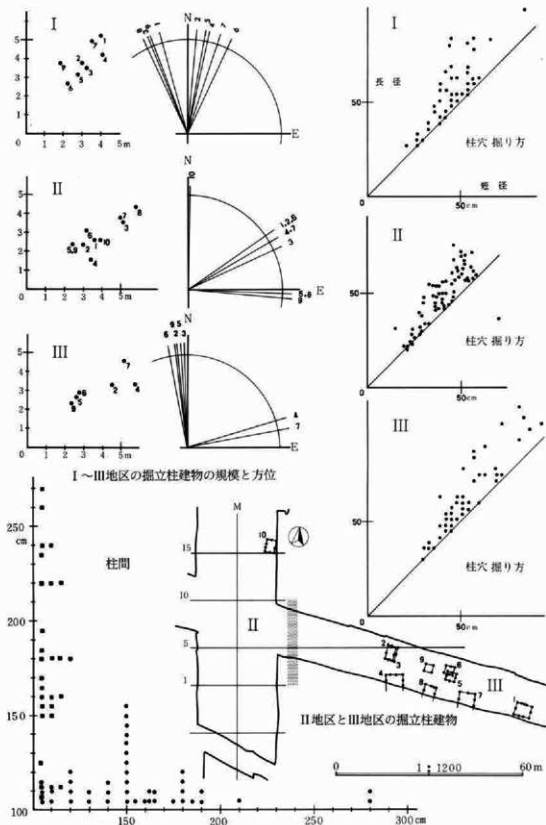
10号掘立柱建物址（第187図）

規模は、東西2間、南北3間の唯一の南北棟で、Ⅲ地区のものと一緒に構成する。辺長は、東西とも400cm、南北310cmで、柱間は110～160cmで梁間が広い。

柱穴は、長径で38～58cmの円形を基本とし、深さ65～78cmを測る。柱痕は、P₁が直径16cmで、P₆、P₈も同様である。P₁からP₈は、2～3基が20cm前後ずらして重複し、建替えが考えられる。



第188図 掘立柱建物全体図(1)



I～III地区の掘立柱建物の規模と方位

第189図 掘立柱建物全体図(2)

小 結

II地区の10棟について、1. 規模と構造 2. 全体の構成、について検討する。

1 規模と構造

10棟の平面上の観察では、柱穴の形状と掘り方の規模、棟方向、総柱か否か、建物自身の規模の4点で個別の特徴をもっている。まず、柱穴の形と掘り方の規模から見ていくと、第189図に示した様に長軸という50cmを前後して①、20~35cm ②、40~55cm ③、55cm以上の3つに集中域が見られる①は長短が近似値で円形の掘り方で4~6、9号が該当し、総柱式で10cm以下の建物である。②と③は所謂小判形の隅丸長方形の一群で1~3、7、8、10号が該当し、東西棟の10㎡以下と20㎡を前後する主屋的な大型建物である。重複関係からは②と③が古く、①は後出する。

棟方向は、10号の南北棟を例外に東西を基本とするが方位の点では次の3群となる。① ほぼ南北方位の10号、② N55°~65°Eの1~4、6、7号 ③ N92°~95°Eの5、8、9号である。5号と9号は、それぞれ3号と7号との重複関係で後出し、総柱式、小型の柱穴掘り方という特徴で群を異にするが同一方位グループの8号を含めて時期を異にした一群と考えられる。この東西棟に限った方位は、②群から③群への推移がたどれるが、掘立柱建物自身に限定されず、カマド重線に見る竪穴住居の方位の変化、特に7世紀から8世紀を通じてのものと大勢に於いて近似し、平面構成に於いて相互に関連のあった結果と判断される。

建物自身の規模は、柱穴規模との関連が強く②と③群が面積でも幅をもっている。これは、柱間寸法でも同様で総柱式のもの110~130cmにピークがあり、それ以外の150cmとピークを異にする。しかし、7号や8号の大型建物については、南面桁間に入口施設なのか補助柱穴があったり、柱間を広くする工夫がされていてほかと区別される。規模の点からは、平面積、柱間、南面桁間に庇をもつなどの点で7号と8号を、時期を異にした主屋的な性格をもった建物と考えたい。

2 全体の構成

10棟は地点として2区、3区、4区に分かれ、3区の6号を除いて各10棟前後、2時期以上の一群をなすと考えられる。この中で掘立柱建物だけでなく、周辺にある遺構との関連が面的に考えられる2区の一群の構成と推移を見る。

2区の一群は6号と10号を除いた8棟がある。占地は、FP土石流の堆積で平坦化した低地部分、台地寄りにあり、前代までの住居が散在する中にある。時期は棟方向のちがいがら2時期区分をしたがその微差と平面位置から細分も必要である。構築時期を直接示す資料はないが、下限は1号と76住の重複で9世紀後半、上限は後述する6溝等と80住の重複から8世紀前半と考えられ、住居の主軸方位との近似値からすると8世紀後半~9世紀初頭頃と考えたい。

全体の構成では、棟方位の大別から第188図に示した1期と2期があり、1期では不確実だが2期になると、その近似する方向から4~7号、36号溝が区画として出現している。近接しては3号や39号といった溝もあり、住居群の区画を含めて、集落全体の中で占地されていたと考えられる。5~7号溝は台地縁辺の排水路としての性格が強いが、4号と36号溝は併存する区画を意図したもので、36溝

の北延長線上には10節で報告した2号と3号溝、さらに熊野堂遺跡VII地区として既報告の15号、16号溝があり、この各々2本の溝を側溝とする道路状遺構の一部と考えられる。全体の構成では、冒頭にも述べた様に区画性の高い溝や道路状遺構で集落は分割されており、掘立柱建物群は住居群を対応する中核的な存在として位置付けられる。その中で2区の一帯は、南北約50mという占地をする点で8世紀代のある時期を画する集落内の拠点的な施設と考えられる。

第2表 熊野堂遺跡II地区掘立柱建物跡一覧表

規模の単位:cm

No.	構造	方位	規模	柱穴の特徴	備考
1	1間×2間 東西棟	N-55°-E	桁間 260 梁間 360 9.36㎡	掘り方は隅丸方形~小判形、柱痕は未確認、深さ29~45cm	70住、76住が切る、2号、3号、4号と軸が平行
2	1間×2間 東西棟	N-55°-E	桁間 240 梁間 300 7.20㎡	掘り方は隅丸方形~小判形で大型、柱痕は未確認、深さ33~42cm	1、3、4号とはほぼ平行、直交の位置
3	2間×2間 東西棟	N-65°-E	桁間 360 梁間 510 18.36㎡	掘り方は大型で円形を基調、柱痕は未確認、深さ22~43と一定しない	1、2、4号と軸が平行、64、65住より古い
4	1間×2間 東西棟	N-60°-E	桁間 160 梁間 340 5.44㎡	掘り方は小型で円形、柱痕は未確認、深さ12~28cmで隅が深い	1号と3号との間にあり棟方向を近似させる
5	2間×2間 総柱	N-92°-E	桁間 240 梁間 240 5.76㎡	掘り方は小型で円形、柱痕は未確認、深さ11~32cm、東梁側は住居との重複で未確認	65、66住と重複のために東桁間は推定
6	2間×2間 南北棟	N-55°-E	桁間 310 梁間 320 9.92㎡	掘り方は小型で円形、柱痕は未確認、深さ15~45cmで隅が一段深い	128、139、148住と重複
7	2間×3間 総柱 南面庇	N-60°-E	桁間 380 梁間 500 19㎡	掘り方は隅丸方形で大型、柱痕あり、深さ25~35cm、南に同じ柱間、掘り方での庇がつく	24住→7号掘立+9号掘立 柱穴フタ土から8~9代の長妻破片出土
8	2間×3間 東西棟	N-92°-E	桁間 440 梁間 580 25.52㎡	掘り方は隅丸方形~長方形で大型、深さ30~48cm、隅は軸に斜交する	軸方向は5号と9号に平行し一帯をなす
9	2間×2間 東西棟	N-95°-E	桁間 240 梁間 240 5.76㎡	掘り方は方形で小型、深さ16~20cm	7号の南側に軸を35°南にずらして重複
10	2間×3間 南北棟	N-1°-E	桁間 310 梁間 390 12.09㎡	掘り方は直径45cm前後の円形、柱痕は15cm前後、深さ64~71cmと一定する	191、192住を切る、田地区の掘立柱群と関連

第4節 井戸 (第190図、191図、図版100-1、101-3)

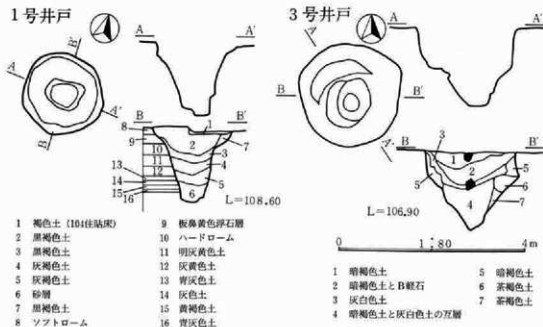
井戸は、北の第I地区での特殊井戸2基を含む17基という数や、第II地区自身での住居数に比較して極端に少なく、台地上から2基、低地から1基の合計3基が確認されたにすぎない。

構造は、確認時いずれも素掘りのままであったが、3号の様に上部に木枠を推定させる掘り方と土層の埋没状態を示すものがあり、全体が上部構造等の点で一樣でないことがわかる。

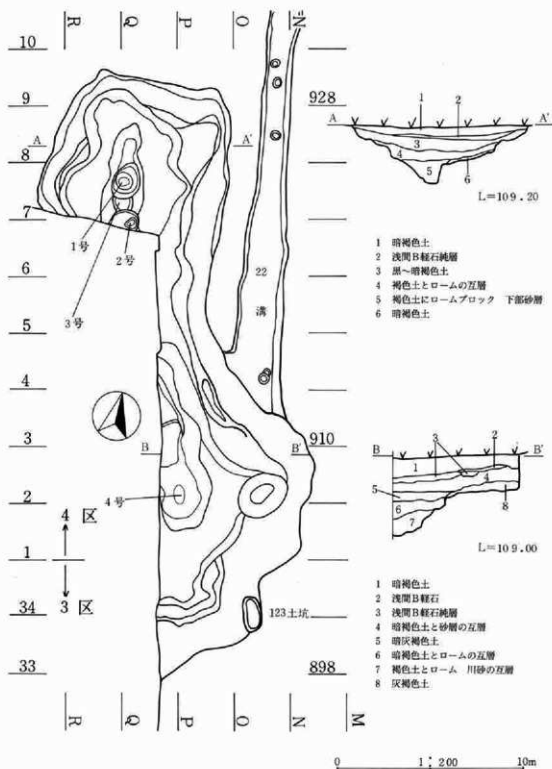
遺物は、明確に共存するものはなく、使用時期については、隣接する遺構との重複関係や埋没土中に見られた浅間B軽石の状態からの推定である。3基の中で、3号は、重複する住居構築に際して人為的に埋没していることから平安時代前半以前とされ、その位置からして4号、36号溝といった区画溝内に配置された独立建物群に付設されたものと考えられる。台地上にある1号と2号は、自然埋没で、やや長期にわたる使用が考えられるが、3号に後続する。

2号は、規模と構造の点で第I地区にある2基の特殊井戸に年代と性格で後続するが、一步台地縁辺に寄った位置、極端に深くなった底面高からすると、供給対象、湧水点の変化があったと考えられる。また、底面に4基の掘り方を持つことと、埋没土上位に浅間B軽石のあることからすると長期にわたる使用が考えられる。

以上の様に、第II地区の井戸は、2号の7世紀末頃を年代上の上限とした奈良、平安時代にかかるとのもので、飲料用を主体としつつも、田畠への灌漑用の性格も合わせ持つと考えられる。



第190図 1号・3号井戸



第191図 2号井戸

1号井戸（第190図，図版100-1）

104号住居址の床面下で確認された。規模は、上面径170cmの略円形、深さ160cmを測り、断面は緩やかな傾きを持って底面に至る。確認面下約130cmには、木枠の軸木据え方跡と推定されるテラス状の中段部分が四隅に近い位置で認められ、底面自身にも桶様の据え方痕か、径40cmの円形でさらに一段深くなる。その底面は、ローム層下約1mの青灰色シルト質土に達している。埋没土は6層からなり、主に浅間C軽石を含み、第5層中には弥生時代後期樽式の甕胴部破片があった。最下層の第7層は砂層を主体にしており、使用期間中の流入砂であろう。

時期は、埋没土中の浅間C軽石や樽式土器の存在からすると、古墳時代前期頃とできる。ほかの遺物は、主に下位層から中期竜見町式小型甕、後期樽式の高杯、上位層から平安時代9cから10c代の甕、羽釜、杯、椀、蓋と磨滅した平瓦、剝片が出土している。上位層のものは、細片が殆どで接合不可能の磨滅したものが多く、流れこみの混入遺物と判断される。

2号井戸（第191図，図版100-2、100-3）

第II地区と既報の第III地区西側交差点にかかって確認された。規模は、南北約32mのヒョウタン形を呈し、西辺側の大半が調査区域外のため未調査である。その形状と規模の点で、第I地区にある2基の特殊井戸と性格を同じくするもので、時期の第I地区の2号特殊井戸に前後する。

全体形状は先のとおりだが、存続期間内に使用乃至関連したと推定される溝が3条合わせて確認されている。この溝は、井戸自身の湧水高と溝底面の高低差約3mから見て、北から接続する22溝は導水路、27溝、3区1号、2号溝が南への導・配水路の性格を持つと考えられる。

井戸は、全部の4基の源泉部とした底面の中でも一段深い不整形の掘り方がある。北端寄りで重複する3基、南の中央近くで同様に重複が考えられる1基がある。この源泉部の様子からすると、全体が南北に二分された構造になる。

覆土は、南北4本のセクションベルト合せて32枚の土層に細分される。底面から2.40m上にある2層が浅間B軽石層で上面は広く、厚さ15cm平均で覆っている。中段の掘り方面であるテラス状部分までは、厚さ20～30cmの暗褐色土、褐色土が均一に堆積しているが、源泉部掘り方上面から以下は壁の崩落土と流入堆積土が入り組んだ状態で堆積している。源泉部上半部は、崩落したロームブロック大塊が埋め尽くすかの様にあり、所々に隙間さえあり、堆積が短期間のうちに充填しきらないうちであった状況にある。底面近くは、壁のシルト質崩落土である砂質土が3枚堆積している。

遺物は、磨滅を受けた土器破片が約2,000点あり、弥生土器から10c代のものまで多岐にわたっている。最も新しい資料は、浅間B軽石層の存在と相俟って、埋没末期を示しているようだが、上限については遺物からは弥生土器まで測り得るものの軽石等を伴ったものではない。殆どは埋没に伴って混入したものであるが、弥生時代後期の樽式甕を始めとして、周辺の遺構で示される時期の遺物を漏れなく含んでいる。

遺構の時期は、浅間B軽石で示される埋没末期を下限とし、東辺南寄りでも重複する鬼高I式4区15住を上限とした中にある。また、東南際近い法面に作られた10世紀後半に墓塚、123号土坑の存在からすると、この時期には、機能喪失していたと考えられ、9～10c代にかかる竪穴住居群が井戸との直

接の重複は勿論、溝との重複さえもないことからすると、奈良時代を上限とし、9～10c前半頃まで存在しその後、源泉部の人為埋没を経て急速に埋没が進行し、浅間B軽石降下頃には凹地形から平坦化が進む程になっていたと考えられる。

性格は、先述のとおり、第I地区にある2基の特殊井戸を継承したものであるが、底面は先の2基に比較して一段と深くなり、台地肩部の湧水を集めて下位の平坦部に配水する灌漑用のものである。

3号井戸（第190図、図版101）

243、245、246号住居址の床下であり、確認した上面は直径210cmの略円形で深さ170cmを測る。断面は、深さ90cmの箇所に奥行30cm程の棚状のものが見られるが、底径1に対して上径3のロート状を呈する。この棚状部分を境にして、覆土は上下に大別されるが上半部の中には246号住の陥没した貼床が含まれている。厚さ5～10cm前後の薄い互層状態からは、住居構築に際して人為的に埋没したことがわかる。また、上下に大別される覆土からは、上半部にのみ四角形の木枠のあったことが考えられる。時期は、出土した少量の土師器壺、杯の特徴からだけであるが8世紀代と推定できる。この時期からすると、2区を中心とする掘立柱建物群に付随する井戸と考えられ、建物群の廃棄に伴い、人為的に埋め戻されたものと推定される。

第5節 水田と畠

熊野堂遺跡第II地区の6次に及ぶ調査で画期となり遺跡の評価を変えたのが、昭和50年度の第3次調査での2面に重層する水田址の発見であった。1989年現在、県内では100遺跡を越すとされる水田址の調査の中でも、当時広域に及ぶものとしては高崎市日高遺跡に次ぐ例として、後に「小区画水田」と呼称される古墳時代後期の例としては最初であり画期的なものであった。

調査から報告までに13年余りが経過し、後続する調査例が激増した中で今日的な評価と意義を見出すのに資料は一様ではないが、詳細な検討は第4分冊「まとめ編」におくとして、本節ではこれまでに発表された基本的な事実の報告としたい。

本遺跡の生産址は、本報告の二ツ岳F A下、浅間C 軽石下の2面に重層する水田址とは別に、後述する集落内の一部に占地するミニ畠、平安時代末頃の畠がある。また、既報の第I地区では浅間C 軽石下の畠が、第II地区の水田址と同時期のものとして、さらには第III地区では第II地区の重層する水田址の上にはなかった浅間B 軽石下の水田址が占地を異にして部分的に確認されている。

以上の様に、本遺跡では各占地を異にするが居住域を取り囲んで、あるいは居住域から生産域に転換させての各時代の生産遺跡が確認されている。墓域の存在は明らかでないが、集落の中での時代相毎の大づかみの居住域と生産域の推移と画期を見ることができる。

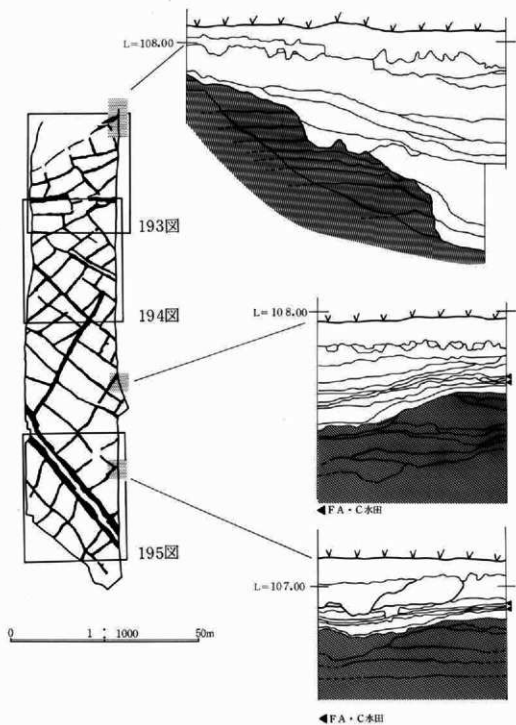
1 水田の発見

県内では水田の発見は昭和36年に群馬大学史学研究室が調査した勢多郡赤城村宮田畦畔遺構が最初である。その後は県内での大規模開発に伴う沖積地での調査の増加で、広域に及ぶもの、重層するもの、弥生時代、古墳時代、あるいは平安時代以外の中・近世のものなど特徴に富む例が知られている。それは最初の発見を端緒にして、生産遺構に対して認識が深まったことも大きな要因だが、県内における同定上の共通認識としては浅間山や榛名山二ツ岳を供給源とする火山噴出物に対する研究と理解といった点も見がしてはならない。

本遺跡の内容は、同一占地内で時期を異にして重層すること、大畦区画から後に小区画水田の名を生むミニ水田への区画の変化がみられる点で特徴を持つが、その後に調査された遺跡例を加えても今日的な評価を得る資料である。以下、水田名称はC水田、F A水田と略称する。

註

- 1 山本良知 1961 「宮田畦畔遺構調査概要」『群馬大学史学会時報』第25号
- 2 生産遺構に関して県内の例を集成、概観したものに次がある。
森田秀策 1978 「群馬県下における水田址の調査」『月間 文化財』181号
群馬県立歴史博物館編 1980 「新発見の考古資料 発見された古代の水田」
平野進一 1980 「北関東西部における水田遺構」『考古学研究』第29巻第2号
佐登 健 1983 「群馬県下における埋没水田址調査の現状と課題」『群馬県史研究』17
小島敦子 1988 「V 関東地方における稲作農耕の開始と展開」『日本における稲作農耕の起源と展開』
横倉興一 1989 「群馬県の畑跡調査の現状」『第2回 東日本の水田跡を考える会——資料集——』
- 3 石川正之助 井上地雄 堀沢重昭 松本浩一 1979 「特集・火山噴出物と遺跡I」『月刊 考古学ジャーナル』157
新井房夫 1979 「関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層」『同上』157



第192図 C水田・FA水田基本土層図

2 浅間C軽石下水田について(第192～第195図, 図版102～105)

占地 水田址は、第1章第2節の地形の項でのべた低地部分でFA水田と重層して占地する。現在の地形では、台地上が標高109～109.50m前後なのに対して低地部分が107.50m前後と1m強の段差であるが、C水田形成前には2m近い段差があって一帯は鉄分の凝集する黒褐色粘質土の様子からすると低湿地化していたと推定される。それ以前には沖積世に入って埋没と平坦化が進行した河道があり、低湿地はその最終時の様相であろう。その黒褐色乃至黒色粘質土は、井野川沿いの芦田貝戸、御布呂遺跡等でも見られるもので水稲耕作の適地・適土である。

水田は、旧河道(1区25グリット付近～2区25グリット付近)を中心とした低湿地化していた範囲に占地しているが、耕土の発達状況からすると旧河道付近では厚い黒褐色粘質土の上層を耕土に代えているのに対して、南端の井野川までは地山のシルト質土が一段高く、地山との間に漸移層様の粘質土の堆積が薄く、北側に合せて開田したと考えられる。耕土上面での標高は、南端の2区画(番号は第207図参照)は106.50m、中央部付近の22区画が106.20m、台地縁辺近くの71区画が106.70mで旧河道中央部付近に相当する50区画周辺は埋没土の沈下を成因とする陥没で旧状の数値とは考えられないが、南北両端が高く、旧河道中央部が低いことが後述する区画からも推定される。尚、西側に隣接する現在の水田面からは約4m、井野川の現河床からは約5m高い。

規模と範囲 調査した面積は南北約150m、東西24mの約2,100㎡である。範囲は北端のみが判明しただけで残る3方向については広がるのが十分推定される。南方向は井野川の崖端にまで続き、対岸の融通寺遺跡からも水田址が確認されており、占地と区画を同じくする一連の遺構で井野川により寸断されたものと判断される。東西方向は、台地縁辺の様子からすると旧河道を中心にした現在の標高109m以下の地形にその範囲を推定することが可能である。また、井野川の西対岸にある高崎市立水生公園内にあった二ツ岳F土流に削られた残丘断面(昭和57年の公園造成工事で消滅)でも本遺跡と同じ2枚の水田面が確認されており、井野川上流方向沿いにある芦田貝戸、御布呂、同道遺跡と基本的には灌溉水系を異にしただけの不連続ながら一面の水田址と推定される。

区画 区画は、調査担当者の細野雅男氏によると大区画と小区画の2種に大別され、等高線に沿う配置をしているが旧地形でいう台地への緩傾斜地付近では主に大区画、谷地形付近では主に小区画とされており、占地在異なることとされている。また、区画に見る方向性のちがいがあり、重複関係が示唆されている(群馬県史 資料編2 1986)。本節では、重複ありと見た時に先行すると考えられる大区画だけを取り上げて法量の集計、図化し報告している。

区画の大きさは種々であるが、大区画は2.80×4.80m～6.70×12.6mである。形状は、長方形を基本としているが面積と畦畔の方位とでちがいが見られる。このちがいは等高線に沿った区画配置の結果と考えられるが、旧河道付近の粘質土が厚く軟弱と思われる40～60区画付近は20m前後の狭いものが主体で長方形だけでなく、三角形や菱形等の変形したものが見られる。一方、地山が一段高くて粘質土が薄い南の1～40区画付近は大畦を基本にして長方形の計画的な配置をしたものが多い。以上の様に区画の実態は計画的ではあるが、地山の強弱、耕土となるべき粘質土の層厚と状況とに密接に関連している。また、下幅が50cmを越す大畦が区画の中で基本となり、8号溝の南北では対称的に配置された様子が典型的に見られる。

畦畔 大畦と小畦の2種がある。

大畦 下幅70～110cm、高さ8～15cm、断面方台形を基本とし直線的な方向で区画の基準となる。

小畦 下幅25cm前後、高さ5～12cm、断面は丸みをもった台形で直線や弧状に配置され、直接に区画を構成する。

大畦は6本確認されたが、8号溝に伴う水路護岸の幅広いものと単独で区画の基準になるものがある。6本は、占地及び区画上の意図が優先し、4号と5、6号が平行するものの全てが平行乃至直交の関係にはない。3号は区画の基準とした好例だが、規模と方位を同じくしてその位置はFA水田にまで継続されている。また、畦が補強されたり、一部がつけ替えたりしている例も確認されている。具体例としては、8号溝の護岸である6号で色調整により、畦本来の部分と所謂一時的な「くろ」を貼った箇所が見られたり、4号でも当初設けた畦を補強した上に「L」字形に小畦を設けて26と27の区画を、28と29の区画を新たに仕切ったことがわかっている。以上から、大畦の機能としては、半ば恒久的な施設であるのに対して、小畦は微地形や水回りに適宜合わせて一時的に設けたものと考えられる。

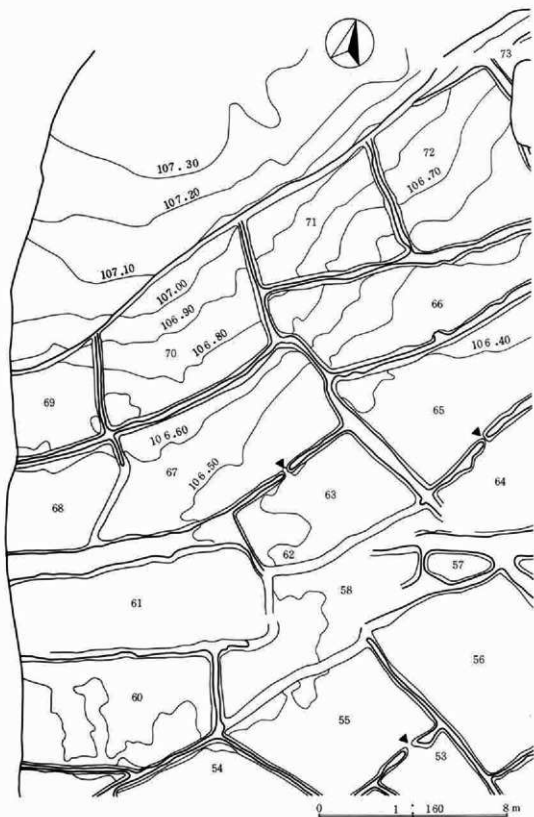
畦の用土は、大小に区別なく一様に耕作土と同質の粘質土である。下面での鉄分凝集は、大畦が多く、小畦に少ないことから適宜つけ替えや「くろ」の貼付がされたものと考えられる。また、8号溝の護岸用を含めて畦に杭が打ちこまれるか、畦の中に自然木等を敷きこんだ形跡はない。

水口 26、31、47、52、55、67の区画で6箇所が確認された。構造は、畦の一部を間口30cm前後に切っただけのもので、特別に土や石を置いた例はない。設置場所は、畦の中間にあるものが4例で、畦の交点上や畦沿いの際よりは一般的である。

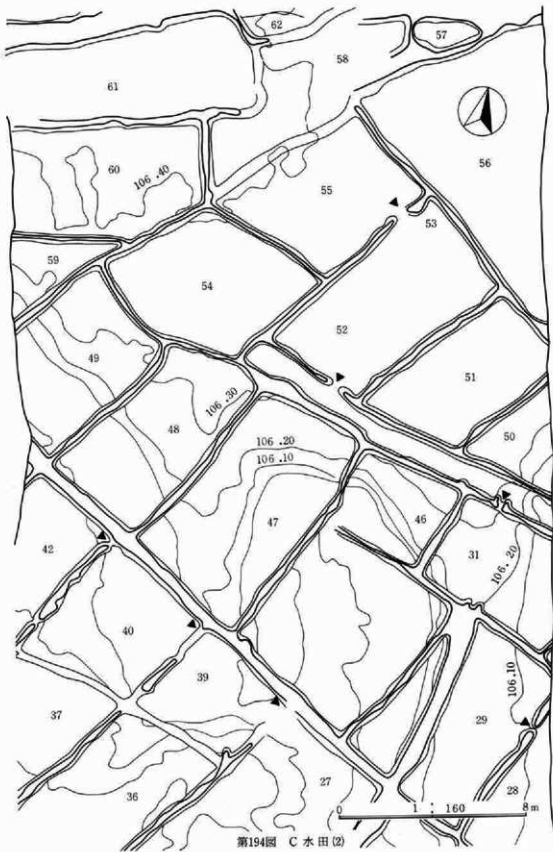
耕作土 灰黒色～青黒色の粘質土で、層厚は地山のシルト質土との関係で一様ではないが約7cmである。断面観察では、表層から厚さ1～3cmの灰黒色粘質土、次いで5cm前後の黒色粘質土、黒褐色粘質土と続いて地山に接するのがわかる。地山との境界には管状の鉄分凝集が交錯し、全体の粘質土中には腐植物が富んでいる。プラント・オパール分析では、イネ科植物の存在と水田耕作のされたことが確認された（詳細は第4分冊「まとめ編」に掲載）。また、透水実験の結果からは、保水性が良好であることが確認されている。

水路 幹線水路の8号溝と50～54区画等が接する「帯状区画」の集水溝、73区画へ通ずる小規模な水路の3本が確認されている。この3本は機能を異にし、旧河道中央部付近に自然勾配を利用して所謂掛け流しした水を集める帯状区画を、旧河道の両岸である台地縁辺には表流水や湧水を一定範囲に導水するものと、地山が一段高くて安定した南岸に多量の水を集めて下流方向に導水する8号溝とを配置した構成になっている。この点は、より低地では自然勾配を最大限に利用し、高所では集めた水を一定方向に確実に導水することを意味している。全体の灌漑方法については、8号溝の勾配等から北西方向の延長線上の台地縁辺に取水源を推定させるだけで、具体的には上記のほかは不明である。

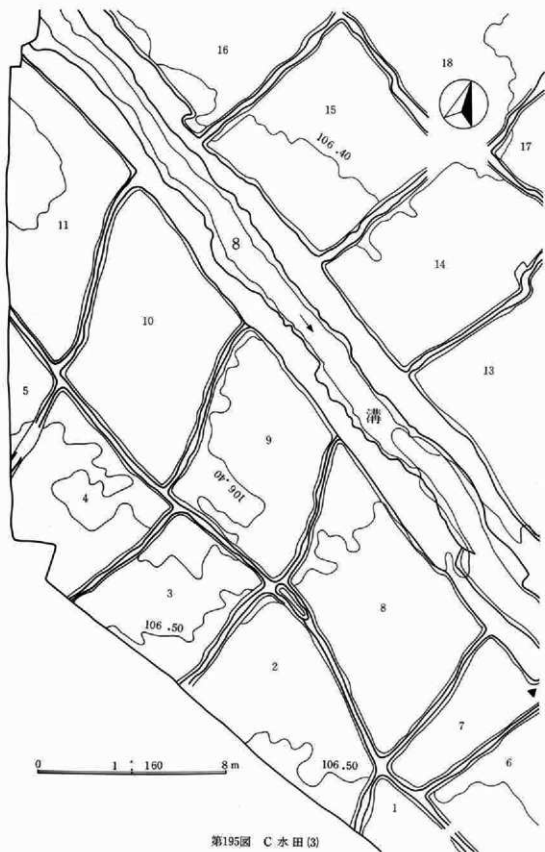
8号溝は、調査区域の南限付近を北西から東南方向へと直線的に設けられている。両側は、上幅1m前後の大畔で護岸され、規模は上幅約1.2m、深さ約60cmで、東西両端での高低差は約10cmで東南方向へ導水している。内部には、水田面以上に明瞭な足跡が多数残り、半ば干上がった頃に埋没したことが推定される。全体は水田と同様に浅間C軽石で埋没しているが、鉄分の沈着状況で軽石は上下埋



第193図 C 水田(1)



第194図 C 水田(2)



第195図 C 水田(3)

没土中には、底面上で直径1mm程の川砂層が厚さ3～5cm程に見られ、水量を伴った流水にあったことがわかる。

また、溝には護岸用の大畦が崩落した跡が認められ、季節を推定させる何回かのつけ替えが考えられる。崩落の箇所は、12～13区画が面する長さ3m程の範囲で溝内に表層の粘質土がズリ落ちた様になっている。底面の足跡は、この崩落をよけて全体に蛇行し時差のあったことがわかる。この付近を断ち割りしたところ、掘り方に相当するシルト質土の面で内部を横断して一段高く土手状に掘り残しており、ここに止水様の施設があって崩落の誘因になったとも考えられる。

溝の埋没土と大畦の断ち割り断面で観察された、崩落とつけ替えまでの過程は次の様である。

- 1 溝の構築——大畦の護岸を両側に付設する
- 2 溝の使用——川砂の堆積、鉄分の沈着
- 3 大畦の崩落——崩落土は川砂の上にいる
- 4 崩落部分を残して全体を蛇行させてつけ替える——再使用

この状態は、第6次調査の側道敷用地だけで確認されたもので、全体に及ぶものではないが、溝自身のつけ替えだけでなく、先述した畦の補強や一部つけ替えと一連のものであろう。また、第3次調査の本線敷用地では8号溝が畦畔を切っていると報告されているが(群馬県史 資料編2)、側道敷分ではその関係を明らかにできなかった。

一方の帯状区画は、2号大畦と4号大畦とで大きく三角形に区画された、ほぼ中央にある。両側は周囲の小畦よりは一段高い畦をもち、底面は平坦で水田と大差がない。水口は31区画と52区画に面しており、先の三角形内の集水と下位面への導水を意図したものであろう。

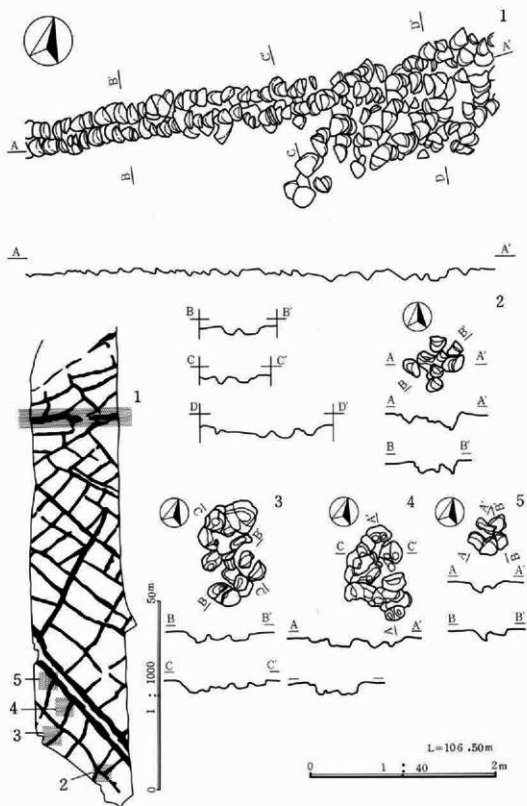
3 C水田上の鋤跡について(第196図、図版105)

耕土の上面で5箇所鋤跡と推定される痕跡が確認された。第196図にその位置と状態を示したが、例をなす帯状と方1m前後の団塊状の2形態がある。その共通点としては、(1)明らかに耕土を切っていること、図中の1の様に水田区画を無視して直線的に伸びる例や2の様に畦上にあるものが好例である。(2)位置が畦上にあるものが多いこと、水田の区画内を意図的に外して、その用途を畦の修理と暗示させるかの様である。また、足跡と重複する明確な例はない。

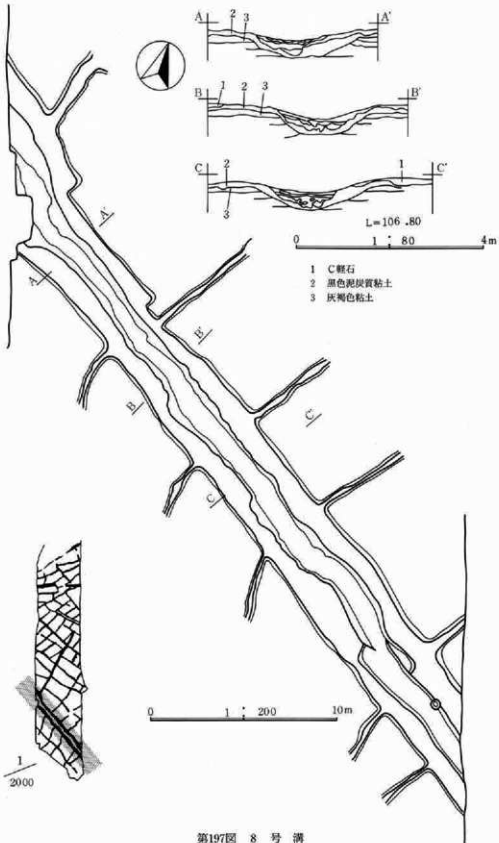
痕跡の形状 代表例で見ると幅が15～23cm、奥行10～12cm、深さ5～10cmの法量前後が一般的で、深い方の先端や少し丸いのが特徴である。この丸さは一様に観察できることから農具の端部形状を示すと考えられ、具体的にはナスビ形着柄鋤をあてたい。調査担当の一人である内田憲治氏は「踏み鋤」説である。断面形状の角度は90～100°前後である。

作業単位 帯状のものについては、蛇行気味の中に痕跡自身の切り合いと作業単位を示すと考えられるまとまりが見られる。図中の1では、2列を基本とし長さ50～80cmを単位としている。切り合いからすると同一の幅の中で2回以上の作業が繰り返されている。一定の幅とその間隔からは、目的にそった極めて規則的な仕事ぶりが復元される。同一の箇所作業が繰り返される団塊状の例も同様である。

用途 先述した位置としっかりした形状の2点から、区画内から水の引いた後の畦の修理と水口のとり切りを推定したい。



第196図 C水田跡跡列



第197図 8号溝

4 C水田下の遺構

遺構は、8～12号の溝4条、44～46号の土坑3基が確認された。溝は広域に及ぶ可能性がある。

確認状況

C水田の調査終了後、地山と下面での遺構存否を確認するために7箇所の試掘が実施され、結果は上記のとおりである。分布状況は第198図に示したが、1区と2区の東側道は8溝を除いて実施していない。確認はC水田耕土である黒色粘質土を厚さ10～20cm前後、除去して行われ、遺構と判断した基準は埋没土が地山とちがうこととした。溝については、掘り方や埋没土に安定した状態と共通点が見られ、走向の点でも上面のC水田との関連性も考えられる。しかし、土坑は第198図にも、掘りこみらしいものをもちながら土坑と判断されなかったものが12箇所以上あり、区別する基準としては掘り方形状の状態が最大の理由である。また、2区の最も台地寄りのL～N-16～24グリットにかけては凹地形をなし、アシかヨシ科と推定される植物茎痕が一面に多方向で見られ、水田形成前の湿地状態と推定された。

溝について

溝は黒茶褐色～茶褐色粘質土前後に掘りこみ面をもち、底面は黄白色砂質土に違っている。規模は上端で40～60cm、深さ15cm前後を測る。北西から南東への傾きをもつ8～10号と北東から南西への11と12号があり、地形勾配に平行と直行に近い関係である。12溝は、北端が幅広くなり、埋没土中には火山噴出物らしい白色砂粒の下位に複数枚のうすい炭化物層があり、埋没が間断をもって進行したことと2区北側の凹地形に連続させることを予測させる。9～12溝は、C水田形成以前の自然地形との関係を否定できないものとする。8溝はC水田の基幹水路としてその上限や耕土のすき替えを考える人工の溝と断定できる資料である。第3次の本線敷用地では両側に護岸を意図する大畦を配して直線のかつ上幅2m前後の規模で確認されたが、第6次の東側道用地では護岸や上限に関する資料が得られた。規模は一定するもの、明らかに護岸とした両側の畦が構内に一枚ずれた様に落ちこみ、部分的に蛇行させている。底面も掘り残しと思われる一段高い土手状のものがあり、さらには下面に方形の掘りこみや北東から南西にむけて走向をもつ溝状のものが部分的に確認されている。これらは、溝の最終底面に残る足跡列とは方向や層位を別にするもので、土の性状が近似することから短い時間帯の中でのC水田の上限を示すものである。

8溝自身はC水田の基幹水路として、水田同様浅間C軽石で埋没、廃棄されている。占地では、1区25グリット以南の地山が一段高くなる部分を東南流し、両側の畦の機能からすると隣接する水田の余剰水を集水するのではなく、上流で集水されたものを確実に下流へと導配水することを目的としている。構造は、一段地山中にあるため大畦下には護岸用に木を伏せることも杭を打つこともなかったらしい。加えて足跡がほぼ連続する様子からすると、何箇所か両岸に蛇行やずれが見られるが堰等の止水施設は現状の範囲ではない。

土坑について

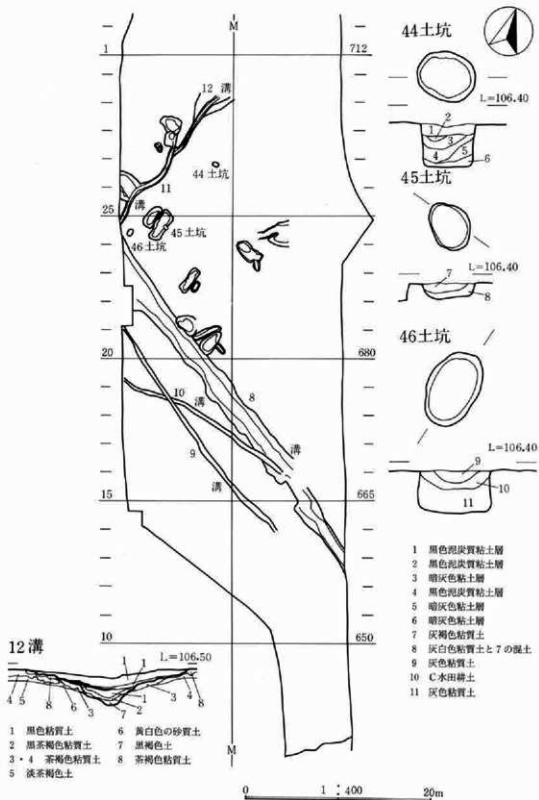
土坑は溝と同一の面で確認されたが、掘り方の差から当初の15箇所以上の中から3基が取り上げられた。規模や埋没土に共通点をもつが、残るものとも同様で自然の凹み穴とすることも否定できない。

炭化物について

第198図にあって土坑とされなかった12例中2例の上面にうすい炭化物層が見られた。範囲は1×2 m程でわずかに棒状の形状と乱雑な方向をもつらしいことがわかる。焼土痕は2例ともない。同様なものは12溝の埋没土中にうすく2枚に、2区北半の台地基部寄りでは「ヨシ科」らしい植物茎の沈着層がある。性格は、自然遺物で水田形成前の植生に関係したものか、不整形の土坑らしいものと合わせて立木の根が炭化したものとも考えられる。

遺物について

2K・L-2～8グリットで弥生時代後期樽式の壺2個体が縄文時代中期の深鉢破片、剥片とともに出土している。壺1個体は所在不明で残りが報告となったが、図版106で見る様に出土層位にちがいが見られる。報告個体は、明らかに水田耕土中ながら破れ口は磨滅し、混入の可能性が高い。一方の報告もれは耕土との間に厚さ約20cmの間層があり、埋設土器の可能性もある。



第198図 C水田耕土下の遺構分布図

5 ニツ岳F A水田について

水田は、浅間C軽石の上に黒色粘質土が堆積した後に、畦畔を作り水田化したもので、所謂「小区画水田」と呼称されるものである。前述のC水田とは同一の占地形態を持ち、4号大畦はC水田の3号大畦と殆ど同一の位置で重複しており、全体も上下に重層する。

以下、C水田と同様に占地、規模と範囲、区画、畦畔、耕作土、水路の項目に分けて述べる。

占地 前代のC水田は、浅間C軽石により埋没、廃棄されているが、軽石の降下、堆積によっても旧河道を中心とする低地部分の地形は大幅に改変されなかった。

F A水田は、基本的には前代までの占地形態を踏襲している。唯一、異なる点は、北端の台地縁辺の様相で、C水田が緩傾斜面にまであくまでも等高線に沿って区画を配置していたのに対して、この時期には斜面としたままで区画を設けた形跡はない。これは、C水田が自然勾配を巧みに利用して水利優先の意図から地形を改変したのに対して、F A水田は方形を基本とする区画優先の意図から規格性、計画性が重視され、斜面での利用がなかった結果と考えられる。

標高は、全体にC水田よりも約15cm前後高いが、北端の台地縁辺で106.50m前後、これを区画の北限とする。中央付近の240区画(番号は第207図参照、以下同様)付近で106.70m、南端近くの70区画付近で同じく106.70mを測る。C水田と同様に、旧河道中央部付近と8号溝のあった帯状の範囲では土圧のために陥没が見られ、等高線が乱れている。旧河道での最深部は226区画付近で106.10mで最大で60cmを越す高低差が周辺区画との間で見られる。

規模と範囲 調査した面積は、南北約130m、東西24mの約2,400㎡である。

範囲は、台地縁辺の北端のみが判明しただけで、残る3方向については十分広がることが推定される。南端は、井野川の崖端にまで続いているが、対岸の融通寺遺跡ではC水田は見られたものの、この時期のものは確認されていない。しかし、明確な南端については、当遺跡内で取まるのかは断定できない。東西方向は、C水田と同様にさらに広がると推定されるが、北端の台地縁辺の様相からしてC水田の範囲とは異なって規格性の強い限定されたものだろう。また、井野川をはさんだ西対岸には同じくC水田と重複したこの時期の水田が芦田貝戸、御布呂遺跡で広い範囲にわたって確認されており、関連があるものと推定される。

区画 総数で426面が確認された。大区画と小区画の2種があり、占地形態を異にしている。

大区画は、台地縁辺寄りに占地し、比較的太い畦で区画されたものをさす。420～426の7区画が該当し、形状は東西方向を長軸とした長方形が基本である。大きさは、最大の421区画で縦7.6m、横7.9m、面積34.25㎡を測り、C水田の平均値26.43㎡を上回り、残る大半もこの数値に前後している。占地の点で、大区画が台地縁辺部特有の形態とするかは断定できず、断片的ながら小区画と推定される413～419区画の様相からすると、むしろ部分的か、水利の点で小区画と対をなして機能したと考えたい。

小区画は、2号大畦以南の全域に広く分布し、一見して大畦で区画された中に碁盤の目の様に配置されたのを最大の特徴としている。形状は、東西方向が少し長い方形か長方形である。大きさは、縦

0.9~2.8m、横1.3~3.8m、平均面積3.33m²である。他時期及び現代の水田と比較して、一区画が非常に小さいことが特徴である。

全体の配置は、基本的には等高線に沿ったものと推定されるが、区画形状をC水田と比較すると、不整形や三角形、菱形といったものは見られなくなり、一段と規格性並びに計画性が高まっている。その中で基準となり得るのが6本の大畦で、南北方向については14~21mの間隔(3号と4号 21m、4号と5号 14m、5号と6号 15m)で平行する3~6号の4本が、東西方向については3号や4号と直交に近い関係にある2号あるいは1号が全体を画している。

この大畦の間は基盤目状であると先述したが、小区画の数は3号と4号との間の北側で7列が、5号と6号の南で一部5列が見られるほかは、基本数を6列としている。区画数の多少は形状にも反映し、6列では方形が多く、5列では長方形が見られる。このことは、小区画を設ける基準が東西方向の畦畔にあることを示し、南北は東西方向に長い帯状の中を配水を考慮しながら仕切っていた結果と考えられる。これは、水口の多くが南北方向の畦畔に設けられている点、あるいは東西方向の畦畔が直線的であるが、南北は乱れた形状があるという調査時の所見等からも裏付けられる。

畦畔 大畦と小畦の2種がある。

大畦 下幅60~140cm、高さ15cm前後、断面方台形で、直線的な走向をもち区画の基準となる。

小畦 下幅25cm前後、高さ10cm前後、断面は丸みをもった台形で直線的に配置され、直接区画する。

大畦は6本が確認され、一様に区画上の基準と考えられるが、1号については台地縁部に配置されたもので機能を異にするとも考えられる。全体には、先述した様に平行や直交に近い位置関係にあり、第207図でもわかるとおり、1号がC水田の1号大畦と、4号が同じく3号大畦と規模に若干の差が認められるが、ほぼ同一の位置にある。これが区画の点でF A水田がC水田を踏襲したのか、それとも偶然の結果なのかは判別できない。各水田を台地上の居住域の動きに合わせて考えると、古墳時代前期後半と中期後半との間で現時点までの調査資料からは断絶があり、水田の連続性、区画の踏襲を説明できない。

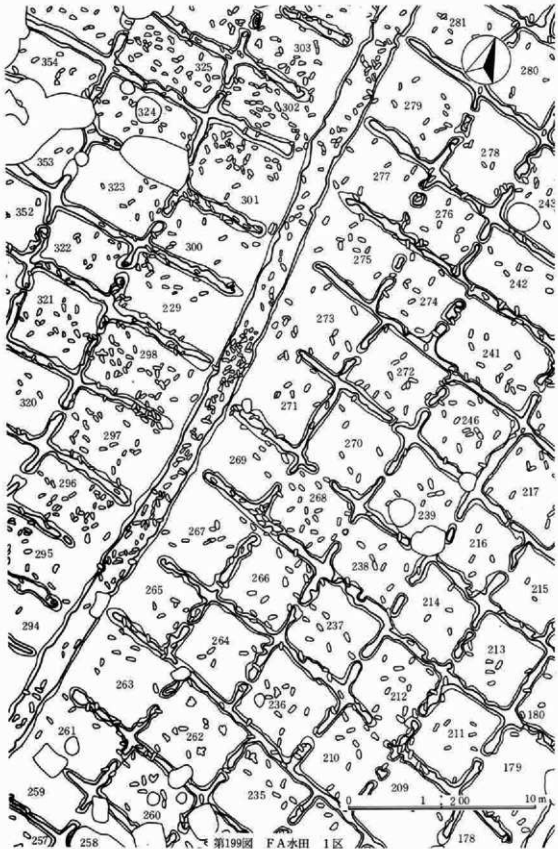
1号大畦は、台地縁辺を段状に削りこんだうちの最下段とも見られるが、6本のうちで唯一、畦の中に420、421区画を迂回して292区画へと続く、小規模な水路が付設されている。また、台地縁辺には大畦と平行して幅広の水路がある。規模は、下幅で130~260cm、高さ10cm前後である。

2号大畦は、大区画水田と小区画水田を画する位置にある。3号と4号とはほぼ直交の位置関係にあり、北側に大畦が分岐する。規模は、下幅で90~140cm、高さ10cm前後、弧状をなす。

3号大畦は、2号が分岐するもので北東隅の一部だけが確認されたにすぎない。規模は2号と同様と推定される。

4号大畦は、C水田の3号大畦とほぼ重複する位置にあると記したが、南北方向の4本の中でも最も大きく基準とみてまちがいない。規模は、下幅で約70cmで高さ10cmを越す。長さは約46mが確認されている。

5号大畦は、4号と6号との間にあって最も小規模である。下幅で40~50cm、高さ約10cmである。唯一、水口をもつ例で10箇所が確認されている。ほかと比較して区画との調整で一時的に設けられた可能性が高い。



第199圖 FA水田 1区



第200図 FA水田 2区

6号大畦は、下幅60～85cm、高さ10cm前後である。東側に帯状に長い48区画が面する。

以上の様に6本の大畦は、配置箇所に関連性が認められるものの、規模の点で差異があり、水口をもつか否かで機能差があると考えられる。3号については詳細が不明であるが、残る5本のうちで5号が水口をもっている点で小区画設置に伴う一時的なものかと考えられる。

小畦は、区画の項でのべた様に直接に区画を構成するものだが、東西方向と南北方向とで形状や遺存状態にちがいが見られる。すなわち、東西方向が直接的に配置され、形状もしっかりしていて、規模も南北を少し上回り、高いのが特徴であるのに対して、南北方向は少し蛇行したのや偏平化していつぶれたり、一部が途切れたりしているものがある。これは、小区画を設ける時に、東西方向が北西から東南方向に配水するために設置の基準となったのに対して、南北方向はその帯状の間を小さく間仕切っていった、先述の6列を区割りの基準としつつも調整していった結果と考えられる。従って、区割りに見る5列や7列の例外的な存在は、地形勾配の中での工夫の跡と見られる。

畦の用土は、C水田と同様に大小の区別なく、一様に耕作土と同質の粘質土が使用されている。また、大小を問わず、畦の中には自然木等を敷きこんだり、特別に杭を打ちこむなどして補強をした箇所は見られず、土の厚さを工夫することによって大小を作っている。

耕作土 黒褐色粘質土で厚さ3～5cm前後と一様に薄い。C水田の耕作土とは厚さ7cm前後の浅間C軽石を間層にして上下するが、調査中に耕作土が靴の裏につく程に薄いという印象を与える。断面観察では、耕作土中には鉄分の凝集も少なく、色調差等によって区分されることはない。また、この層厚から耕作の時期を推定することはできないが、浅間C軽石との間には何ら間層がなく、耕作土が直接のっている。浅間C軽石の上面は、耕作土面と表裏の関係で緩やかに波打った状態であるが、8号溝中の埋没土で見られた鉄分の沈着で上下に区分されることもなく、耕作中に平坦にされたか、あるいは水田を作る時に全体の勾配を調整するなどして平坦にした可能性もあろう。

水路 2本が確認され、帯状で区割りのない48区画に水量調整用の集水溝あるいは集水枡の可能性がある。

全体の灌漑方法については、地形勾配でもある北西から東南方向へと所謂「掛け流し」をしたと考えられる。取水源は、C水田と同様に北西方向の台地縁辺と推定されるが、全体の様相からすると取水源からは台地縁辺に幹線水路を配置し、そこから分岐する導水路で大畦で区画された各区画へと引水、各区画は掛け流し方法と推定される。その具体的には2本の水路と2号水路から4号大畦と5号大畦で大きく区画された中に引水した状態である。

水路による上記の方法とは別に420～426区画といった大区画も、集水、配水の枡としての機能があると考えられる。2号水路に面する420、421区画では4箇所の水口が付設され、等高線からは2号水路を通じて引水された水が還流することも可能と考えられる。水口は、残る5区画にも共通するものではないが、等高線に平行して区画が設けられることも合わせると台地縁辺の水が直接に各小区画に入らず、一時に多量の水を保持できることから所謂「ヌルメ」の機能をもっていたと考えられる。

1号水路は、台地縁辺を東西に弧状に配置されたものである。規模は東西で一定しないが、2号水路を分岐した結果と考えられる。下幅は、西端で1.2m、東端で約30cmと極端な差がある。勾配は、西から東で、標高106.50～106.60mと高低差約10cmである。

2号水路は、1号から「L」字形に分岐したもので特定区画（群）への導水を目的としたものである。位置は水路と同じく1号大畦から分岐した大畦の上に設けられ、西側は420、421区画に面して4箇所の水口が設けられている。規模はほぼ一定し、下幅で20～50cmを測り、南北での高低差は約10cmである。

以上が両側に畦畔をもつ一般的な水路の例とすると、集水溝とも考えられる48区画は、420～426区画と同様な多量の水を調整する機能をもったと考えられる。規模は、東西1.3～1.5mで南北約23mを測る。内部は、周囲の水田区画と大差ないが平坦な様子が見られる。部分的な確認で断定できないが、40と41区画の境から畦畔らしいものが西へのびており、南北に2分される可能性がある。この48区画に面する35～47区画が東西に一樣に長いことから、6号大畦の中で当初から東西方向を伸縮させて調整して設けた区画である。

同様なものは、前代のC水田でも見られたが占地と機能でちがいが見られる。占地の点では、C水田が自然勾配で最も低い位置にあって、等高線に直交し、その高低差を利用して文字通り集水しただけなのに対して、FA水田では地山の安定した一段高い位置で等高線に斜交乃至平行し、面する東側の各区画に一樣に水口を設けていて、一律配水したと考えられる。このちがいは、時期差による灌漑技術の向上の跡を見ることができる。C水田の時期には自然地形を巧みに利用していたものが、この時期になると人工に水量と水流を調整、制御するに至っている。

足跡 水田として調査したほぼ全域から、形状、遺存状態を異にする多数の足跡が確認された。その残された場所は、区画内に限らず大小の畦の上、あるいは水路中にも一樣に見られた。その中でも第119、200図で見られる様に、大畦の上や水口付近に集中するか、特に多い傾向が見られる。

その状態は、区画を超えて直線的にのびた歩行の跡を示すものと、複数の区画内を回遊するかの様な不定方向、団塊状のものがある。

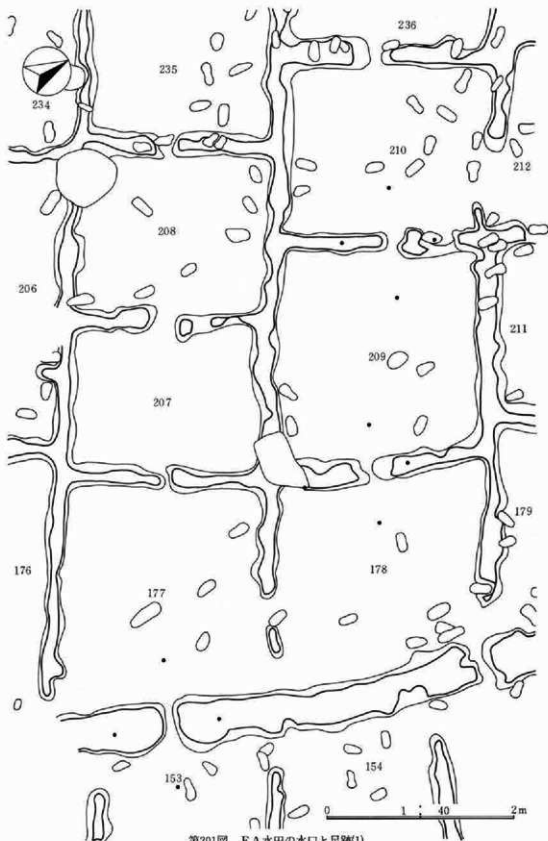
足跡自身は、耕作土が軟弱であった頃につけられたためか、指先までくつきりと残るものがある程で埋没前の様子を推定させる。大きさは15～25cmを測る。遺存状態が良好で、指までわかる数例については石膏型を採取して型取り保存をした。

植物痕 水田は二ツ岳FAで直接に埋没しているが、FAの中にはイネ科植物の圧痕とそれの倒れたものに鉄分の凝集したものが全面で確認された。

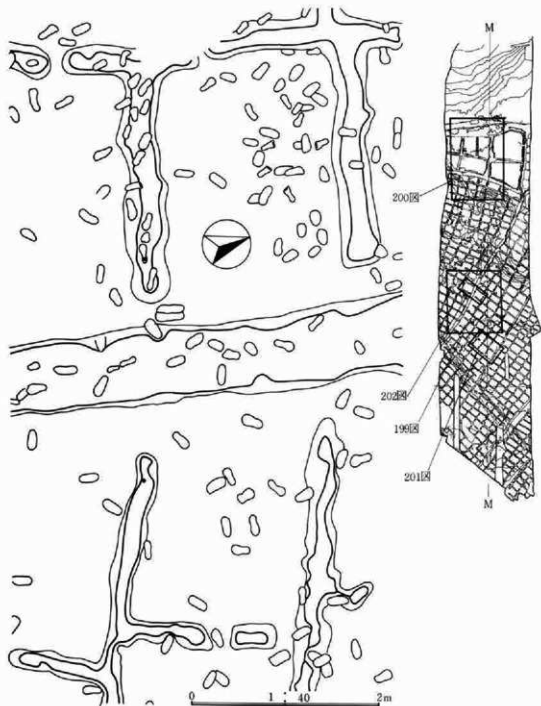
その状態を、1号大畦北側の台地縁辺の記録例で見ると、比較的密植していたものが南北2方向を中心とし倒れているのがわかる。鉄分の凝集のために、やや太くなっているが直径1cm弱の管状になっている。

遺物 第6次調査の圃道敷用地、186、224区画付近の耕作土中で土師器の壺、杯、埴の破片が少数出土している。これらは例外的な存在で何らかの状態で耕作土中に混入したと思われる。

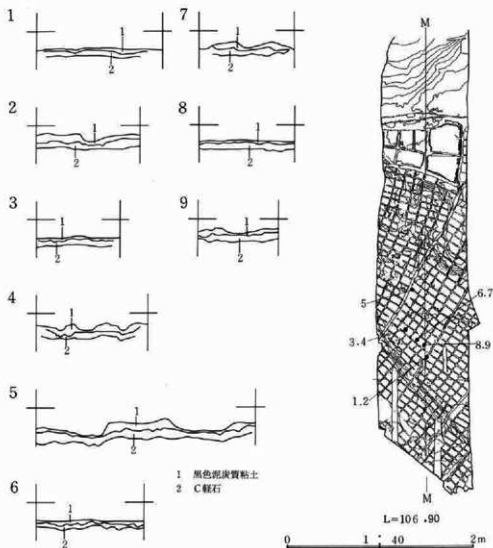
また、この限られた遺物からは水田の時期を知ることはできないが、その下限は二ツ岳FAで直接埋没していることから6世紀初頭頃、上限については台地上の居住域の動きとすると5世紀後半代だが耕作土や区画の様子からは判断できない。



第201図 FA水田の水口と足跡(1)



第202図 FA水田の足跡(2)



第203図 FA水田水口断面図

水口について 水口は大小の区画の殆どに設けられている。

設置場所 小区画の短辺、大畦と小畦との交点、大畦自身の一部である。4～6号大畦のいずれか一方の側は一樣に小畦側が寸断されている場合が多い。小区画の短辺は、畦交点上や際といった例は少なく、その殆どが第201図にみられる様に直線で東西を貫通するかの様に、ほぼ中央に設けられている。

形状 畦の一部を寸断しただけの簡単、便宜的な構造で特別に土や石を置いて補強したり、水量や水流を調整した様な形跡はない。

用土 断面観察（第202図）では、耕作土と同質の粘質土が続いている。

6 2区畠址 (第204図, 図版112-2、3)

第6次調査で東側道の2 I~K-15~21グリット付近にかけて約169㎡が確認された。その範囲は四辺に及ぶと推定されるが北約10mには台地基部がせまり、占地の限界である。ほかの遺構との関係は7、8世紀代の241、247住、5~7溝よりも新しく、9世紀以降の住居群の空白域に相当し位置と時期の関係を示している。南約20m以南にある9世紀以降の住居群に付随する畠で、斜交する溝方向からは継続された生産の場であったことが推定される。

サクの様子 5溝北側が最も良好に残り20cm程の間隔で密に重複する。断面では方向のちがいがら3面のあったこと、方向を北西から始めて徐々に北へと移したことがわかる。3面は埋土を同じくし連続している。方位はN10~15°Wである。畝の一つの幅は約20cm、深さ5~10cmで上面の削平を考慮しても大幅な変更はない。本来の形状は、5溝北での連続したものと、5溝南の様に短冊状に寸断され底面の凹凸があたかも打鋤か鋤によるかの様なものであろう。

時期 共存遺物はなく、唯一2 J15グリットの鎌に可能性がある。5溝、247住等との関係からは5溝が埋没して平坦化した上に耕作面があり、247住よりは古いことから、9世紀代と考えられる。

部分的ながら類例と推定されるものに2 K-4~7グリットの15溝を中心とした約40~60cm間隔の小溝群がある。8世紀代の掘立柱建物で構成される一面にあり、9世紀以降の住居との重複のない占地である。溝の幅や深さ、埋土の各点で類似している。面の構成は、N100°W前後の東西方向、西への広がりか推定される。

7 3区畠址 (第205図, 図版112-1)

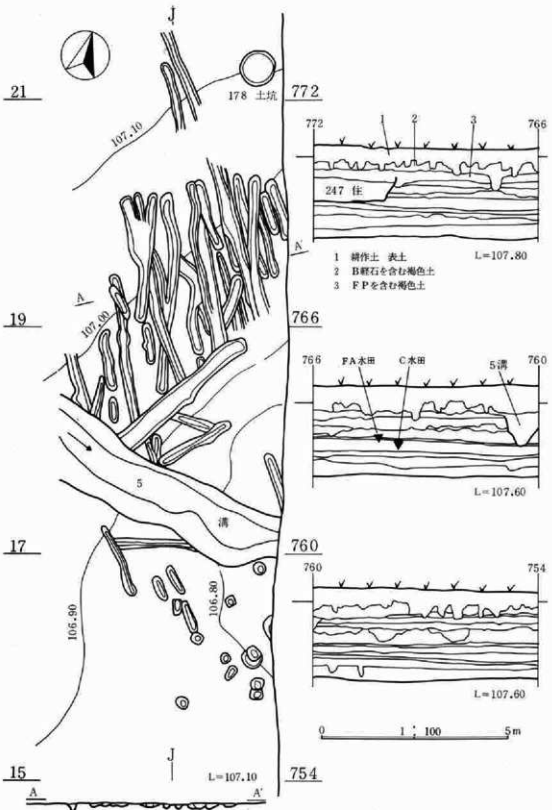
第6次調査で3 I~K-13~17グリット付近で東西幅約8m、南北長約12mの約100㎡が確認された。範囲は、サクの南北両端が直交方向の土坑で仕切られ、東西方向におお広がると推定される占地の上で極めて限定されたものといえる。

サクの様子 N15°E前後の方位で直線的に伴び、上幅約20cm、深さ5~10cmで溝状に連続する部分と円形の凹痕が寸断されて連続する部分とがある。これは2区畠址と同様に鋤か鋤による耕作痕と推定される。35溝とした幅広のものをどう判断するかにもよるが、基本的には方向や間隔のちがいがもなく一面と判断される。サク間隔は1.2~1.7mと広いのが特徴である。

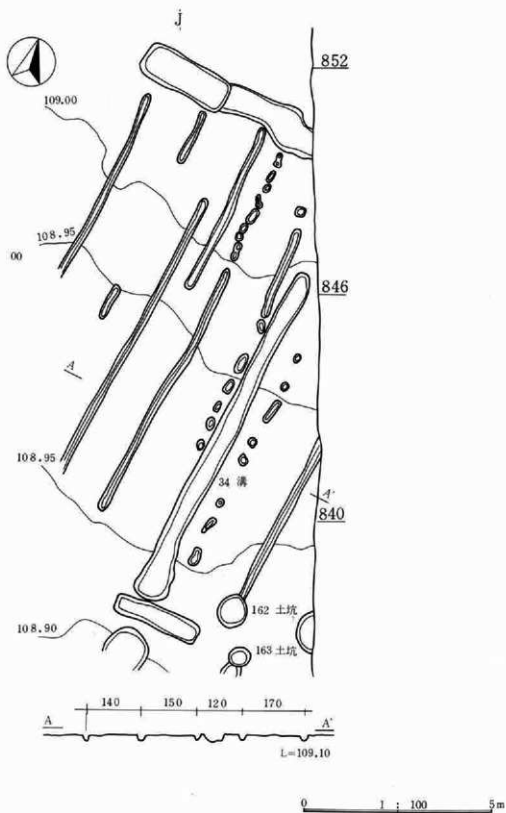
時期 直接の時期を示す出土遺物はなく、浅間B軽石をかく拌して含む暗褐色土で埋没しているのが特徴である。重複する10世紀後半の237住等よりも新しく、12世紀以降と考えられる。

8 4区FA畠址

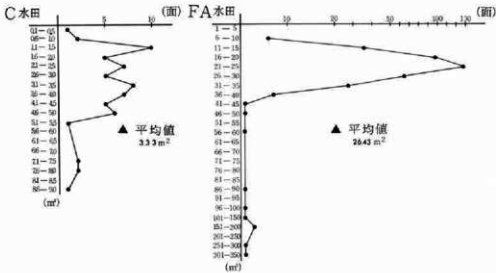
面の確認ではないが4区北半の方向を同じくするFA埋没の小溝をまとめて畠址と推定する。3箇所あって、4 I~K-27・28グリットの24溝付近、4 K20グリットの30溝付近、4 J10グリットの29溝付近である。いずれも上幅20cm、深さ10cm前後の小溝でN100°W前後の東西方向を示し、24溝からは約40cmの間隔が推定される。同じFAを埋没土中にもつ、3区3住、4区14住、4区25住に付設されたミニ畠として性格が考えられる。また、II地区とI地区の境界付近にも同様な小溝が観察されており、子持村黒井峯遺跡や淡川市中筋遺跡と似た景観が復元される。



第204図 2区畠址



第205図 3区畠址



第206図 C水田・FA水田面積比グラフ

小 結

1 C水田について

占地 旧河道を中心とした低湿地、標高106.20～106.70m

範囲 調査面積約2,600m²、現地形の標高109m以下の台地上に広がることが推定される。

区画 等高線に沿った配置 大区画は73面を確認する。一辺4～6mの長方形のほか三角形や菱形等がある。平均面積約26m²、足跡や鋤跡が残る。

畦畔 大畦と小畦の2種がある。大畦は区画設定の基準、小畦は直接に区画を構成する。

耕作土 灰黒色～青黒色粘質土で腐植物や鉄分凝集が多い。層厚約7cm。

水路 幹線専水路、特定区画への小規模な専水路、帯状区画の集水溝の3種がある。北西方向の台地縁辺を取水源とし、全体に北西から東南にむけて配水をする。

時期 古墳時代前期 浅間C軽石で埋没、廃棄されている。

2 FA水田について

占地 C水田の上に浅間C軽石を間層とするだけで重層する。

範囲 調査面積約2,400m²

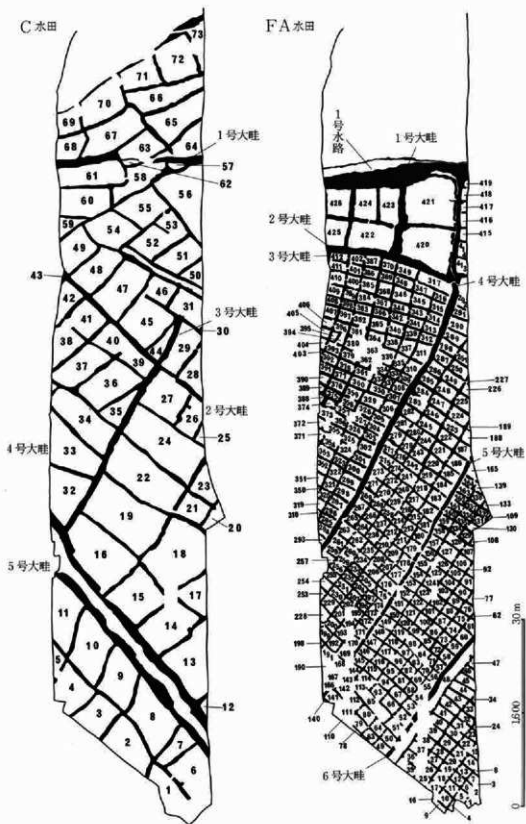
区画 大小の2種があり総数426面を確認する。大区画は台地縁辺に占地、小区画は大畦で区画された中に碁盤目状に整然と配置される。平均面積約3m²、足跡が残る。

畦畔 大畦と小畦の2種がある。小畦は大畦間を区割りする調整用である。

耕作土 黒褐色粘質土で厚さ3～5cm前後と薄い。

水路 台地縁辺をめぐる専水路、分岐する大畦区画への専水路、帯状区画の3種がある。北西方向に取水源があり、西から東方向へ掛け流し法により配水をする。

時期 古墳時代後期 ニツ岳FAで埋没、廃棄されている。



第207図 C水田・FA水田区画番号

第3表 古墳時代C水田計測表

No	縦	横	面積	No	縦	横	面積	No	縦	横	面積
1	3.4	10.7	29.0	26	5.7	3.1	16.2	51	3.8	6.7	24.9
2	4.8	8.3	36.2	27	5.9	6.8	38.3	52	4.3	5.4	22.2
3	5.7	4.9	27.7	28				53	2.8	4.8	13.1
4	4.9	6.2	31.7	29	7.8	3.4	25.6	54	6.0	6.0	33.6
5				30				55	5.2	6.1	30.1
6	6.2	7.2	42.2	31	4.0	5.4	20.6	56	6.0	8.3	53.5
7	6.7	2.5	15.6	32	7.9	6.1	40.1	57			
8	6.0	8.6	50.7	33	5.4	9.0	47.4	58	2.8	11.5	27.2
9	6.7	5.8	38.5	34	7.6	11.6	48.9	59	2.3	4.6	7.4
10	7.4	6.1	49.0	35	6.8	2.8	14.2	60	4.5	8.0	34.3
11	8.3	5.2	40.8	36	8.6	6.8	41.6	61	3.6	10.7	36.8
12				37	8.4	4.2	35.3	62	0.9	2.4	2.4
13	8.8	6.1	51.8	38	6.3	4.8	22.2	63	3.9	6.5	21.0
14	8.9	5.9	47.1	39	2.9	5.5	14.2	64	6.8	4.5	17.7
15	7.1	6.7	47.9	40	4.3	4.5	17.5	65	4.2	8.8	36.7
16	7.0	11.6	73.5	41	4.7	5.0	22.5	66	3.0	11.8	34.4
17	5.8	4.2	19.4	42	4.6	3.0	15.0	67	4.4	9.5	41.3
18	10.3	8.0	77.5	43				68	3.7	4.2	15.8
19	6.7	12.6	87.2	44	6.2	1.4	8.2	69	3.6	3.6	13.2
20				45	6.7	6.6	42.0	70	5.1	7.4	35.5
21	3.5	4.5	15.8	46	3.5	4.3	14.7	71	4.0	6.0	23.0
22	6.0	12.9	75.3	47	8.9	5.0	45.0	72	6.5	5.7	34.4
23	3.1	4.7	14.1	48	7.9	4.4	31.9	73			
24	6.1	13.2	77.3	49	4.9	5.6	27.3				
25				50							

註

表の各項目は次のことを示す。

- 番号は、水田の区画を意味し、第297図のものと同じである。
- 縦と横は、畦畔の下端の位置で計測した長さを示す。縦—南北方向、横—東西方向を示す。
計測は、 N_3 図を使用 単位—メートル (m)
- 面積の単位は、平方メートル (m^2)
計測は、 N_3 図を使用 TAMA Y A製 デジタルプランメーターで3回計測した平均値である。
- 番号以外の各項目での空欄は、区画全体が確認できず計測不可であることを示す。

第4表 古墳時代FA水田計測表

No.	縦	横	面積	No.	縦	横	面積	No.	縦	横	面積
1	1.6	1.2	1.40	54	1.8	1.9	2.16	107	1.6	2.4	1.91
2	1.2	1.4	1.00	55	1.9	1.7	2.08	108			
3				56	1.7	1.4	1.57	109			
4				57	1.6	1.7	1.66	110			
5	1.8	1.8	1.75	58	1.7	2.0	2.19	111	1.4	2.8	2.46
6	1.2	1.6	1.28	59	1.7	2.0	2.11	112	1.9	2.8	3.31
7	1.4	1.4	1.27	60	2.1	1.9	2.49	113	1.4	2.8	2.57
8				61	1.7	1.6	1.62	114	1.9	2.8	3.02
9				62				115	1.4	2.7	2.40
10	1.6	2.1	2.13	63	1.4	2.2	1.93	116	1.6	2.3	2.27
11	1.6	2.1	2.16	64	1.7	2.1	2.32	117	1.8	2.2	2.49
12	1.3	2.0	1.62	65	1.6	4.7	4.76	118	1.6	2.3	2.24
13	1.4	1.9	1.66	66	1.6	2.7	2.83	119	1.6	2.3	2.38
14	1.6	2.0	1.85	67	1.5	2.6	2.73	120	1.5	1.9	1.58
15	1.9	1.2		68	1.7	1.4	1.47	121	1.9	2.0	2.49
16				69	1.9	1.7	2.05	122	1.5	2.4	2.12
17	1.8	2.1	1.99	70	1.7	1.5	1.49	123	1.6	2.6	2.69
18	1.8	2.0	2.24	71	1.6	1.1	1.18	124	1.6	2.0	2.28
19	1.3	2.2	1.71	72	1.6	1.3	1.36	125	1.6	2.3	2.42
20	1.3	2.4	1.99	73	1.7	1.7	1.78	126	1.5	2.8	2.63
21	1.7	2.2	2.21	74	2.0	1.7	2.15	127	2.0	2.8	3.51
22	1.7	2.0	2.15	75	1.6	1.7	1.71	128	1.4	3.0	2.71
23	1.4	1.5	1.26	76	1.6	1.9	1.78	129	1.4	1.7	1.47
24				77				130	1.0	1.1	0.74
25	1.5	2.2	2.10	78				131	1.3	1.6	1.27
26	1.6	2.2	2.34	79	1.5	2.8	2.51	132	0.9	1.8	1.04
27	1.4	2.4	2.02	80	1.8	2.7	3.02	133			
28	1.3	2.3	2.00	81	1.8	2.1	2.40	134	1.4	1.5	1.35
29	1.7	2.3	2.57	82	1.8	2.0	2.21	135	1.0	2.0	1.18
30	1.3	2.6	2.24	83	1.6	2.0	2.00	136	1.2	1.8	1.28
31	1.3	2.7	2.33	84	1.6	2.0	2.05	137	1.0	1.8	1.13
32	1.1	2.6	1.70	85	1.4	2.2	1.97	138	1.4	2.0	1.70
33	1.6	1.8	1.68	86	1.9	1.8	2.21	139	1.2		
34				87	1.6	2.0	2.05	140			
35	1.4	3.4	3.09	88	1.6	2.1	2.07	141	1.7	2.3	2.41
36	1.4	3.3	3.00	89	1.5	2.2	2.08	142	1.6	2.3	2.21
37	1.6	3.1	2.88	90	1.5	2.2	2.14	143	1.6	2.1	1.92
38	1.5	3.1	3.12	91	1.6	2.1	2.02	144	1.6	2.0	2.11
39	1.7	3.2	3.20	92				145	1.4	2.1	1.97
40	1.3	3.2	2.52	93	1.7	2.1	2.30	146	1.5	2.5	2.34
41	1.3	3.1	2.63	94	1.5	2.4	2.27	147	1.7	2.4	2.70
42	1.3	3.3	2.65	95	1.9	2.0	2.29	148	1.7	2.4	2.54
43	1.4	3.7	3.00	96	1.8	2.2	2.39	149	1.6	2.5	2.51
44	1.3	3.8	2.99	97	1.6	2.1	1.99	150	1.3	2.4	1.95
45	1.3	3.2	2.70	98	1.7	2.2	2.37	151	1.9	2.3	2.77
46	1.2	1.7	1.45	99	1.3	2.0	1.68	152	1.4	2.5	2.15
47				100	2.0	2.1	2.53	153	1.6	2.4	2.51
48	22.8	1.4	18.55	101	1.5	2.0	1.92	154	1.7	2.4	2.49
49	1.4	2.4	2.16	102	1.6	1.8	1.86	155	1.8	2.4	2.77
50	1.7	2.2	2.38	103	1.6	2.4	2.21	156	1.4	2.0	1.79
51	1.8	3.0	3.32	104	1.6	2.3	2.27	157	1.9	1.9	2.35
52	1.8	2.7	2.91	105	1.5	2.2	2.12	158	1.5	2.2	1.98
53	1.7	2.4	2.65	106	1.9	2.2	2.64	159	1.3	2.2	1.91

No	縦	横	面積	No	縦	横	面積	No	縦	横	面積
160	1.1	2.1	1.42	215	1.8	1.6	1.89	270	2.0	2.1	2.61
161	1.0	2.4	1.87	216	1.8	1.6	1.70	271	1.9	2.1	2.60
162	1.0	2.2	1.40	217	1.8	2.4	2.90	272	1.8	2.1	2.34
163	1.3	2.3	1.88	218	2.0	2.3	2.94	273	1.8	2.5	2.93
164	1.0	2.1	1.32	219	1.8	2.2	2.56	274	1.8	1.5	1.85
165				220	1.8	2.6	2.98	275	1.6	2.4	2.54
166	2.8	1.8	2.87	221	2.0	2.9	3.63	276	1.6	1.7	1.71
167	1.4	2.6	2.24	222	1.8	3.2	3.50	277	1.6	2.3	2.33
168	1.4	2.6	2.32	223	1.6	3.2	3.12	278	2.2	1.7	2.24
169	2.0	2.5	3.00	224	1.8	3.1	3.57	279	2.0	2.4	3.14
170	1.7	2.0	2.22	225	1.8	2.4	2.74	280	1.9	1.7	2.68
171	1.8	2.0	2.34	226				281	1.8	2.3	2.60
172	1.5	2.0	1.83	227				282	1.8	3.1	3.21
173	1.3	2.0	1.66	228				283	1.7	3.2	3.25
174	1.5	1.8	1.75	229	2.0	2.3	2.59	284	1.5	2.8	2.65
175	1.4	2.8	2.36	230	1.4	2.4	2.21	285	1.7	2.6	2.87
176	1.9	2.9	3.25	231	1.4	2.5	2.19	286	1.9	2.4	2.83
177	2.0	2.3	2.94	232	1.2	2.1	1.67	287	1.6	2.8	2.67
178	2.1	2.0	2.64	233	1.2	2.0	1.57	288	1.5	3.1	3.68
179	2.3	2.0	3.03	234	1.8	2.0	2.18	289	1.6	3.4	3.42
180	1.8	2.0	2.40	235	1.8	1.9	2.23	290	1.9	3.3	3.90
181	1.7	2.0	2.04	236	2.0	2.1	2.52	291	1.4	2.5	2.19
182	1.9	2.6	3.27	237	1.9	1.9	2.25	292			
183	2.1	2.6	3.42	238	1.6	2.0	2.03	293			
184	1.7	2.9	3.32	239	2.0	1.9	2.52	294	1.6	1.3	2.02
185	1.7	2.9	3.15	240	1.8	2.0	2.26	295	1.2	2.5	1.92
186	2.1	2.8	3.69	241	1.9	2.8	3.18	296	1.3	2.7	2.30
187	1.8	2.5	2.84	242	1.6	2.7	2.70	297	1.5	2.7	2.59
188				243	2.1	2.4	3.16	298	1.8	2.9	3.38
189				244	2.0	2.3	2.90	299	1.6	3.0	3.06
190				245	1.8	3.4	3.73	300	1.6	3.1	3.05
191	1.5	2.0	1.89	246	1.5	3.2	2.85	301	1.4	2.7	2.33
192	2.0	1.9	2.17	247	1.7	3.2	3.50	302	1.8	2.8	3.14
193	1.8	2.0	2.04	248	1.9	3.3	3.88	303	1.3	2.6	1.94
194	1.8	1.8	1.98	249	1.6	3.4	3.44	304	1.4	2.7	2.37
195	1.4	1.9	1.61	250	1.6	3.1	3.02	305	1.2	2.7	2.25
196	1.4	1.6	1.40	251				306	2.2	2.1	2.89
197	1.4	1.7	1.56	252				307	2.2	1.2	1.73
198				253				308	1.6	2.2	2.09
199	1.7	1.9	1.88	254	1.3	2.2	1.56	309	1.2	2.0	1.54
200	1.8	1.9	2.11	255	1.5	2.1	2.08	310	2.2	2.1	3.03
201	1.7	1.8	2.05	256	1.3	2.1	1.85	311	2.8	2.4	4.20
202	1.4	1.7	1.59	257				312	1.3	2.5	2.68
203	1.4	1.9	1.61	258	1.4	2.0	1.83	313	1.5	2.5	2.33
204	1.3	2.2	1.73	259	1.4	2.4	1.92	314	1.4	2.4	2.12
205	1.4	2.9	2.43	260	1.5	2.2	2.04	315	1.6	2.4	2.35
206	1.6	2.8	3.21	261	1.6	2.3	2.08	316	1.2	2.5	1.85
207	1.9	1.3	1.71	262	2.0	2.2	2.73	317	1.6	6.0	5.90
208	2.0	1.9	1.97	263	1.9	2.4	2.95	318			
209	2.1	2.1	2.72	264	1.8	1.8	2.07	319			
210	2.0	1.7	2.21	265	1.7	1.9	1.98	320	1.4	1.7	1.58
211	2.0	1.6	2.14	266	2.0	1.8	2.18	321	1.8	1.8	2.04
212	1.9	1.8	2.29	267	2.2	2.1	2.81	322	1.9	2.0	2.37
213	1.9	1.8	2.15	268	1.6	1.9	1.94	323	1.4	2.1	1.68
214	1.7	1.8	2.01	269	1.4	2.1	1.99	324	1.7	2.4	2.58

第2章 検出された遺構

No	縦	横	面積	No	縦	横	面積	No	縦	横	面積
325	1.5	2.6	2.47	361	1.4	2.8	2.49	397	1.8	2.0	2.34
326	1.3	2.8	2.40	362	1.5	2.8	2.37	398	1.1	2.0	1.34
327	1.4	2.7	2.44	363	1.8	2.6	2.90	399	1.6	1.9	1.95
328	1.3	2.6	2.17	364	1.7	2.5	2.68	400	1.7	2.0	2.32
329	1.8	3.2	3.78	365	2.0	2.5	3.12	401	1.4	2.0	1.86
330	1.3	2.8	2.26	366	1.2	2.5	1.74	402	1.4	2.1	2.02
331	1.5	1.3	1.25	367	1.2	2.4	1.93	403			
332	1.4	1.4	1.28	368	2.1	2.1	2.80	404			
333	1.2	1.6	1.22	369	1.4	2.1	1.76	405			
334	1.4	1.7	1.38	370	1.7	2.1	2.17	406	1.2	1.7	1.34
335	2.3	1.7	2.48	371				407	1.7	2.0	2.19
336	2.3	2.2	2.96	372	1.2	1.1	0.82	408	1.1	2.3	1.57
337	2.2	2.0	3.01	373	1.6	2.0	2.12	409	1.5	3.6	2.30
338	1.8	2.2	2.49	374	1.2	1.4	1.55	410	1.8	2.5	2.99
339	1.4	2.2	2.04	375	1.2	2.4	1.53	411	1.3	2.9	2.23
340	1.8	2.5	2.75	376	1.4	2.4	2.23	412	1.0	2.7	1.82
341	1.4	2.4	2.08	377	1.2	2.5	1.96	413	2.1	2.0	2.62
342	1.2	2.6	2.10	378	1.3	2.6	2.11	414			
343	1.3	2.5	2.15	379	1.4	2.6	2.15	415			
344	1.2	2.7	2.10	380	1.8	2.6	2.78	416			
345	1.8	3.0	3.46	381	1.4	2.6	2.44	417			
346	2.1	2.8	3.76	382	1.8	2.5	2.77	418			
347	1.3	3.1	2.49	383	1.2	2.5	1.97	419			
348	1.3	3.0	2.50	384	1.6	2.6	2.56	420	6.1	8.1	29.20
349	1.6	3.2	3.32	385	1.8	2.4	2.87	421	7.6	7.9	34.25
350				386	1.4	2.3	2.07	422	4.0	7.0	17.91
351				387	1.6	2.2	2.32	423	5.5	3.0	17.84
352	1.9	2.0	2.30	388	1.2	0.7		424	4.8	3.5	10.63
353	1.6	2.8	2.68	389	0.9	1.0		425	4.1	3.3	8.72
354	1.7	2.4	2.56	390	1.2	1.4		426	4.2	3.4	9.66
355	1.3	2.8	2.28	391	1.2	2.3	1.74				
356	1.3	2.7	2.45	392	1.4	2.4	1.95				
357	1.1	2.6	1.89	393	1.5	2.3	2.16				
358	1.3	2.4	1.98	394	0.9	1.4	0.90				
359	1.5	2.5	2.43	395	1.4	0.9	0.75				
360	1.3	2.9	2.37	396	1.6	2.2	2.06				

註

表の各項目は、次のことを示す。

- 1 番号は、水田の区画を意味し、第207図のものとは一致している。
- 2 縦と横は、畦野の下端の位置で計測した長さを示す。縦—南北方向、横—東西方向を示す。計測は、互、図を使用 単位 メートル (m)
- 3 面積は、互、図を使用して、TAMAYA製 デジタルプランイメーターで3回計測した平均値である。単位は、平方メートル (m²)
- 4 番号以外の各項目での空欄は、区画全体が確認できず、計画不可であることを示す。

第6節 溝 (第196図、208図、214図～218図、図版103-1～104-2、106-1、113-1～118-3)

溝は43条が確認された。その多くが時期、性格を明らかにできなかったわけではないが、時期は埋没土の様子、重複する住居等との前後関係から推定し、性格については占地と住居を始めとする隣接する遺構との関係から同様に判断をした。個別の特徴については第5表に一覧表とし、調査区全体の中での様相を示すという観点から遺構としての個別図に代えて土坑、溝全体図として分割掲載をした。以下、総括的に 1 時期と性格 2 全体の構成についてのべる。

1 時期と性格

時期決定は、先述の様に埋没土中にある浅間A・B・C軽石や二ツ岳FAといった火山噴出物の有無とその状態から半ば限定的にとらえ、出土遺物で時期決定された住居等との重複関係でその上限及び下限を設定するという二つの方法をとった。しかし、住居の様に出土遺物を明確に伴うといった例は稀で時期を推定できたものは25条で残りは時期不明である。

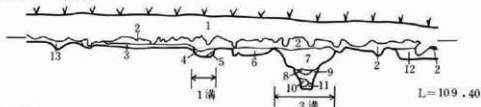
最古の一群は第5節でC水田下の遺構で詳報した8～12溝の5条で弥生時代後期末～古墳時代前期前半代に比定される。C水田形成とは不可分の関係で、8溝がC水田の主干導水路である様に残りはその上限を示すと考えられる。

次いでFAで埋没した小溝がある。具体的には24、29、30溝があり、規模と方位の類似点、24溝の間隔から畝の畝跡と考えられる。何らかの状態で埋没土中にFAをもつ住居との位置関係を見ると、住居と住居との間に点在、しかも小規模の状態であることがうかがえ、県内の子持村黒井峯遺跡を好例とする住居に付設された畝の景観が復元される。同様なものは、報告書中ではふれていないが本遺跡のI地区との境界付近にもあったことが調査担当者により記録されており、住居だけでなく畝を伴った景観が南北に尚、拡大することが考えられる。

FAに後続する時期のものとして28、3区1、3溝がある。直線的な走向としっかりとした掘り方に共通した特徴があり、北西から東南方向への勾配が見られる。3区3溝では底面に砂利層があり、水流を意識させないまでも、いつも開口していた区画性のある溝の性格が考えられる。これは5世紀後半からFAまでの時期、前代までの集落構成にはない要素で、FA水田埋没後の胎動を示すとともに占地の上ではその後も溝が集中、交錯する一帯に相当し、後代にとっての先駆形態といえよう。

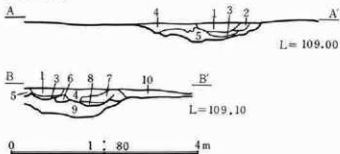
その後に出現した動きとして8世紀中頃～後半代に比定される2区での掘立柱建物群に関連する区画溝がある。4～7、36溝がそれで、7溝と4溝の間、約50mの範囲を占地して東辺を画していた可能性がある。4～7溝は時期差をもって台地縁辺を水切り、排水するのが目的の一つとして継続したらしく、地形上の制約から後代までの影響を持っている。住居域を別に溝で区画する動きは、集落の形成がFA水田埋没を契機として台地上からそれまでの低地部分にまで一気に拡大したことを受けたものである。溝のもつ走向方位や規模からすると、3溝や第10節で報告した1～4溝なども同時期かあるいは後代までの影響のあらわれの結果と考えられる。中でも、3溝、36溝が示す、ほぼ磁北に近い方位とその延長線上には東京電力鉄塔用地調査区の4条だけでなく、既報の熊野堂遺跡III地区の8溝、9溝があり、両側溝をもつ上幅約3mの道路状遺構が推移される。これは、寸断されているが南北

3区1・3溝



- | | |
|------------------------|-------------------|
| 1 耕作土 | 8 ローム |
| 2 暗褐色土 軽石、YPを含む | 9 暗褐色土 川砂を薄く互層に含む |
| 3 2層とロームの混土 208住掘り方フク土 | 10 暗褐色土 |
| 4 暗褐色土 YPを含む | 11 川砂 |
| 5 4層とロームの混土 | 12 暗褐色土 207住フク土 |
| 6 暗褐色土 全体に大粒のロームを含む | 13 暗褐色土とロームの混土 |
| 7 暗褐色土 YPを少量含む | |

3区2溝



- | |
|--------------------|
| 1 褐色土 A・B軽石、炭粒を含む |
| 2 暗褐色土 |
| 3 暗褐色土 ローム粒を含む |
| 4 暗褐色土 |
| 5 暗褐色土 |
| 6 暗褐色土 軽石を多く含む |
| 7 川砂と褐色土の混土 鉄分凝集あり |
| 8 川砂 磨滅した土器片を含む |
| 9 暗褐色粘質土 |
| 10 ローム漸移土 |

第208図 3区1号・2号・3号溝

約200mの長さを持ち、これも既報の雨壺遺構Ⅲ区の雨壺古道と約250mの距離で平行関係にある集落構成の基幹的な遺構と考えられる。これら道路状遺構は、上面の覆土に浅間B軽石混入土をもち、その上限乃至構築時期については推定をまつしかないが、3溝、36溝等は手掛かりの一つであろう。

区画や直線的な走路の道がある一方で、浅間B軽石を埋没土中に含む溝がその後が続いている。分布では2号井戸の周辺にある22、3区2溝、13、35溝などがあげられる。前2条は埋没土の様子や規模と走向の点で同一のものと判断され、住居との重複関係からすると上限を9世紀代、下限を11世紀代とする断続的に推移した台地頂部付近を南北方向に貫通する、北半では区画を、南半では後代になると3区の畠址と関連して配水路の性格が加わった性格のものであろう。

これとは別に35溝としたものは3区畠址に含まれるもので耕作痕の可能性はある。13溝も住居との重複がなく占地で同様なものであろう。

以上が調査で確認し得た住居の推移に伴う溝で、その性格には区画性、次いで導配水路としてのものがあげられる。11世紀以降は住居が確認されていない様に、該当する時期の溝はなく14世紀以降と考えられる既報の熊野堂館址に伴う溝が調査区の南端に出現するまで半ば空白の時代となる。

南端の1、37、40溝は、いずれも葉研状の掘り方でN30°Eの方位をもつ。上記の館址とは約300m離れていて南での別の遺構を暗示するものか、あるいは現在の井野川を隔てた南にある融通寺遺跡にある館址との関連も考えられる。

第5表 熊野堂遺跡II地区溝一覧表

No	確認全長 (m)	上端×下端×深さ	方 向	時 期	備 考
1	16.4m	上端 1.1 ~1.3 下端 0.3 ~0.6 深さ 0.3 ~0.5	N-25°-E	中世	252、254住、38溝→1溝→2号土坑 走向は直線的、南4mに37溝、南10mに40溝が平行する、西への下り勾配、断面は礫研伏
2	27.2m 北の35住と南の8住との間	上端 0.7 ~0.4 下端 0.5 ~0.3 深さ 0.2	N-38°-W		2溝→8、35住 38溝と同一企図のものか、断面U型で南への下り勾配、土師杯、鉄滓、壺出土
3	16.5m 31住と11住の間	上端 1.2 ~1.6 下端 0.9 ~1.2 深さ 0.1 ~0.3	N-10°-E		2溝→3溝 断面は曲状で底面平坦、南へ少し勾配を持つ 壺、杯、椀、羽口、甕、鉄滓、磁石出土
4	17.5m 東端は36溝とT字渠に接続	上端 0.7 ~1.3 下端 0.3 ~0.6 深さ 0.6 ~0.9	N-85°-E		67住→4溝 東の36溝と合せて掘立群を区画 羽釜、壺、杯、椀、蓋、灰釉皿、平瓦、釘、鉄滓
5	15m	上端 0.9 ~1.8 下端 0.5 ~0.9 深さ 0.5 ~0.8	N-70°-E		5溝→高跡、底面は土坑状の凹凸が激しく一定しない、断面は塊状、埋土はFPを含む褐色土、東への下り勾配、壺、杯、敲打具
6	11.5m	上端 0.7 ~0.9 下端 0.4 ~0.6 深さ 0.1 ~0.2	N-68°-E		80住→6溝、5溝と3mの余地で平行、埋土も5溝と同様、断面は塊状 弥生壺、羽釜、壺、杯
7	19.0m	上端 0.7 ~1.0 下端 0.2 ~0.3 深さ 0.7 ~0.8	E-W		80、241、247住→7溝、台地の縁道を弧状に区画、断面はV型でFPが混入した褐色土で埋設弥生壺、須恵壺、高杯、羽釜、小甕
8	42m 調査区を直線的に縦貫	上端 1.8 ~2.5 下端 0.7 ~1.3 深さ 0.4 ~0.6	N-125°-E	弥生	C水田の主幹導水路、断面塊状で南への緩やかな勾配、埋土の中～下位にC軽石が堆積 弥生壺、壺、高杯
9	27m	上端 0.4 下端 0.2 深さ 0.1	N-130°-E	弥生	C水田下の遺構、断面U型、埋土は黒色泥炭土でC軽石混入 弥生壺、壺、高杯、須恵壺、短甕
10	20m	上端 0.4 下端 0.2 深さ 0.1	N-120°-E	弥生	C水田下の遺構、断面形と埋土は9号と同様
11	11m	上端 0.45 下端 0.2 深さ 0.1	N-15°-E	弥生	C水田下の遺構、断面形と埋土は9号と同様、12号とY字状に連絡し全体は蛇行する
12	8m	上端 0.4 下端 0.2 深さ 0.1	N-15°-E	弥生	C水田下の遺構、断面形と埋土は9号と同様、11号と連絡し北へ伸びる
13	9.2m	上端 0.6 ~0.7 下端 0.3 ~0.4 深さ 0.1 ~0.2	N-3°-E		南西方向への緩やかな下り勾配 埋土はB軽石を含みバサバサした褐色土 縄文土器、弥生壺、土師壺、杯、高杯
14	16.5m	上端 0.5 ~0.6 下端 0.3 ~0.4 深さ 0.1 ~0.2	E-W		96住→95住→14溝 埋土は浅間起源の軽石を含むサラサラした粘性のない褐色土

第2章 検出された遺構

No	確認全長 (m)	上端×下端×深さ	方 向	時 期	備 考
15	3.3m	上端 0.4～0.5 下端 0.2～0.3 深さ 0.1	E-W		4溝の北に平行する畝状遺構のうちの1つ、埋土は軽石を含む暗褐色土
16	11.1m 136住と141住の間にある	上端 0.4～0.7 下端 0.3～0.4 深さ 0.2～0.3	N-44°-E		3-2溝と5mの余地をもって平行、直線的な走向で南東への下り勾配 弥生釜、甕、土師杯、椀、磁石
17	7.7m 19溝と平行、18号と直交	上端 1.0～1.1 下端 0.7～0.8 深さ 0.6～0.8	N-90°-E	近世	168、170住→18溝→17溝→104号土坑19号とは10mの余地をもって平行、直線的な走向で東への下り勾配、断面方形
18	27m 17、19溝と直交	上端 0.8～0.9 下端 0.5～0.6 深さ 0.1～0.2	N-5°-E	近世	171、4-9住→18溝→17溝、19溝 弥生釜、土師高杯、杯、椀、須恵壺、灰輪椀、平瓦、磁石
19	7.5m 17溝と平行、18溝と直交	上端 0.9～1.0 下端 0.5～0.7 深さ 0.8	N-90°-E	近世	18溝→19溝、東端は4-9、4-14住を切り直線的に伸びる、南10mに20、21溝が同規模で平行し、17溝と合せて耕地区画を示すと考えられる
20	6.6m 21溝と50cmの余地で平行	上端 0.7～0.8 下端 0.5～0.6 深さ 0.8	N-96°-E	近世	113土坑→20溝 17、19、21溝と平行、21溝とともに西へ伸びる 弥生釜、土師壺、磁器
21	6.5m	上端 0.6～0.7 下端 0.4～0.5 深さ 0.7	N-95°-E	近世	120土坑→173住→21溝 20溝と平行、西へ伸びる 弥生釜、土師器細片
22	26m 南端は2号井戸上面に伸びる	上端 1.2～2.3 下端 0.9～1.8 深さ 0.1～0.2	N-12°-W	平安	175住→2号井戸→22溝 幅広く平坦、南への下り勾配、埋土はB軽石を全体に含んだ暗褐色土、弥生釜、土師器細片
23	6.1m 北端は路線外に伸びる	上端 0.2～0.3 下端 0.1～0.2 深さ 0.2	N-20°-E		146土坑→180住→179住→23溝 東壁断面では上層1m近い強い血状の掘り方が観察される、南への下り勾配
24	a、b、cの3本があり最長7m	上端 0.3～0.4 下端 0.1～0.2 深さ 0.1	N-75°-E	古墳後期	二ツ岳FAで埋没した点の畝跡、北10m付近でも確認されており、南北16～20mの範囲は推定可能、弥生壺、鬼高脚杯、椀、甕、高杯
25	5.7m	上端 0.4～0.45 下端 0.1～0.2 深さ 0.1	N-120°-E	弥生 古墳	191住→25溝、東端は路線外に伸びる 埋土はC軽石を含む暗褐色土、走向は直線的で東南への下り勾配、弥生壺、土師器細片
26					平面記録なし、位置は81km935m付近、埋土はC軽石を含む暗褐色粘質土
27	7m 東西にさらに伸びる	上端 1.0～1.2 下端 0.7～0.9 深さ 0.1	N-98°-E	平安	220住→4区28住→3区3住→215住→27溝、西端が土坑状で深い、東への下り勾配で2号井戸からの配水路か、埋土はB軽石が混入
28	5m 西端で3-1溝に接続	上端 1.1～1.6 下端 0.5～1.0 深さ 0.1～0.3	N-90°-E	古墳後期	3-1溝から50度で分岐、東への下り勾配、分岐点近くは土坑状で深く止水施設か 弥生壺、鬼高脚壺、高杯、杯、椀、須恵壺

No	確認全長 (m)	上端×下端×深さ	方 向	時 期	備 考
29	2.1m 西は198住で切られ東に伸びる	上端 0.2 ~ 0.3 下端 0.1 深さ 0.1	N-75°-E	古墳後期	二ツ岳FAで埋没した畠の畝跡、24、30溝と区画を構成
30	1.5m 東西に伸びる	上端 0.2 下端 0.1 深さ 0.1	N-80°-E	古墳後期	二ツ岳FAで埋没した畠の畝跡、24、29溝と区画を構成
31	2.5m 北端を147土坑で切られる	上端 0.4 ~ 0.6 下端 0.3 深さ 0.3	N-26°-W		31溝→147土坑→182住 埋土はローム、YPを含む褐色土の互層、椀、瓶
32	5.2m 東西に伸びる	上端 0.35 下端 0.15 深さ 0.15	N-101°-E	近世	220住→215住→32溝 埋土はA軽石とロームを含む褐色土、弥生甕、羽釜、須恵甕
33	6.5m 東西に伸びる	上端 0.3 ~ 0.4 下端 0.2 ~ 0.3 深さ 0.15	N-84°-E	近世	220住→215住→33、34溝 埋土は32溝と同様、34溝とは50度で交差、新旧不明、弥生甕、甕、鬼高期高杯、杯、椀
34	11m 東西に伸びる	上端 0.25 ~ 0.3 下端 0.15 深さ 0.15	N-130°-E	平安	220住→221住、28溝→33、34溝 埋土は32溝と同様 弥生甕、土師杯、椀、須恵甕、蓋
35	6.4m	上端 0.3 ~ 0.5 下端 0.2 ~ 0.3 深さ 0.2	N-15°-E		155住、238住→35溝、B軽石埋没畠跡の単の一つ、区画の性格、B軽石は褐色土とのかく挿土 弥生甕、S字台付甕、鬼高期杯、甕
36	12m 南端は東へL型に折れる	上端 0.8 ~ 1.2 下端 0.2 ~ 0.3 深さ 0.4 ~ 0.7	N-1°-E		4溝と丁字に接続、南端はL型に東へ伸びる、5溝と合せて区画 墓、杯
37	12m 東西に直線的に伸びる	上端 1.6 ~ 1.9 下端 0.2 ~ 0.3 深さ 0.5 ~ 0.7	N-30°-E	中世	1溝、40溝と平行、258、259、261住→37溝断面は基研状、埋土中に軽石が多く一時に埋没か、底面ほぼ平坦、長甕、杯、椀、軟質陶器
38	8m 9住と259住の間	上端 0.6 ~ 0.7 下端 0.3 ~ 0.4 深さ 0.2	N-30°-W		38溝→9、259住→1溝、埋土は灰褐色粘質土で195→198土坑と同様、南への下り勾配 土師杯、須恵甕
39	4.5m 東は路線外に伸びる	上端 1.2 下端 0.9 深さ 0.2	N-110°-E		257住→248住→39溝、西端はL型で土坑状に深い、底面平坦、埋土はB軽石を含む茶褐色土の互層、土師甕、杯、椀、羽釜、須恵甕、椀
40	10.2m 西は弧状	上端 2.0 ~ 3.4 下端 0.4 ~ 0.8 深さ 0.6 ~ 0.7	N-30°-E	中世 15~16c代	262住→40溝、東へは直線的に伸びるが西は現在の井野川にむけて弧をえがく、西への下り勾配埋土は37号と同様、断面は基研状、内耳、摺鉢
3-1	25m 南端は東へL型に折れ伸びる	上端 0.6 ~ 1.2 下端 0.3 ~ 0.4 深さ 0.4	N-140°-E	古墳後期	3区6住→4区28住→221住→3区1溝、28溝は分岐する枝溝、直線的に伸びるが西への下り勾配、埋土はC軽石とロームを含む暗褐色土
3-2	38m 北端は不明、南は弧状になる	上端 1.2 ~ 2.3 下端 0.5 ~ 0.7 深さ 0.3	N-130°-E	平安	3区8住→239住→3区3溝、3区1溝 2号井戸からの配水路か、底面に川砂が堆積、東への下り勾配、埋没を繰り返して使用

第2章 検出された遺構

No.	確認全長 (m)	上端×下端×深さ	方 向	時 期	備 考
3-3	16.5m	上端 0.8 ~1.4 下端 0.3 ~0.4 深さ 0.8	N-14°-E	古墳後期	3区4住→3区3溝→3区15住 直線的に伸び、断面方形。壁と底面に掘削時の工具痕、底面には川砂が堆積、東への下り勾配
3-4	規模不明	上端 下端 深さ		古墳後期	第1次調査で部分的に確認の記載がある。平面図等の記録がない 弥生壘、鬼高期壘、高杯、杯、羽釜
4-1					上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報II (原教委、1975) で調査報告したが、第5次調査の結果前方後方型周溝墓の一部と判明

17～21溝は近代の畠に伴うものである。直線的な走向で全てが平行と直交の位置関係にあり、ローム層中に達する底面と断面箱形の掘り方からは同時性と同一意図が読みとれる。埋没土は浅間A軽石を含む土とロームブロックの互層が多く、年代の上限は天明三年(1783年)以降、下限は明治時代の耕地図や現代の区画とは合致しないことから江戸時代後期後半と考えられる。

2 全体の構成

時期別にとまとめると下記になる

- 1 弥生時代後期～古墳時代前期前半 C水田下の遺構 8～12溝
- 2 古墳時代中期後半～後期 25、26溝
- 3 古墳時代後期後半 FA埋没畠址の一部 24、29、30溝
- 4 // // FA後の集落内区画 28、3区1、3溝
- 5 8世紀代の掘立柱建物群に伴う区画 4～7、36溝
- 6 9世紀以降の区画と基幹水路、道路状遺構 22、3区2、13、35溝
- 7 中世後半 館址に伴う 1、37、40溝
- 8 江戸時代後期後半 天明三年以降 17～21溝

この中で1～6は集落構成上、住居との関連で構築されたものであり、ある程度の存続期間が考えられる。また、この推移からは、遺構として確認し得た11世紀後半頃までがほぼ継続した集落形成の時期でその後館築造の面期をもって現河道寄りに住居の中心が移動していき、台地中央部が生産の場として活用されていったと考えられる。館廃絶後は一帯の畠になり、区画の溝が出現する。

第7節 1号方形周溝墓(第209図、210図、図版119-1~120-3)

この周溝墓は、本遺跡地内で唯一の古墳時代の墳墓である。類例は、本遺跡以北の井野川流域にはなく、方形周溝墓は勿論のこと、前後の時期に比較して古墳時代前期の住居址も稀な存在である。

位置 4F~L-18~28グリッド I地区とII地区の境界に近く、全容を確認するために調査区を外れて東側に約6m、南北約30mの範囲を拡張して調査をした。

占地 調査前の地形では北から南への緩やかな勾配が見られ、標高110.70m前後、周辺一帯が桑園の中で、この遺構がある一区画だけが梅畑でわずかに高まりが見られた。調査の結果からは、築造時には北側約100m付近に井野川にむかって開口する間口約30mの開析低地が確認され、II地区の北辺を画していたと考えられる。この開析低地は8世紀頃には凹地形となるが、その間にはI地区で報告した南西方向に専水路をもって2基の井戸が作られていた。現在の井野川と猿戸川との間は一面南北走向の台地であるが、当時は南に水田が形成された低地とは別に先述の開析低地が幾筋か入り起伏に富んでいたと推定される。その中でも、この遺構は南に眺望をもち、東西を河川、北側を低地で画された標高110.50m前後の最高所に築造されている。築造時には、前方部が重複する209号住居を埋め戻しており、居住域から墓域への転換が急でかつ占地された結果といえる。

形状 前方後方形 前方部が南をむき撥形である。主軸方位はN7°Wである。

規模 全長約29.50m、方台部長21.70m、前方部長7.30m、後方部長14.40m、前方部前縁幅8.70m、くびれ部幅3.40m、後方部幅約14mである。前方部前縁は、194住との重複や基底面がローム漸移土層中にあるために東南隅を除いて確認していない。後方部の形態は、南辺を除いて平行、直交する矩形であるのに対して、南辺隅隅は約100°の鈍角である。前方部の形態は、くびれ部の角度が73~82°と鋭角を意識させ前端にむかって広がりを強調している。盛土は、現在確認されていないが、周溝内の方台部側の崩落土の土量や角度からすると周溝の掘削土を盛っていたと考えられる。その高さは、周溝の底面から方台部への角度からすると前後に差があり、主体部が推定される後方部が高いと推定される。断面F~Iによると、前方部では約40°勾配で末広がりであるのに対して後方部ではローム層上位までが約60°でその上に約40°の勾配のちがいが認められる。また、高さは、周溝の深浅とも関連があり、両くびれ部、後方部の各辺中央部付近が深いのは盛り上げただけでなく、深くすることでの視覚的効果を意図したものと推定される。前方部前縁の南西隅については、先述の重複部に相当するが図示した如く土橋状になっていたとおきたい。

周溝 南西隅を除いて全周すると考えられる。東辺が未調査のために推定によるが、基本的には左右対称形の均整感のとれた形状と考えられる。唯一、東南隅の外辺側が内側に矩形に入りこんでいる。幅は3.50~5.50mで、後方部北側中央部が最も広く、両隅にかけて狭くなる。掘りこみ面はローム漸移土層中にあり、底面はハードローム層中にまで達している。底面までは、全体的に外辺側から方台部基部にむかって約5°~10°の勾配で深くなり、各辺の最深部で1~1.20mを測る。中では後方部北西隅が浅く、前方部前縁の一部が土橋状になる。

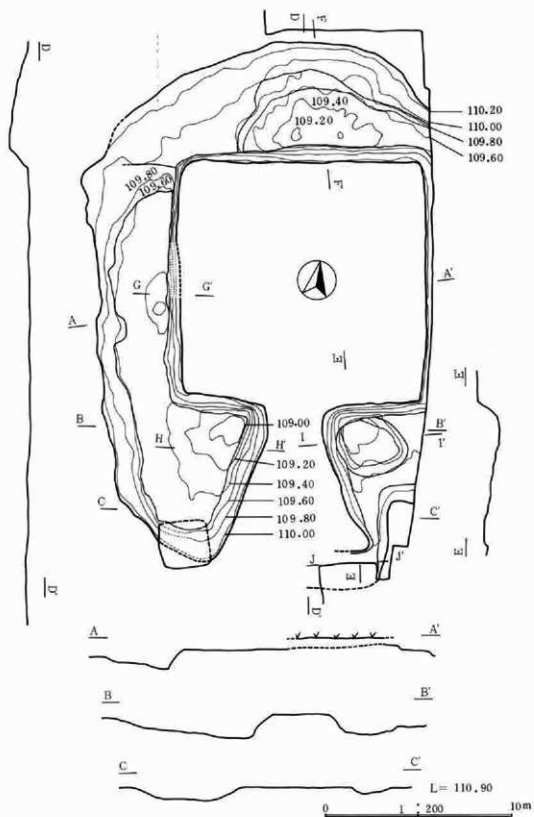
埋没土 現地表から周溝底面まで26層がある。内訳は、大半が周溝の埋没に伴う土層であるが断面F

でいう18、20層の様な盛土下の自然層や断面GやHの9、10層と言った盛土の崩落土と推定されるものがある。また、遺構の時期を考えていく上で指標となる火山噴出物では、8層が浅間C軽石層、3層が二ツ岳FA層である。8層や3層を鍵層にして埋没の過程を見ていくと、築造時期は浅間C軽石の降下以前であり、その頃までには前方部や後方で自然流入土とは別に盛土の崩落が見られる。降下後は、後述する様に5層中に和泉期後半代の高杯を主体とした土器溜りがあり、5世紀後半には周溝も半分程が埋没し遺物投棄の場と化して、墳墓としての意識がなくなり、外辺に和泉期の集落が出現する。その後は居住域に転ずると二ツ岳FAの降下までに埋没が周溝を平坦化させるまでに進行しているが、住居の直接の重複はなく、方台部自身は何らかの高まりを残していたと考えられる。さらには、住居の重複からだけという、古墳時代以降の集落との間に強い継続性は認められないものの方台部一帯には209号住居以降、居住域に転じた形跡はない。

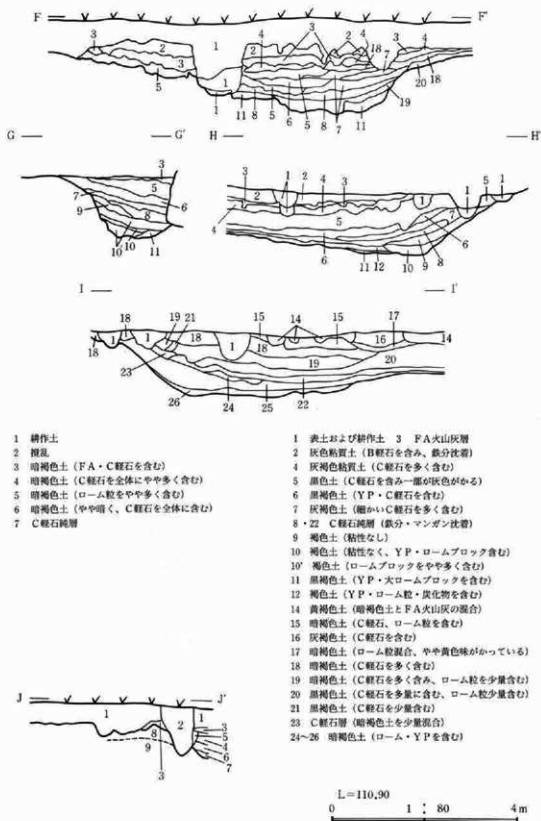
遺物出土状態 報告では和泉期後半の高杯を主体とする土器群を一括掲載したが、これらは浅間C軽石層と二ツ岳FA層との間にある5層中であつた土器溜りのもので周溝墓との直接の関係はない。しかし、前代の墳墓というタブーを意識しての供献土器なのか、単に居住地に隣接した凹地形を利用した土器すて場なのか判別はつかない。高杯が圧倒的に多く、しかも完存品に近いものが多いという点と後方部北側の最深部付近での一括である点で前者の見方ができる。この一群を除くと、周溝内全体の底面近くまでは重複するか、隣接する住居からと推定される弥生時代後期樽式の壺、甕、台付甕等の破片がある。その殆どは埋没過程の流入と考えられ、底面上でのものは報告32のミニチュアの甕1点である。

主体部 後方部上面全体は調査していないが、調査の範囲内では確認されていない。また、掲載した写真(図版119、120)からもわかる様に可能性をもつ土坑状のものがあったが、埋没土のちがいを理由に新しいものと判断して図示していない。後方部西半分に残る耕作痕の連続する様子からすると削平されている可能性が大きい。周溝内でも底面をさらに一段掘り下げた土坑状のものや、特定の遺物が集中する箇所も見られない。

時期 古墳時代前期、4世紀中頃、時期を示すものとして土器、埋没土中の浅間C軽石層、重複する遺構の3つがある。土器はミニチュアで特色がつかみがたく傍証的なもので後二者を有力な判断資料とする。浅間C軽石層については、噴出時期に最近の動向で4世紀代の中で若干の幅が見られるが、重複する209住がS字口縁台付甕を特徴とする石田川式を一切含まない古式土器器を出土することからすると、上限並びに下限を上記の年代観としたい。



第209圖 1号前方後方形周溝墓遺構圖(1)



第210図 1号前方後方形周溝墓遺構図(2)

第8節 土 坑 (第214図～220図、図版121-1～127-3)

土坑は総数で186基が確認された。その状態は多くが底面近くまで削平を受けていたり、住居等との重複で一部だけであったりして一様ではない。また、土坑自身の重複も多い。分布は、住居を優先した調査で付随的に確認されることが多く、全体図の中では住居群がまばらな所に集中、偏在している。これは、土坑が機能と用途の上で住居に付設されたとも考えられるが、共存する遺物から時期が特定できたり、用途に言及できた例は少数で大半は時期、用途とも不明である。

その中で個別に時代や性格が特定できたものは、縄文時代を第211・212図、弥生時代を第213図、平安時代の墓塚や共存する遺物があるものを第219・220図に集成をし、残る殆どは土坑・溝全体図1～5として第214～218図に位置関係だけを示し、法量、遺物、特徴を第6表に一括しただけである。

1 縄文時代の土坑

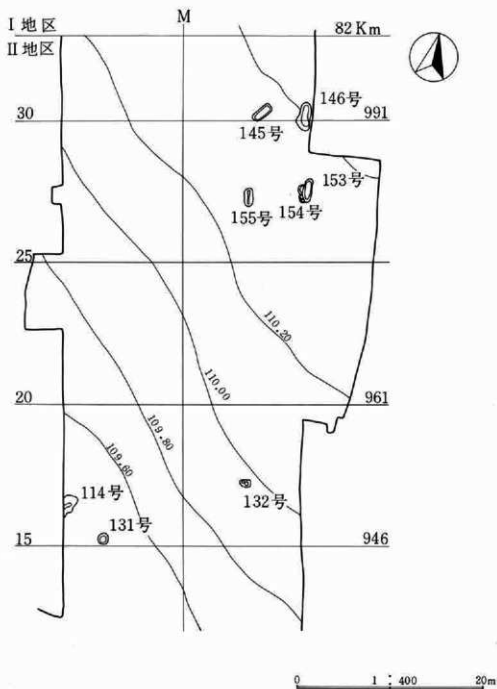
4区北半で7基がある。主たる形状は南北方向の不整楕円形で、埋没土にはロームブロックを多く含みかたくしまった褐色土が共通項として見られる。概して住居の掘り方調査で確認された例が多くて、このほかにも断面図中に上記の土層をもつ土坑の記述が数例見られた。遺物は明らかに共存したものはなく、時期の特定はむずかしい。分布はローム層上面では標高110m前後にあり、旧地形の中では後代に方形周溝墓が作られる台地でもやや高い南西面である。周囲では4区の北東約150m付近の猿府川右岸沿いに中期加曾利E式後半の散布地が至近距離の遺構推定地で、その関連が考えられる。形状は陥し穴と似るが、底面が一定せず浅いことから単に用途不明の土坑としておきたい。

2 弥生時代の土坑

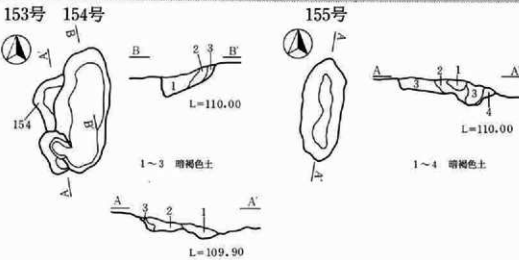
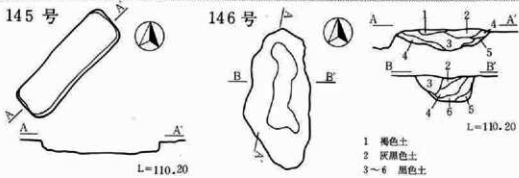
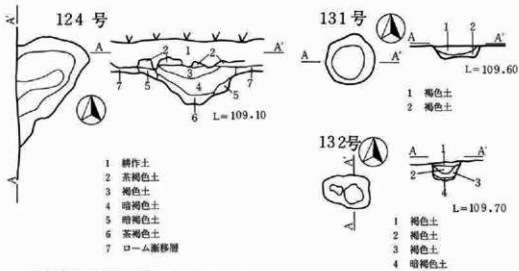
台地上の4区に5基、低地のC水田下の遺構として44～46号の3基がある。分布上は中期後半～後期の集落が形成される台地上のものが住居に付属する施設と考えられ、低地のものは隣接する9～12溝と一括して扱われる本来性格を異にしたものと考えられる。台地上の5基のうち、102号は井戸の4区6号は遺物も多く形状の点で方形周溝墓の一部とも考えられるが断定できる資料がない。低地の3基は、C水田耕土下の黒色粘質土中に掘り方をもち、整った形状から土坑と判断したが、これ以外にも不整形のもの10基近くある。性格は溝との関連が不明だが、C水田の年代上限資料である。

3 古墳時代以降の土坑

縄文、弥生時代を除くといずれも特徴にとぼしく、遺物や遺構の重複関係から少数例が時代や性格が特定できるにすぎない。その大半は住居群のまばらな中に群在し、分布の傾向もつかめないが、住居に付随させて機能したことが分布の背景の一つにあろう。123号は墨書土器2点を副葬した10世紀後半の墓塚であるが、類例として36、50、189、192号等があげられる。中では馬歯の出土した192号が同じく馬歯の出土した31住、69住、3号竪穴状遺構と合せて、9世紀代の馬を用いた祭祀土坑として分類される可能性がある。その後は、埋没土中に浅間B経石を含む円形を基調とした土坑が群在して多数作られている。群在する点に分布の背景があろうが、遺物を伴う例は稀で住居との関係、時期を特定することがむずかしい。

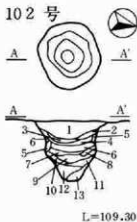


第211図 縄文時代土坑分布図

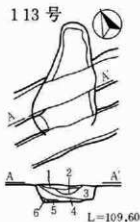


第212図 縄文時代土坑

102号



113号



- 1 黒褐色土 C軽石、ローム粒、炭化物を含む
 - 2 黒褐色土 C軽石、ローム粒、YP粒を含む
 - 3 黒褐色土
 - 4 黒褐色土
 - 5 黒褐色土 YPが多い
 - 6 黒褐色土 ローム粒が多い
 - 7 黒褐色土 ロームブロックを含む
 - 8 黒色土 YPブロック、YPを多量に含む
 - 9 黒色土 YP、ロームブロックを多く含む
 - 10 黒色土
 - 11 黒褐色土
 - 12 ロームと黒色土の混土
 - 13 ロームとYP、黒色土の混土
- 1 ロームと褐色土の混土
 - 2 暗褐色土
 - 3 暗褐色土 軽石、ローム粒多い
 - 4 暗褐色土 軽石、ローム粒多い
 - 5 ロームと暗褐色土
 - 6 YPと暗褐色土

G984



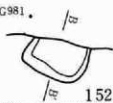
F984



151号

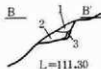
- 1 黒褐色土 C軽石とローム粒を含む
- 2 黒褐色土 C軽石を全体に含む
- 3 黒褐色土

G981



152号

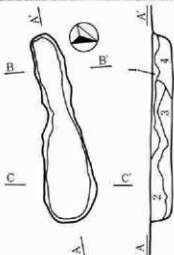
F981



L=111.30

- 1 黒褐色土 C軽石を全体に含む
- 2 黒褐色土
- 3 ローム漸移土

4区6土坑



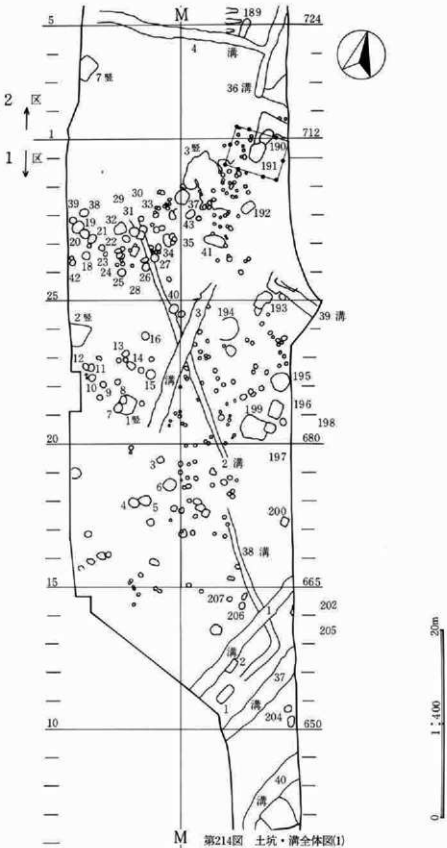
- 1 褐色土 少量のYPが混入
- 2 暗褐色土 YPの量が多い
- 3 暗褐色土 黒色みが強い
- 4 暗褐色土



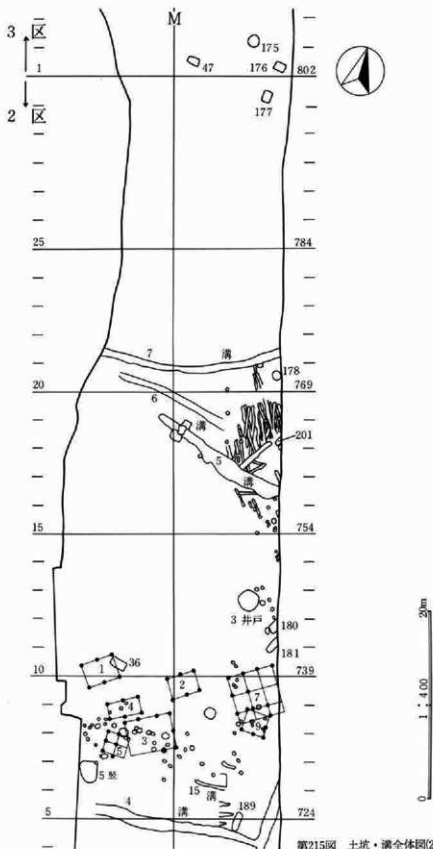
L=109.00

0 1:80 4m

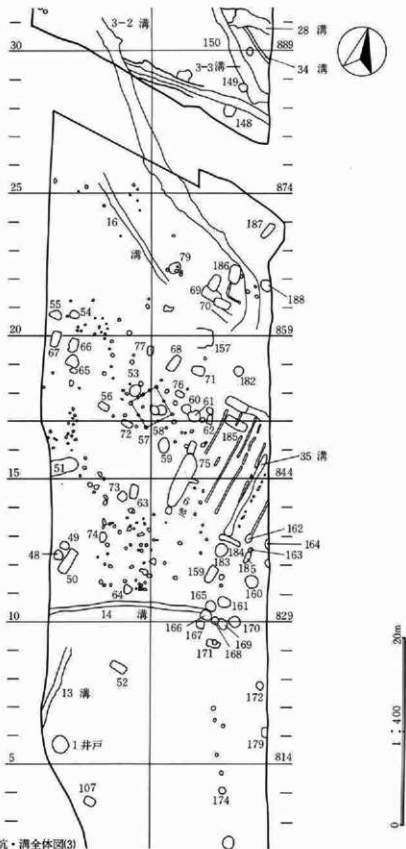
第213図 弥生時代土坑



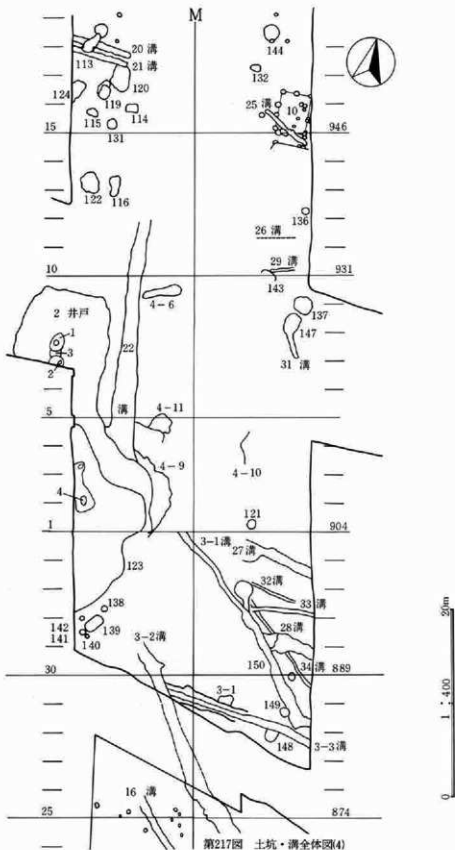
M 第214図 土坑・溝全体図(1)

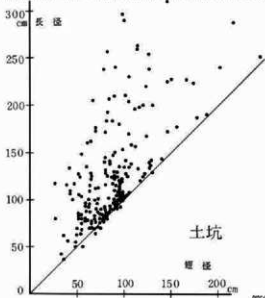
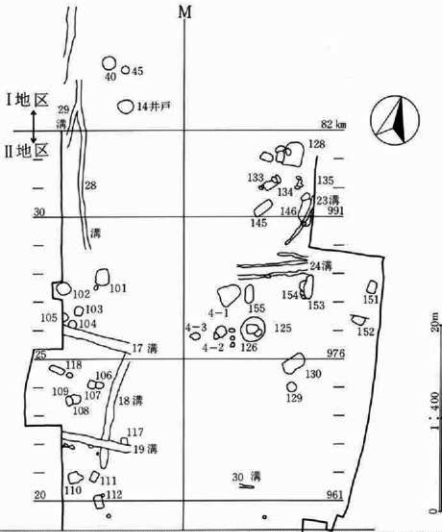


第215図 土坑・溝全体図(2)

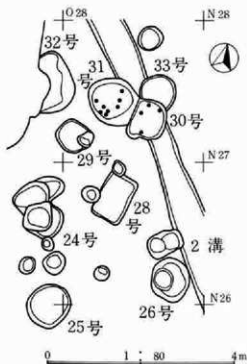
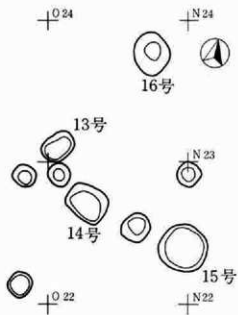
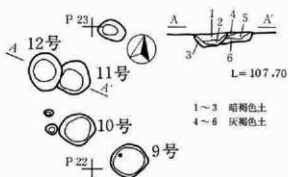
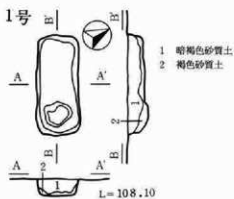


第216図 土坑・溝全体図(3)





第218图 土坑・溝全体图(5)

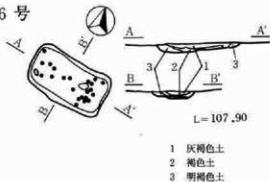


第219図 土坑 (1)

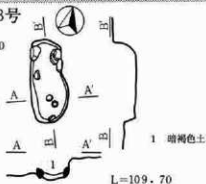
50号



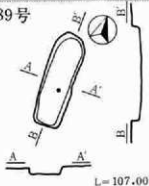
36号



69号、70号



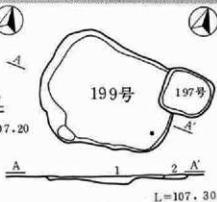
189号



192号



199号



205号



0 1 80 4m

1 褐色土

第220圖 土 坑 (2)

第6表 熊野堂遺跡II地区土坑一覧表

No	平面形	断面形	長径×短径×深さ	出土遺物	時期	備考
1	長方形	箱形 底面平坦	210×90×35 N-6'-W	土師器、須恵器小破片	中世	埋土は2層でFP等が混入、底面に不整形円形ピットがあく、基壇
2	長方形	箱形 底面平坦	148×55×30 N-6'-W	土師器片少数	中世	埋土は1号に同様、基壇
3	不整形 横円形	皿状	125×105×10	長壺、杯、碗		11住東南隅にあり、貯蔵穴に変更する
4	横円形	塊状	105×95×10	須恵器壺		埋土はFPを含む褐色土
5	不整形 横円形	塊状	135×105×10			埋土は4号に同様である
6	円形	円筒状	135×130×35			埋土は軽石を含む褐色土で4号に同様である
7	円形	塊状	90×75×12	杯、棒状礎、羽釜、 土付壺		37住の東南隅にあり、貯蔵穴に変更する
8	円形	塊状	80×82×20			7号に並列、37住の東壁中央に重複する
9	円形	塊状	76×70×17	羽釜		23住を切る
10	円形	塊状	76×65×16			15住内に11、12号と共にある
11	円形	塊状	70×72×16	長壺		15住内に10、12号と共にある、12号より古い、埋土に炭化物を含む
12	円形	塊状	75×65×25			15住内に10、11号と共にある、11号を切る、34B住の貯蔵穴に変更する
13	横円形	塊状	75×55×30	磁石		13住内に14号と共にある、13住-13号、14号、2基の円形土坑に重複する
14	横円形	塊状	90×70×30			25住の東南隅にあり、貯蔵穴とする13住掘り方にある
15	円形	塊状	100×97×30	杯		21住の東南隅にあり、貯蔵穴とする埋土は灰褐色土が互層に堆積する
16	横円形	鍋底状	85×75×27			55住を切る、25住の北東隅にある
17	円形	塊状				56住北西隅に重複する
18	方形	箱形 底面平坦	78×60×10			56住北西隅に重複する
19	不整形 横円形	皿状	135×100×20			50住南西隅に重複する
20	不明	底面平坦	105×26×25			50住南壁に重複、埋土はFP等を多く含む暗褐色土、炭化物あり

No	平面形	断面形	長径×短径×深さ	出土遺物	時 期	備 考
21	不明	皿 状	50×57×15			50住南壁中央に重複、南半分のみ確認される
22	円形	坑 状	70×65×18			円形の浅い掘り方をもつ
23	不明	皿 状	80×75×23			不整形の掘りこみ内に円形ピットがあく
24	円形	坑 状	68×58×19	須恵器椀		2基の土坑が切り合いし合計4基あり埋土は軽石を含む褐色土
25	円形	坑 状	93×85×7			22号と類似した形状である
26	円形	円筒状	90×80×30			埋土は灰褐色土と暗褐色土の上下2層柱穴の掘り方の可能性がある
27	円形	円筒状	80×80×43 N-13'-E			2溝を切る、埋土は軽石を含む黒褐色土、周囲にピットが群在する
28	長方形	箱 形	100×70×6			壁際に円形ピット2基が重複する
29	円形	坑 状	80×55×8	須恵器椀、外表に「万」の墨書		底面に円形ピット1基あり、31～33号と群在する
30	円形	坑 状	80×78×15	壺、杯		2溝、31号を切る
31	方形	坑 状	100×98×46	壺、杯		埋土は上下に褐色土、灰褐色土が互層で堆積、2基重複か
32	円形	坑 状	125×52×34			50住東壁中央近くにあり、カマド掘り方の一部か
33	円形	坑 状	95×100×27	羽釜、杯、椀、刀子		2溝-33号-30号-31号の順で切り合う
34	長円形	皿 状	135×93×12	羽釜、蓋、椀、灰釉椀		24住北壁中央に重複、35号を切る、埋土は暗褐色土と灰褐色土の互層
35	円形	円筒状	117×39×33	須恵器壺		24住北壁中央に重複、3基のピットが新旧を持って連結する
36	長方形	舟底状	175×95×15 N-75'-W	灰釉椀、耳皿、台付壺、杯、椀	平安	70住北壁に近接、埋土は焼土、炭化物灰を多く含む褐色土が互層、墓域
37	隅丸方形	坑 状	145×130×25	杯、蓋、長壺		埋土は軽石を含む灰白色土と褐色土3号堅穴状遺構に隣接する
38	円形	坑 状	62×36×8	弥生壺、羽釜		50住西壁に重複、西半分のみ調査、褐色土と灰褐色土で埋没、38号-50住
39	円形	坑 状	65×70×18			38、19号に近接し50住西壁寄りにある
40	円形	坑 状	98×92×40			埋土は褐色土と灰褐色土の互層、2溝よりも古い
41	不整形長円形	埋 状 底面平坦	230×105×20 N-82'-W	壺、杯		埋土は炭化物が多い褐色土が中央部にレンズ状に堆積、36号に類似の墓域か

第2章 検出された遺構

No	平面形	断面形	長径×短径×深さ	出土遺物	時期	備考
42	円形	壇状	65×54×12	壺、椀		
43	楕円形	壇状	100×72×11 N-27-E			3号竪穴状遺構の南西に隣接する
44	楕円形	円筒状	64×50×90		弥生か	44～46号はC水田下の土坑。泥炭質の粘性土で埋設する
45	楕円形	壇状	56×42×15		弥生か	灰白色粘質土と灰褐色粘質土で埋設する
46	楕円形	円筒状	84×54×18		弥生か	灰色粘質土で埋設する
47	長方形	箱形	135×60×40 N-83-W			埋土はB軽石を含む褐色土、82住の東南隅寄りに重複する
48	円形	鍋底状	100×95×15			94住西壁を切る。埋土は炭化物、焼土を含む茶褐色土
49	円形	浅い皿状	102×96×12			94住、91住を切る。埋土は焼土を多く含み、灰、炭化物も含む灰茶褐色土
50	長方形	舟底状	290×100×20 N-16-E	壺	古墳前期	94住中央床下にある。埋土はC軽石を含む茶褐色土と褐色土
51	長円形	皿状	310×146×18	弥生煮、壺、羽釜、内黒杯、杯、台付壺		西側路線外、113住北壁を切る。埋土はC軽石、YPを含む褐色土
52	隅丸長方形	壇状	184×82×16	弥生壺、コの字壺		116住北壁中央を切る。埋土はC軽石とYPを含む褐色土
53	円形	円筒形	126×115×40	S字台壺、鬼高期杯羽釜、壺、杯、椀		埋土はC軽石、ロームが混入する褐色土と暗褐色土の互層
54	楕円形	皿状	92×116×22	灰輪碗		埋土はローム粒を含む暗褐色土、底面に円形ピットあり
55	楕円形	舟底状	123×90×6 N-87-W			埋土は54号と同様、底面に円形ピット1基があく
56	長方形	箱形	117×80×15 N-76-W	弥生壺、台付壺、壺杯、灰輪碗		122住を切る
57	円形	円筒状	95×93×18	弥生壺、S字台壺、壺、椀、片刃石斧		139住→6号掘立→57号→58号、埋土は軽石とロームを含む赤褐色土
58	楕円形	皿状	135×95×14 N-104-W	壺、椀		57号を切る。埋土はロームと軽石を含む赤褐色土
59	円形	壇状	126×102×29	和泉期高杯、鬼高期杯、8c代壺		134住北壁中央を切る
60	円形	皿状	105×93×5	壺		61号を切る。埋土はC軽石とロームを含む暗褐色土、底面にピットがある
61	円形	皿状	134×115×13	縄文銅鉢、壺		61号→60号、埋土は60号と同様である

No	平面形	断面形	長径×短径×深さ	出土遺物	時期	備 考
62	不 整 長円形	塊 状	105×53×18	甕、杯		235住西壁寄りに重複、西半分を調査した だけである
63	長方形	舟 底 状	130×92×10	須恵器碗		160住西壁を切る、埋土はYP、ロームを 少し含む茶褐色土
64	不 整 円 形	塊 状	92×80×13			埋土はローム、YP、C軽石を含む暗褐色 土、底面にピットがある
65	楕円形	塊 状	120×97×20 N-45°-W	弥生甕、羽釜、杯		152住を切る、埋土はローム、YP、C軽 石を含む黒褐色土と褐色土
66	楕円形	皿 状	116×63×20 N-14°-E			152、153住を切る、埋土はYP、ロームを 含む黄褐色土
67	長方形	箱 形	125×82×7 N-5°-W	弥生高杯、鬼高期高 杯、甕		埋土はローム、YPを含む褐色土、北東隅 にピットがある
68	長方形	箱 形	123×65×35 N-8°-E	弥生甕、S字台甕、 羽釜、甕、杯、碗		161住南壁を切る、埋土はローム、YP、 C軽石を含む黒褐色土
69	楕円形	塊 状	220×123×35 N-72°-W	弥生甕、甕、杯、碗、 羽釜、灰軸草	平安	159住→70号→69号、埋土はYPとロ ームを含む褐色土
70	長方形	箱 形	170×105×38	弥生甕、羽釜、甕、 碗	平安	埋土はC軽石を多く含む黒褐色土
71	長方形	箱 形	93×60×40 N-5°-E	弥生甕、甕、羽釜、 碗		156住を切る埋土はC軽石とYP、ローム を含む褐色土
72	長方形	塊 状	93×62×14 N-72°-W			128住東南隅に重複、埋土はC軽石と YP、ロームを含む褐色土
73	円 形	塊 状 底面平坦	112×95×26			埋土は72号と同様である
74	不 整 円 形	塊 状	107×105×17	弥生甕、甕、碗		90住南壁を切る、埋土は72号と同様であ る
75	長方形	箱 形	130×89×16 N-7°-E			6壁穴北端を切る、埋土はYPを含む黒 褐色土、底面にピットがある
76	長方形	塊 状	97×60×21 N-75°-W	9c代甕		139住北東隅を切る
77	長方形	塊 状	95×63×14 N-7°-W	甕、杯、内黒碗		150住東壁寄りに重複する
78				縄文、弥生、コノ字 甕、羽釜、杯、碗		平面図等の記録がなく文章表現による
79	楕円形	塊 状	139×108×10 N-26°-E	弥生甕		
101	円 形	円 筒 状 底面平坦	173×147×16	長甕		166、167住を切る、埋土はC軽石を含む 褐色土

第2章 検出された遺構

No	平面形	断面形	長径×短径×深さ	出土遺物	時期	備考
102	円形	ロータ状	140×128×116	弥生土器と土師器の 細片	弥生	埋土は黒色土と黒褐色土の互層、シルト層を抜き井戸の可能性あり
103	円形	円筒状 底面平坦	90×88×13			168住を切る。埋土はB軽石を含む砂質の 灰褐色土
104	円形	円筒状 底面平坦	84×82×11			168住を切る。埋土は103号と同様である
105	円形	円筒状	84×53×16			埋土はC軽石を含む明褐色土。西側は調査区域外である
106	円形	塊状	88×60×29			107号を切る。埋土は105号と同様である
107	円形	塊状	87×84×25	弥生土		106号より古い。埋土は105号と同様である
108	円形	円筒状 底面平坦	97×90×20			109号を切る。埋土は105号と同様である
109	円形	円筒状 底面平坦	100×62×			108号より古い。埋土はC軽石、YPを含む 黄褐色土
110	隅丸 方形		158×108×16			埋土はロームブロックを含む褐色土
111	長方形	箱形	113×70×10 N-10°-E			埋土はB軽石の混入する褐色土
112	長方形	箱形	140×85×17 N-12°-W			埋土はB軽石、ローム粒の混入する褐色 土
113	不整形 楕円形	円筒状 底面平坦	238×127×37	弥生土、長土	弥生	現代の20、21溝に切られる。埋土は黒色 土。上面にC軽石が混入する
114	長方形	箱形 底面平坦	124×87×67 N-95°-W	弥生土		埋土はB軽石を含む砂質灰褐色土
115	不整形 長方形	皿状	113×73×7			埋土は114号と同様である
116	不整形 長方形	塊状	196×111×16	弥生土器、土師器細 片		4-16、177住を切る。埋土は114号と同 様である
117	長方形	箱形	70×65×19			現代の19溝に南半分を切られる
118	長方形	箱形	160×60×15 N-87°-W			169住を切る。埋土はB軽石を含むサラサ ラした灰色土。ピットが隣接する
119	楕円形	塊状	141×102×45			173住を切る。埋土はC軽石とローム粒を 含む暗茶褐色土
120	不整形 円形	塊状	296×98×60			173住を切る。埋土はロームブロックを含 む黒褐色土

No	平面形	断面形	長径×短径×深さ	出土遺物	時 期	備 考
121	円形	皿状	92×96×28	弥生薬、高杯	古墳後期	3-3住北東隅にあり貯蔵穴か、埋土はローム粒、YPを含む暗褐色土
122	不整形 円形	底面は凹凸 が激しい	224×174×7	弥生土器と土師器の 細片		177住を切る、埋土はC軽石とローム粒を 含む暗褐色土
123	長方形	箱形	172×80×52 N-25-W	「寺」の墨書を持つ 埴2点	平安	墓域、埋土はローム粒を含む暗褐色土北 辺に對の配石がある
124	不整形 長円形	舟底形	178×156×70	なし	縄文	埋土はローム粒を含む褐色土、半分は未 調査である
125	隅丸 方形	円筒形	120×96×92	弥生土器と土師器の 細片		1方周を切る、126号を裏込めとした井戸 か、埋土は灰褐色土
126	円形	塊状	260×245×92	樽式土器の混入あり		中央に125号があり、埋土は褐色土の互 層、井戸の掘り方か
127	不整形 長方形	皿状		樽式土器出土	弥生	平面図なし、4-14住の西壁際の床面下 にあり
128	隅丸 長方形	箱形	240×202×24 N-8-W	弥生土器と土師器の 細片		西壁に長方形の土坑2基が重複、埋土は 焼土、ローム粒を含む黒色土
129	円形	円筒状	103×100×31			1方周を切る、埋土はローム粒、軽石を 含むサラサラした褐色土
130	隅丸 長方形	箱形	254×126×52 N-42-E	弥生土器と土師器の 細片、須恵器甕		1方周を切る、埋土はローム粒を含む褐 色土
131	円形	塊形	105×100×34	なし	縄文	埋土はロームブロック、YPを含む褐色 土
132	円形	円筒状	97×71×47	環、輪	縄文	埋土はロームブロック、YPを含む褐色 土、暗褐色土
133	不整形 長方形	箱形	162×64×20			埋土は青灰色土、YP、軽石を含む褐色 土、上面に小砂利散あり
134	不整形 円形	塊状	80×27×19		弥生	上面に黒色土あり
135	楕円形	舟底状	84×52×65			180住、146号土坑を切る、埋土に焼土、 炭化物が混入する
136	円形	円筒状	70×69×9	弥生土器と土師器の 細片		東半分は路縁外、190住を切る、埋土は灰、 炭化物を含む褐色土
137	円形	円筒形	187×177×51	弥生、鬼高剛壁、壺 器台、高杯	古墳後期	199住-137土坑-182住、埋土上位にFA が堆積する
138	円形	ロート状	50×49×14			埋土はYPを含む灰褐色土
139	楕円形	皿状	204×104×21			埋土は138号と同様である

第2章 検出された遺構

No	平面形	断面形	長径×短径×深さ	出土遺物	時期	備考
140	円形	円筒状	37×36×10			埋土は138号と同様である
141	円形	円筒状	68×55×23			埋土は138号と同様である
142	円形	円筒状	41×34×14			埋土は138号と同様である
143	不明	不明	118×26×26	土師器細片		199住→143土坑→198住→188住、埋土はローム粒、軽石を含む褐色土
144	円形	円筒状	141×128×50		古墳前期	4-15住の貯蔵穴に変更、埋土はローム粒を含む黒色土と褐色土の互層
145	隅丸長方形	舟底状	257×82×29	弥生土器と土師器の細片	縄文	181住の床面下にあり
146	不整形長円形	舟底状		弥生土器と鬼高期杯	縄文	146土坑→180住→135土坑→23溝、埋土はローム粒を含む黒色土
147	楕円形	底面平坦	227×150×29			31溝→147土坑→182住、埋土はYP、ローム粒等混入の暗褐色土
148	楕円形	塊状	125×120×41	土師器細片、鉄滓	古墳後期～奈良	3-3溝→148土坑、埋土はロームブロックを全体に含む暗褐色土
149	円形	塊状	90×87×37	土師器小片、滑石製模造品片1	古墳	3-1溝を切る、埋土はローム粒を全体に含む暗褐色土
150	円形	円筒状	83×69×67	弥生土器と土師器の細片	古墳	埋土はC軽石、ロームブロックを含む暗褐色土
151	長方形	箱形	130×90×42 N-10-E	弥生土器と土師器の細片	弥生	埋土はC軽石混入の黒色土、1方面に切られる
152	長方形	箱形	128×80×43 N-13-E	弥生土器と土師器細片	弥生	埋土、重複関係は151号と同様である
153	長円形	舟底状	262×114×72 N-10-W	6c代巻	縄文	154土坑→153土坑→211住、埋土はローム粒を含む暗褐色土、焼土混入
154	不整形	舟底状	109×43×29	縄文深鉢	縄文	埋土、重複関係は153号と同様、153号と連続して作られる
155	隅丸長方形	底面平坦	206×84×41 N-12-W	なし	縄文	212住東壁下にある、埋土はYP等を含む暗褐色土、緻密である
156				土師器細片		記録類なしのため未報告
157	不整形方形	箱形底面平坦	199×120×20	弥生土器、土師器細片		164、163、159住を切る、埋土はローム粒、軽石を含む暗褐色土
158	長方形	箱形底面平坦	240×90×	弥生土器、羽釜、壺		235住→158土坑、埋土はローム粒の多い暗褐色土
159	長方形	箱形	183×88×25 N-12-E	土師器細片		埋土はB軽石、ローム粒を含む暗褐色土

No.	平面形	断面形	長さ×短径×深さ	出土遺物	時期	備 考
160	円形	塊形	143×140×42	弥生土器と土師器の 細片		埋土は159号に同様である
161	方形	塊形	126×103×25	弥生甕、土師甕、杯、 椀、須恵甕		埋土は159号に同様である
162	円形	塊形	84×77×19	弥生甕、須恵甕		埋土は159号に同様、3区画の小溝を切る
163	円形	塊状	55×48×15	弥生土器細片		埋土は159号に同様である
164	円形	円筒状	100×45×47	土師杯、椀、須恵蓋 灰輪椀		埋土は159号に同様である
165	円形	塊形	113×95×36	土師器細片		埋土は159号に同様である
166	円形	皿状	122×98×11	弥生土器と土師器の 細片		埋土は159号に同様である
167	方形	塊状	83×78×21	土師器細片		埋土は159号に同様である
168	円形	皿状	76×75×7	土師器細片		埋土は159号に同様、168号→169号の順で 切り合う
169	円形	皿状	108×98×10	土師器細片		埋土は159号に同様、168号→169号
170	円形	円筒形	120×118×38	弥生甕、土師甕、杯、 椀		埋土は159号に同様である
171	長方形	箱形	140×80×10 N-86°-W	弥生、土師甕、杯、 椀、須恵甕		北壁下に円形ピットあり、埋土はB軽石 を含まない暗褐色土
172	円形	塊状	86×82×31	甕、杯、椀		埋土は159号に同様である
173	円形	円筒状 一部袋状	92×90×50			234住の東南隅にあり、住居に伴う貯蔵穴 に変更する
174	楕円形	塊状	88×64×10	弥生土器と土師器の 細片、弥生主体		埋土は159号に同様、北西隅に深さ48cmの 円形ピットあり、柱穴か
175	円形	皿状	128×123×15	弥生、甕、杯、椀		埋土は159号に同様、233住の北に隣接す る
176	長方形	箱形	126×90×38 N-80°-W	弥生土器と土師器細 片、須恵器甕、杯	近世	埋土はA軽石とロームブロックを多く含 む褐色土、耕作に伴うイモ穴か
177	方形	箱形	110×93×74 N-2°-W	椀、杯、椀	近世	埋土は176号に同様、北壁中央に底面を異 にする張出しがある
178	円形	円筒形	93×92×30	コノ字甕、杯、須恵 器甕		241住→247住→7溝→178土坑、埋土はB 軽石とローム粒を含む黒褐色土
179	長方形	箱形	70×68×45		現代	埋土はロームと軽石を含む褐色土の互 層、現代のイモ穴
180	長方形	箱形	150×90×35	須恵甕	近世	埋土はA軽石とロームブロックを含む黒 褐色土

第2章 検出された遺構

No.	平面形	断面形	長径×短径×深さ	出土遺物	時期	備考
181	長方形	箱形	140×85×30		近世	埋土は灰褐色土とFP土石混の混土
182	円形	円筒状	136×128×60	弥生、土師壺、杯、椀		埋土はローム小ブロックを含む褐色土 240住西壁中央を切る
183	円形	皿状	118×89×8	弥生土器と土師器の 細片		155住を切る、埋土は暗褐色土
184	円形	塊状	136×128×30	土師器細片		155住東壁を切る、埋土にB軽石を多量に 含む
185	長円形	箱形	127×52×21	弥生土器と土師器の 細片		埋土は184号に同様である
186	楕円形	塊状	200×120× N-2'-E	高杯、杯		埋土はB軽石を含む暗褐色土、3区2号 溝を切る
187	長方形	箱形	175×70× N-22'-E	弥生、土師壺、杯、 椀、灰軸椀		埋土は186号に同様である
188	円形	塊形	86×73×20	弥生壺、高杯		
189	隅丸 長方形	箱形 底面平坦	205×66×14 N-4'-E	中央部から鉄器、土 師壺、須恵壺、杯	平安	埋土はFPを含む褐色土
190	長円形	塊形	157×111×17	杯、椀の細片		191号を切る、埋土はシルト質土を含む灰 褐色土、8掘立より新しい
191	長円形	塊形	225×147×19	須恵壺、杯、椀		190号に切られる、埋土は190号に同様、 周囲にピットが群在する
192	長方形	舟底状	149×88×18 N-40'-E	馬歯	平安	一段深い方形掘り方があり、馬歯が出土、 馬は埋葬している
193	不整形 円形	舟底状	200×130×9	土師杯、須恵壺、瓶		埋土は灰褐色土
194	円形	塊状	222×166×22	壺、杯		埋土はシルト質土を含む灰褐色土
195	円形	円筒状	190×188×33	須恵壺、杯、椀、瓶		埋土は194号に同様、壺は8、9住掘方と 3壁穴遺構と同一個体
196	方形	箱形	168×124×10 N-2'-W	須恵壺		埋土は灰茶褐色土
197	円形	塊状	107×96×6	土師杯、須恵壺、杯		199号の東壁を切る
198	円形	円筒状	69×68×16	土師・須恵壺		埋土は灰褐色粘質土
199	不整形 長円形	舟底状	283×216×8	土師杯、須恵壺、杯 椀、緑釉段皿	平安	埋土はB軽石を含む褐色土、規模が大き く壁穴状になる
200	方形	塊状	120×97×54 N-17'-E	須恵壺、杯、椀	平安	埋土はシルト質土を含む褐色土、250住の 北東隅にあり貯蔵穴か

No.	平面形	断面形	長径×短径×深さ	出土遺物	時 期	備 考
201	楕円形	箱 形	117×46×27	土師長甕、杯、須恵壺、椀、皿	平 安	埋土は上面に軽石を含む褐色土があり下面に炭化物と灰が互層にある
202	不 整 円 形	塊 状	107×43×37	土師壺、杯、椀		251住北西隅を切る、埋土はFP、炭化物を含む褐色粘性土
203	楕円形	塊 状	115×63×18	土師壺、杯、須恵蓋		260住北西隅を切る、埋土は202号と同様である
204	円 形	塊 状	71×71×12			埋土は202号と同様である
205	方 形	箱 形 底面平坦	102×83×15	鬼高期杯、須恵杯		1溝、259住に切られる、38溝の一部か、埋土に焼土、炭化物混入
206	楕円形	塊 状	156×88×32	土師長甕		254住の北西隅を切る、埋土はFPを含む褐色土
207	長円形	塊 状	174×70×16			206号を切る、埋土は206号と同様である
3-1	不 明	塊 状	不明×65×65		古墳 後期	3区3住→1土坑→3溝、埋土は暗褐色土と褐色土、新田2基重複
3-2	長 楕 円 形	コの字状	320×40×12	壺、小型壺、注口付	弥生 中期	3区6住(弥生後期)より古い、全体のプラン不明だが溝状のものか
4-1	不 整 楕円形	塊 状	230×198×60			埋土はローム粒を含む黒褐色土、褐色土、底面上に炭化物が混入
4-2	不 整 楕円形	塊 状	198×115×48		古墳	1号方周基北西隅にある、埋土は方周基と同様で中に浅間C軽石が堆積
4-3	不 整 円 形	コの字状	110×90×60			埋土は軽石、ロームブロック、YP粒を均一に含む黒褐色土、人為埋設
4-4	円 形	塊 状	105×103×30	弥生壺、高杯、石		埋土は軽石を含む褐色土、下にYPが多い
4-5	楕円形	塊 状	68×50×55			4区14住東辺中央部を切る、埋土は軽石を含む褐色土
4-6	ひょう たん形	コの字状 底面平坦	385×110×45	弥生壺、甕、鉢	弥生	遺物は多いが中位までが主体、埋土は褐色土と暗褐色土でYPを含む
4-7	長 楕 円 形	皿 状	210×100×14	弥生壺、高杯	弥生	4区16住南辺際にある床下土坑、埋土は黄褐色土で上面を床面とする
4-8	不 整 円 形	円 筒 状	110×不明×65		古墳	209住の貯蔵施設か、埋土は黒色土とロームブロック、YPとの混土
4-9	円 形	塊 状		弥生壺、S字台付壺 鬼高期壺、高杯、杯		2号井戸の東辺南寄り的一部である
4-10	不 明	塊 状	不明×80×32	弥生壺、甕、台付壺		4-29住、219住を切る、土層80cm程の溝状、埋土は黒褐色土

第2章 検出された遺構

No	平面形	断面形	長径×短径×深さ	出土遺物	時期	備考
4-11	不整形 方形	塊状	150×140×30	割片		4-25住北東隅に接する、2基の土坑が重複する
4-12	不整形 楕円形	塊状	180×120×25	なし		4-25住より古い、床下土坑の可能性がある
4-13	不整形 円形	円筒状	70×50×43	なし		柱穴様の掘り方、埋土はYPやローム粒を含む褐色土の互層

注

- 1 土坑番号は調査時のままとし、欠番があっても変更したものはない。ただし、1～79号は第2次～第4次調査の名称で第5次調査から101号以下を用いているので80号～100号までが本来の欠番扱いになっている。
- 2 長径、短径、深さの単位はセンチメートル(cm)である。方位は長軸方向を基準として計測した。
- 3 住居の貯蔵穴に変更した土坑一覧、変更は本報告だけで調査時の記録類は当初のままである。
調査時の名称 変更した住居
3号土坑 —— 11住
7号土坑 —— 37住
12号土坑 —— 34住
14号土坑 —— 25住
15号土坑 —— 21住
144号土坑 —— 4区15住
- 4 121号は3区3住跡跡、125号は126号を裏込めとした井戸の可能性があり、4区9号は2号井戸の東南隅の一部と判明した。

第9節 竪穴状遺構（第221図、図版128-1～129-3）

竪穴状遺構は、広義の土坑に分類される中から長軸で1～2mを越す、やや大型で方形を基調とした掘り方を持ったものをさしている。ここに分類をした6基は、ほかの土坑に対して出土した遺物量が多く、底面に薄い炭化物層を持つ1号、壁近くに角礫を据えた1号や2号、複数の土坑からなり、馬歯が出土した3号といった特徴を持っている。

この掘り方、出土遺物の内容と状態、占地上の特徴は、遺構の性格を反映したものと考えられる。住居址との重複の有無からすると、重複例の見られる1号、2号、4号、6号の4基は住居群に付随する小竪穴状のもの、単独に近い3号と5号のうち、3号は住居群が希薄な中に占地し馬歯を伴うことから、複数の住居群を背景に成立をした馬を用いた集落内祭祀の場と考えられる。

以下、個別に遺構としての特徴を記すが、平面図を第221図に、法量等を第7表にまとめた。

1号竪穴状遺構（第221図、図版128-1）

37住東辺南寄りに重複して確認された。形状は、南北172cm、東西推定150cmの不整形で、西辺は37住に切られている。底面は、ほぼ平坦で中央部で16cmの深さがある。覆土は、上下2層で全体が覆われ、2層の褐色土中に軽石粒が多く見られたが自然堆積である。遺物は、この2層中からが殆どで壺、杯、椀と鉄滓12点と羽口断片がある。また、南北長軸上で、壁から約20～30cm内側、底面に据えた状態で角閃石安山岩の角礫状のもの2点が対をなすかの様に出土した。同じ2層中にある炭化物、鉄滓、羽口と合わせると、小鍛冶関連の施設かとも推定させるが、壁や底面にその状態は見られなかった。

2号竪穴状遺構（第221図）

22住、34住と重複して確認され、22住よりも古い。西側は調査区域外のために未調査である。現状の規模は、南北240cm、東西180cmで本来は方形だったものが22住貯蔵穴と重複のために、北東隅が三角状に突出している。覆土は、明褐色土が全体に堆積し、地山のシルト質土と軽石粒の有無をもって上下に細分する。遺物は、南壁側の流れこみ中に壺、杯の細片がある。1号と同様に底面上には、小さい石が壁際から出土した。

3号竪穴状遺構（図版128-2）

1区と2区の境界付近で密に重複する住居群から東にはずれ、遺構が希薄になる中に占地する付近に位置する。南北約5m、東西6mを越す規模を持つが、土層の堆積状態と掘り方形状の2点からすると3基以上の方角を基調とする土坑が連続して作られた結果と考えられる。このうち、北西隅を例にとると新旧3基の存在がわかる。最も新しいAは、320×240cmの楕円形、深さ30cmを測る。覆土は、褐色土を主とし、地山のシルト質土と軽石粒の量で細分される。

遺物は、殆どが確認面近くから出土した流れこみで、投棄したものも含んでいると考えられる。土師器と須恵器の破片が約200点あり、長甕、羽釜、杯、椀、蓋、瓶があり、杯と椀の各1個体に接合例がある程度で、時期も幅があり遺構の時期を決定するものではない。土器に混在して、東南隅寄り

から馬歯2点がある。この馬歯出土例は、東隣りにある192号土坑から上顎の歯約10本が、北西約10mの69住居中央から約20本以上がある。これらの出土状態は一樣ではないが、馬の頭部のみを埋葬したものと考えられ、本址は連続する土坑の様子から中心的な場であったか。

遺構の時期を特定できないが、ほかの住居群と対応する平安時代のもので、竪穴状遺構の中でも祭祀に関する性格を異にしたものといえる。

4号竪穴状遺構（第221図、図版128-3）

26住、44住、53住、56住と重複して確認された。形状は、南北166cm、東西210cmの不整形で、東辺が緩やかな弧をなしている。底面は、ほぼ平坦で中央部で深さ15cmを測る。壁の掘り方は、しっかりしている。覆土は、軽石粒を含む褐色土と地山からの浮上した灰白色土が堆積している。

遺物は、中央部の底面近くでまとまって出土した。コの字甕、羽釜、杯、椀、平瓦の各破片があり、3～5cm大の塊状をした鉄滓4点もある。

時期は、住居との重複関係からは特定できないが10世紀代と考えられる。

5号竪穴状遺構（第221図、図版129-1、129-2）

1号から5号の掘立柱建物、66号、76号等の住居群と隣接するが、これら遺構に囲まれた中心近くに単独で位置する。形状は、南北223cm、東西186cmの隅丸方形で、深さ45cmを測る。北東隅には、41×36cm、深さ55cm、直立する円形ピットがある。底面は、ほぼ平坦で、壁は約70度の傾斜で掘り方もしっかりしている。覆土は、褐色土と地山シルト質土との混土、3層の自然堆積である。遺物は、土師器の細片3点が混入出土している。

性格は、平面形状と掘り方の特徴、隅に柱穴様のピットを持つことから、隣接する住居か掘立柱建物に伴う小屋かけ程度の施設かと推定される。

6号竪穴状遺構（第221図、図版129-3）

132住、134住、75土坑と重複し、土坑を除いて最も新しい。形状は、南北584cm、東西175cmの長楕円形を呈し、中央部の深さ34cmを測る。断面形状は、縦横断ともに舟底状で、しっかりとした壁の掘り方を持っている。覆土は、Y Pを少量含んだ褐色土と暗褐色土との上下2層が全体に堆積し、遺物の半数以上は流れこんだ状態で上層の褐色土から出土している。

遺物は、土師器と須恵器、弥生土器が混在した、周辺にある遺構の時期と対応したもので、殆どは接合例のない破片である。総量で約100点あり、組成には弥生時代後期の樽式の壺、甕、高杯を上限とし、古墳時代の高杯、杯、9世紀から10世紀代の甕、羽釜、甕、杯、椀、甕と敲打痕を持った石2点がある。

本址は、竪穴状遺構の中では規模も大きく、3区の台地上という立地が異なる点で、5号までの住居群に付随したものと性格上分離されよう。その用途は、明確な長方形を基調とした掘り方形状とほぼ南北の主軸方向から明確な共存遺物をかくものの平安時代後期の墓塚が考えられる。

7号竪穴状遺構

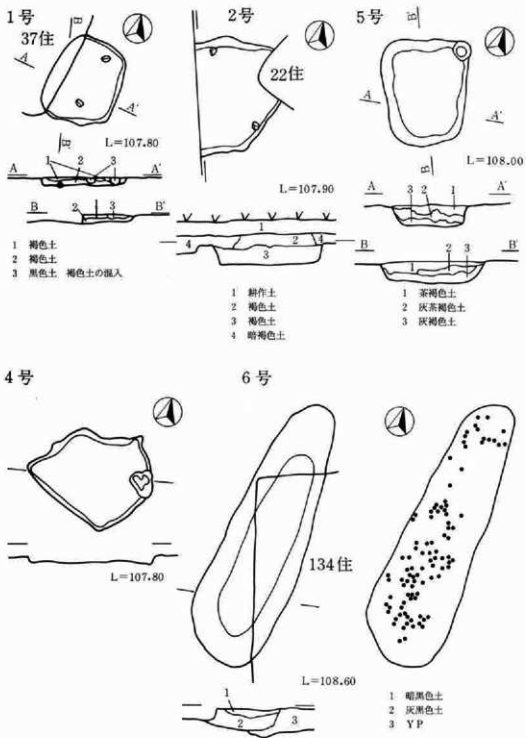
位置 2P-3・4グリッド 68、69、79住に重複し、最も新しい。規模 東西1.93m 南北2.10mの隅丸方形で南西隅は調査区域外にある。断面は逆方台形、底面は平坦で深さ64cmを測る。埋没土 重複する68住、79住のものとは大差がない灰白色土ブロックを多く含む褐色土である。遺物 北東隅近くの床上10cmで甕と杯の破片があるが混入と考えられる。時期 重複関係では、いずれの住居よりも新しいが埋没土に大差はなく平安時代頃と推定される。

この遺構番号は、調査時に6号としていたが第4次調査のものと重複するために本報告で7号と変更をした。

第7表 熊野堂遺跡II地区竪穴状遺構一覧表

単位 cm

No.	平面形	長軸×短軸×深さ	方位	遺物	時期	備考
1	不整形	172×153×16	N-8-E	甕、杯、碗、鉄滓、羽口	平安	西辺側は37住と重複のために不明
2	不整形	240×180×42	—	甕、杯	奈良	22住よりも古い、北東隅は22住が重複するために不明
3	不整形	南北約7m、東西約6mの範囲	—	甕、羽釜、杯、碗、瓶、馬歯	平安	多量の土器に馬骨が伴う、周囲に37、41、192号土坑等がある
4	不整形	211×166×15	—	羽釜、甕、平瓦杯、碗、鉄滓	平安	25、44、53、56住等と重複、東辺にピットが重複、遺物は中央部に集中
5	隅丸方形	223×186×45	N-20-W		平安	北東隅に円形ピットが重複、底面は平坦、壁は緩傾斜である
6	長横円形	584×175×34	N-5-E	弥生～和泉期の土器、甕、杯等	平安	134住を切り、133、160住と重複、遺物が多い
7	隅丸方形	193×210×64	N-25-E	長甕、杯	平安	68、69、79住を切る、埋没土は68、79住と類似、遺物は混入



0 1:80 4m

第221図 1号・2号・4号・5号・6号竪穴状遺構

第10節 東京電力鉄塔用地調査区 (第222図～229図)

1 調査区の位置

調査は、新幹線建設用地内にある鉄塔の移設予定地を対象としたものである。位置は、II地区3区の東約30m付近にあり、同一地形上でもII地区が台地の西寄りを中心に南北に縦断するのに対して、東にある唐沢川を望む緩傾斜地へと移行する箇所と相当する。標高は、確認面の第3層褐色土中で、3区と同じ108.30m前後を測る。

遺跡全体の中では、台地先端を望む位置になり、台地を縦横断した遺構内容の東南方向への広がりを示すものとなっている。

2 調査の方法と経過

調査は、同一地形上にある同一遺跡地内との判断から、II地区の方法に準拠した。基準軸は、II地区3区から延伸し、東西軸アルファベットのFを当地区のAと読み換えて、南北軸の数字も3区05を01としている。調査用の方眼は、II地区同様3×3mとした。

対象面積は、約17m四方、約290㎡で、調査区自身が方眼軸に対して西へ25°偏している。

調査区経過は、II地区第4次調査の終了をまって昭和54年8月1日に、同一の体制で開始され、翌9月14日に全体図作成の完了をもって、予定地内にある全ての遺構調査が終了した。

3 基本土層

調査区は、II地区全体から見ると台地の東寄りにある。基本土層は、調査区の南隅に設けた深掘りの断面によると下記の通りである。

- | | | |
|----|---------|----------------------------------|
| 1層 | 耕作土 | 浅間A及びB軽石等を多量に含む砂質土。 |
| 2層 | 灰暗褐色土 | 浅間C軽石を多量に含む。やや砂質。 |
| 3層 | 淡黒色土 | 浅間起源の軽石等を多量に含む。粘性に乏しい。 |
| 4層 | 灰黒色土 | 3層と同性状だが軽石は大きい。同様に粘性に乏しい。 |
| 5層 | 灰白色土 | 6層上部が4層の影響で脱色。変色したもの。 |
| 6層 | ローム | 灰黄色を呈し、軽石を含む。上部は4層の影響で灰色に変色している。 |
| 7層 | 板鼻黄色浮石層 | 淡灰黄色、上部は灰色に変色。 |
| 8層 | ローム | 桃白色を呈し、7層との境界には黒褐色鉄分凝集層がある。 |

このうち遺構確認面としたのは、2層下部から3層中位にかけてで、3層上面が108.30m付近に相当する。遺構の掘り込みの面は、台地を南北に縦断する4条の溝断面で確認されたが、その殆どは2層から3層にかけてで、重複関係からすれば残る大半の遺構も同様と推定される。

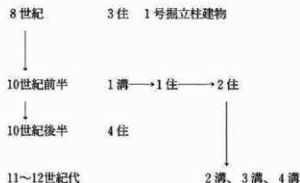
4 遺構と全体概要

確認された遺構は、次のとおりである。

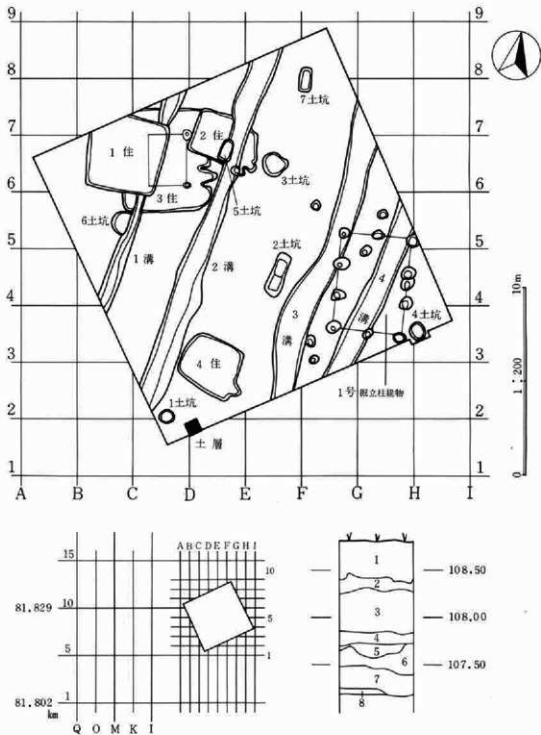
- 1 竪穴住居址 4軒（8世紀前半—3住、10世紀前半—1住、2住、10世紀後半—4住）
- 2 掘立柱建物址 1棟（奈良時代）
- 3 土坑 7基（平安時代、中世）
- 4 溝 4条（平安時代後期）

このほかには、掘立柱建物の周辺に柱穴と同様なピットが5基ある。また、各遺構の覆土中には、弥生時代後期の樽式土器や古墳時代各期の土器が多く含まれ、周辺にその遺構が存在する可能性がある。以上の内容からすると、当調査区では弥生時代と古墳時代の遺構確認がないものの、II地区の東縁部を形成すると考えられ、特に東南方向への広がりを知ることができる。

遺構の変遷は、大きく8世紀代から浅間B軽石降下頃までを知ることができる。その内容は、住居を主とした居住域が、覆土に浅間B軽石を含む頃には溝を主とするものへと変化している。

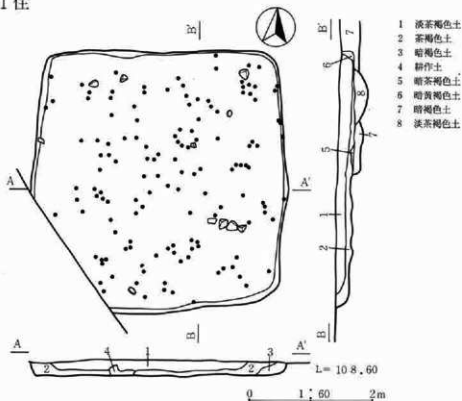


この中で、平安時代後期頃の4条の溝が特筆される。これら溝のうち、2溝、3溝、4溝がIII地区の中で古道敷の可能性を持つと報告された8溝、9溝、15溝と同一のものと考えられる。2つの調査区は、南北で約65m離れているが溝固有の特徴が近似し、ほぼ台地上を南北に縦貫する方向性は古道敷の可能性を高めている。III地区の住居内容からすると、この溝が10世紀後半以降の遺構を規制するものとして出現し、東約300mにある「兩壺古道」とも平行関係にある。とすると、10世紀後半代から11世紀にかけて、熊野堂遺跡の東縁を南北に面する基幹の遺構として位置付けられる。



第222図 東電鉄塔用地調査区全体図

1 住



第223図 東電鉄塔用地調査区1号住居址

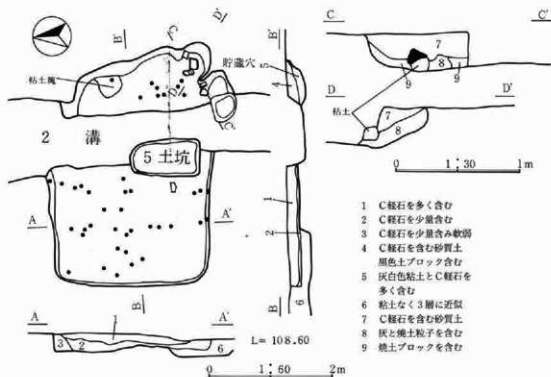
5 竪穴住居址 (第223図～226図)

1号住居址 (第223図)

1号住居址は、調査区の北西隅近くにあり、東半分が奈良時代の3住、その上面を南北に縦断する1溝があり、本址が最も新しい。規模は、東辺3.65m、南辺3.95m、北西隅が調査区域外にあるために西辺2.80m、北辺2.50mを各々測る。平面形状は、北西と南西の隅を鈍角とする方形で、南辺でN92°Wを示す。カマド、柱穴、貯蔵穴は、未確認乃至は本来的に設けられなかった可能性が高い。床面は、西半分がローム層を踏み固めているものの、東半分は3住との重複のため褐色土を用いた貼床としてゐる。埋没土は、C軽石とローム粒を多量に含む、かたくしまった茶褐色土が床面近くまで一様に分布し、C軽石が希薄になる茶褐色土が壁際から床面上全体に約10cmの厚さで堆積している。

遺物は、全体に散在して出土し、記録図化したもので144点、覆土中のものを含めると400点がある。遺存状態は、破片が圧倒的に多く、羽釜、壺、杯、椀等に復元され、砥石、刀子のほかに緑釉耳皿がある。土器等のほかに、角閃石安山岩を主とする20cmを越す9点の石があり、煤や炭化物が付着していることから、カマド用石であった可能性がある。

時期は、3住、1溝を切って作られ、羽釜、椀の特徴から10世紀前半と考えられる。東にある2住とは近い時期で重複する古い方からの順は3住、1溝、1住と2住である。



第224図 東電鉄塔用地調査区2号住居址

2号住居址 (第224図)

2号住居址は、1住の東約1mの位置にあり、3住の東辺を切り、2溝に中央部近くを南北に縦断されている。また、中央南辺寄りには、重複する中では最も新しい5土坑があり、全体としての遺存状態はやや悪い。重複関係は、古い方から3住、2住、2溝、5土坑の順である。

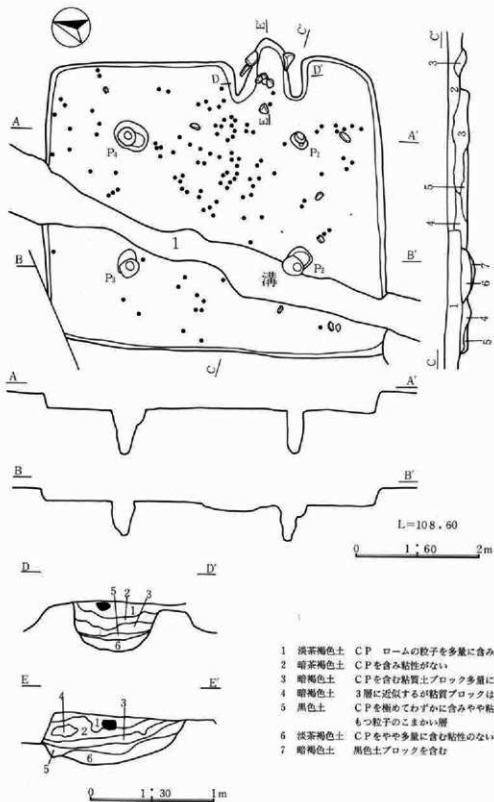
規模は、東辺2.10m、南辺3.20m、西辺2.45m、北辺3.30mを測り、南辺の方位はN85°Wを示す。平面形状は、東南隅にカマドを持つ、東西に長い長方形を呈するが、2溝との重複の結果か、北辺に30cm近い段差が生じている。床面は、ローム層に達しているが西半分は茶褐色土を用いた貼床である。埋没土は、C軽石をやや多量に含む、粘性に乏しい茶褐色土が床面近くまで均一に堆積し、床面直上には同性状の暗褐色土が薄く見られた。

カマドは、東南隅に設けられている。上面が削平を受けて遺存状態は悪いが、焚口付近に残る様子からすると、暗褐色土を袖材に用い、角閃石安山岩を支脚とし、砂岩を鳥居状に架した構造と推定される。内部からは、破片状態、複数固体の羽釜が出土している。また、東北隅寄りの壁に接して、カマド内に少量残る灰白色粘土と同質の大塊が出土している。カマドの用土か、性格不明である。

南辺のカマドに接する位置には、80×40cm、深さ30cmと40cmの連結する2基の円形土坑がある。カマドの灰を含んだ灰黒色土が床面に堆積していることから、カマドに付設された壁外施設か、貯蔵穴の性格を持つと考えられる。

遺物は、2溝を除く全体に散在して出土し、約300点がある。遺存状態は、カマドからの大形破片を除いて殆どが小破片だが、羽釜、杯、碗等に復元され、釘2点鉄滓少量がある。

時期は、羽釜、碗の特徴から10世紀後半と考えられる。



第225図 東電鉄塔用地調査区3号住居址

3号住居址（第225図）

3号住居址は、1住と2住の下面にあり、本調査区の遺構の中では最も古い。北西隅の一部を除いて全体が確認されているが、西辺のほぼ全体には1住、東辺の北半分には2住、中央西寄りに1溝が各々重複している。

規模は、東辺5.20m、南辺4.70m、西辺5.10m、北辺4.30mを測り、南北が長い方形を呈す。北辺での方位はN104°Wである。床面は、ローム層を約20cm掘り下げて平坦にしている。平安時代の1住、2住の床面よりも約20cm深い。主柱穴は4本ある。上面での大きさ、床面からの深さは、P₁ 54×42×68cm、P₂ 40×26×64cm、P₃ 46×33×60cm、P₄ 42×32×72cmである。柱痕は、直径15cm前後の円形と推定され、4本とも中段を持つなどの掘り方を持っている。柱間は、P₁とP₂が270cm、P₂とP₃が205cm、P₃とP₄が270cm、P₁とP₄が210cmである。

埋没土は、C軽石をまばらに含む暗褐色土と茶褐色土との互層で、自然堆積している。

カマドは、東辺の南寄りにある。両袖には暗褐色土を用い、その内壁には1対残るが一部調整加工を施した細長い角閃石安山岩を貼付している。底面は浅い椀状で、床面近くのレベルまで焼土と灰とが堆積し、強いてかき出された状態は認められなかった。煙道部は、壁外に40cm程まで続くが上面は殆ど削平されていた。

遺物は、カマド手前の住居中央部付近に多く、カマドから流出したと思われる河原石も散在する。甕、杯、椀等の破片360点があり、このうち133点を記録図化している。

時期は、図示した長甕、須恵器蓋の特徴から8世紀前半と考えられ、この調査区の中では1号掘立柱建物とともに最も古い遺構である。掘立柱建物との前後関係は、遺物の上での検討ができないために明らかにできないが、規模、軸方向の点での近似内容は接近した時期を推定させる。

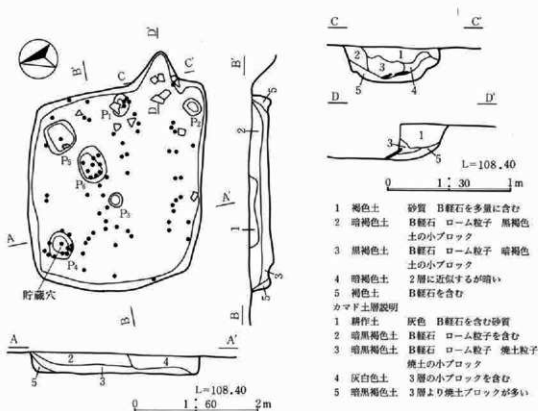
4号住居址（第226図）

4号住居址は、1～3住の南約7mの位置にある。

規模は、東辺2.72m、南辺3.10m、西辺2.50m、北辺2.75mを測り、南辺での方位はN73°Wである。平面形状は、東西方向が長い方形を呈するが、西辺は緩やかな弧を描き、対する東辺は隅で50cm近い段差のある、東南方向へ突き出したものとなっている。

床面は、全体で4cm前後の高低差を持つが、ローム層を掘り下げ、平坦に踏み固めている。南西隅寄りを除く住居内から、大小6基、不整列な状態で円形ピットが確認された。床面との前後差は不明確だが、その埋没土にはP₁～P₃で焼土と灰が、P₄とP₅には灰が多量に認められ、住居内でカマドと結びついて機能していたと思われる。特に、P₁とP₂は、その対応する位置と類似した掘り方から、カマド構造に直接結びつく、両袖に関係するものと考えられる。また、唯一、焼土と灰を含まず、黒褐色土で埋没していたP₄は、位置と掘り方の点で貯蔵穴であろう。

カマドは、東辺南寄り確認された。残存状態では、床面とほぼ同じ浅い椀状の掘り方を残し、全体は壁外に約50cm程のびている。袖、袖石等は一切残らず、袖材らしい灰白色粘質土が内部に流入していた。また、焚口と推定されるP₁とP₂の間には、袖材である4～5個体の平瓦が散在していた。この様子からすると、II地区で袖石として一般的な角閃石安山岩を用いず、平瓦を豊富に貼りめぐら



第226図 東電鉄塔用地調査区4号住居址

したカマドであったと推定される。

遺物は、カマド内を含む、住居全体から出土したが全体で約400点あり、101点を記録図化している。内訳としては、カマドに使用された瓦類のほかに、羽釜、土釜、杯、椀、刀子があり、混入の可能性が高い。滑石製小玉1点も含まれている。

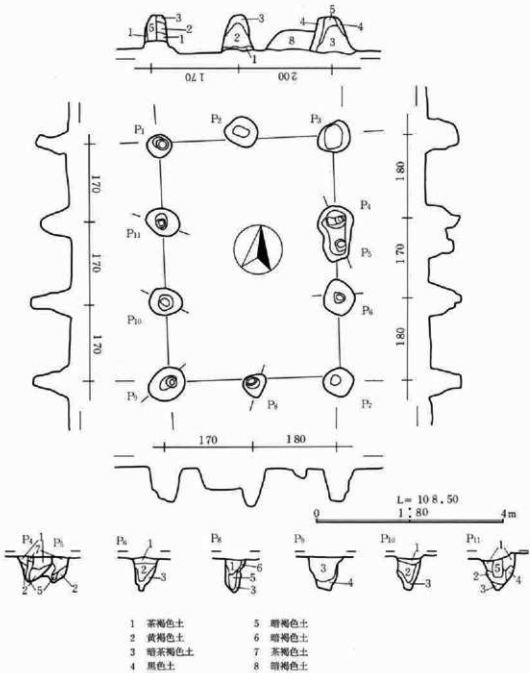
時期は、羽釜、土釜の特徴からすると10世紀後半と考えられ、この調査区の中では1住、2住に続く、最も新しい遺構である。

6 1号掘立柱建物址 (第227図)

1号掘立柱建物址は、調査区の東南隅近くに位置し、中世以降の3溝、4溝が南北に縦断して重複する。時期は、II地区の同様な建物址との比較、本址柱穴の掘り方の特徴から奈良時代とする。

規模は、南北510～530cm、東西350～370cm、3間×2間の南北棟で、東桁行の方向はN10°Wである。柱間は、桁行で170cmと180cm、梁行で170cm、180cm、200cmで、近似した数値をとる。東桁間は、北から2番目に同一の掘り方内に2本の柱痕が確認され、P₉とP₈との間は入口施設と推定される。

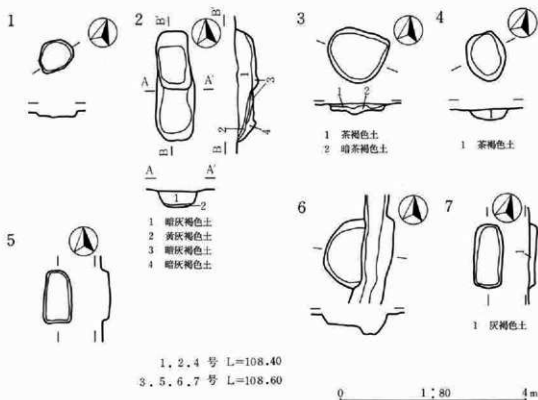
柱穴の掘り方は、長径で45～78cmの円形か隅丸方形で、深さ68～90cmを測り、一様に類似した特徴を持っている。P₁、P₄、P₅、P₈、P₁₁では、埋没土からも柱痕の存在が推定されるが、直径20cm前



第227図 東電鉄塔用地調査区1号孤立性建物

後を測る。また、埋土は茶褐色土、黄褐色土、暗褐色土の互層状態が見られた。底面は、P₄の様に一段掘り下げたものがあるが、特につき固めた等の状態や礎石等は認められなかった。

周囲には、重複する溝と同時期頃の2号、4号土坑のほかに、1号、3号、6号、7号、13号の5基の類似した掘り方を持つピットがあり、本址に伴うか、時期を異にした別の建物があったと考えられる。3号、13号の2基のピットからは、須恵器の破片が出土している。



第228図 東電鉄塔用地調査区土坑

7 土 坑 (第228図)

土坑は7基が確認されている。形状は、長方形の2号、5号、7号と円形の1号、3号、4号、6号とに分けられる。時期は、埋没土中の浅間B軽石の有無から、長方形の一群を溝と同じ中世以降に、円形の一群はB軽石を含まず、住居址や掘立柱建物址の埋没土に近似することから平安時代とする。性格は、円形のものについて住居や建物に付随することが位置から考えられる。遺物は、各土坑から出土しているが、いずれも混入、流れこみと判断される状態にある。

1号土坑は、調査区南西隅で2溝に近い位置にある。楕円形で78×54cm、深さ10cmの断面浅い皿状である。

2号は、調査区中央で3溝と平行した西約1mにある。長方形で245×75cm、底面に約10cmの段差があり、2基の土坑が連結した様な状態にある。断面は船底状、最深部で50cmを測る。埋没土中には浅間B軽石が多く、その特徴からは平行する2溝と3溝、7土坑との関連が窺われる。

3号は、2住カマド近くにある。やや歪んだ楕円形で、120×110cm、断面浅い碗状で深さ15cmを測る。埋没土は、C軽石を含む茶褐色土と暗褐色土が堆積する。

4号は、掘立柱建物址東南隅近くにある。楕円形で100×85cm、断面碗状で深さ25cmを測る。埋没土は、C軽石を含む茶褐色土である。

5号は、2住と2溝と重複し、最も新しい。歪んだ長方形で108×57cm、底面ほぼ平坦で深さ15cmを測る。埋没土は、B軽石を含む茶褐色土で2号、7号に近似する。遺物はない。

6号は、3住南西隅に重複し、さらに1溝を切っている。円形と推定され、南北で140cm、断面碗状の深さ30cmを測る。

7号は、調査区北隅近くに単独である。長方形で133×60cm、断面箱形の深さ15cmを測る。西辺の方位は、ほぼ北をさし、同一形状の2号、5号と5度前後の差がある。埋没土は、B軽石を多量に含む灰褐色土で少量の黒色粘質土ブロックが混入する。

8 溝 (第229図)

溝は、平行して4条が確認された。これらは、規模走向性の点で類似するが、住居址を始めとする各遺構との重複、埋没土中の浅間B軽石の有無からは、時期を少しづつずらしながら機能したと推定される。B軽石を基準にすると、1溝が無く、2号は上面近くに堆積、4号が中位、3号が無しの順となり、1号と2号の時期は近いが住居を入れると古い方から1溝、1住、2住、2溝の順である。以上から、3号を中世前半代として除くほかは平安時代後期頃としたい。

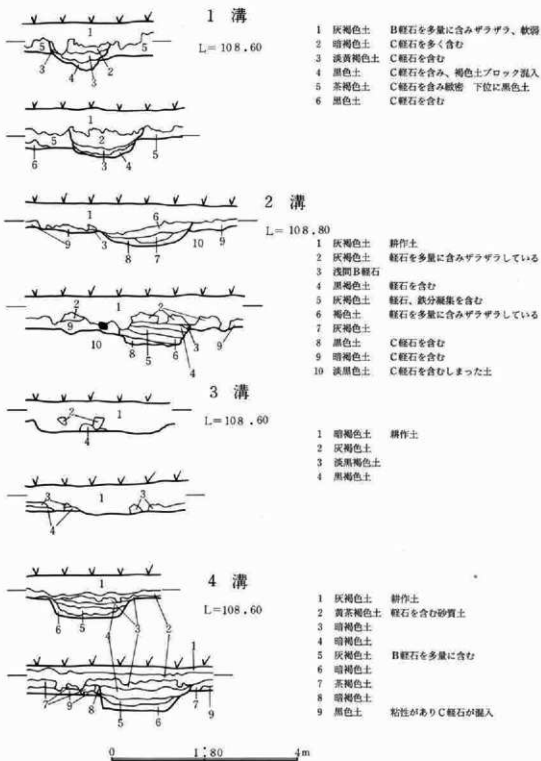
規模は、上幅平均1m前後で全体にしっかりした掘り方を残している。いずれも直線的な走向性で、その方位はN5°E前後にある。勾配は、南北両端で最大30cm、いずれも北から南への傾きを持っている。しかし、底面に流砂や底面及び両壁に荒れた状態もないことから、常時湧水する目的や性格ではなく、台地縁辺を区画する意味が強いものと考えられる。

1溝は、確認長12.5m、上幅110cm、下幅30cm、深さ65cmを測り、断面碗状を呈す。構築面は、1層下位にあり、底面はローム層に達している。埋没土は、C軽石を含む黒色土、黄褐色土、暗褐色土が自然堆積し、下位2層に鉄滓を始めとして混入物が多い。時期は、3住を切り、4条の中では最も古く、1住に先行する。

2溝は、確認長20.5m、上幅170～220cm、底面幅85～115cm、深さ40～60cmを測り、断面碗状を呈す。埋没土は、上面にB軽石の二次堆積がのり、1溝より後出である。また、2住を切り、5土坑に切られていることから、B軽石降下以前にその時期が求められる。遺物は、全体から流れこみ状態で出土し、杯、碗、土鍾等がある。

3溝は、確認長16.5m、上幅110～135cm、底面幅85～110cm、深さ30cmである。走向は、やや蛇行するものの直線を基調としN5°E前後を示す。埋没土は、B軽石とC軽石、角閃石安山岩を含んだ暗褐色土が底面にまで達する程である。時期は、掘立柱建物の北西柱穴と重複し、B軽石が不明瞭なことから4条の中では最も新しいと考えられる。

4溝は、確認長10.5m、上幅115～130cm、底面幅80～90cm、深さ50cmである。3溝の東約2mで掘立柱建物内を斜めに縦断している。埋没土は、底面との間に1枚間層を持ってB軽石を多量に含む灰褐色土がある。



写 真 图 版



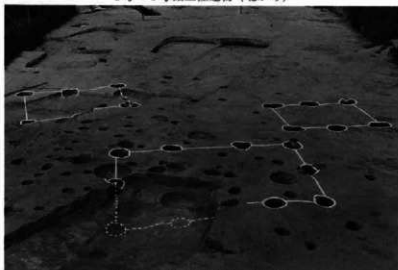
2次調査区全景（南から）



3区全景（北から）



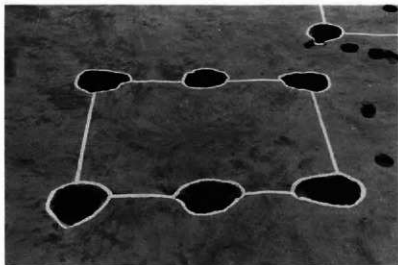
1号～5号掘立柱建物（北から）



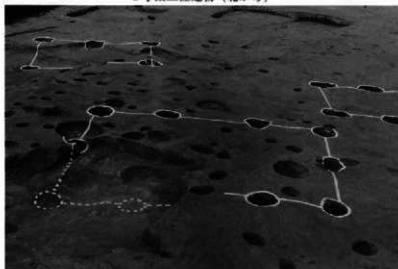
1号～3号掘立柱建物（北から）



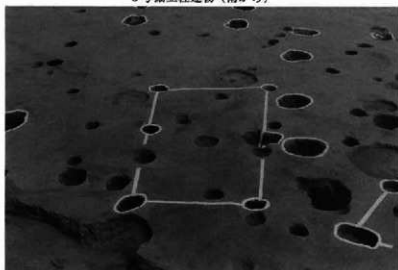
1号掘立柱建物



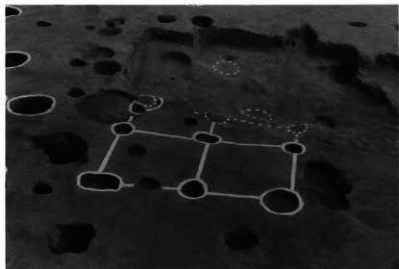
2号掘立柱建物（北から）



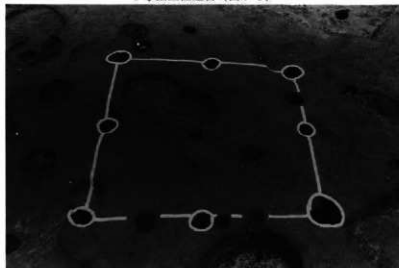
3号掘立柱建物（南から）



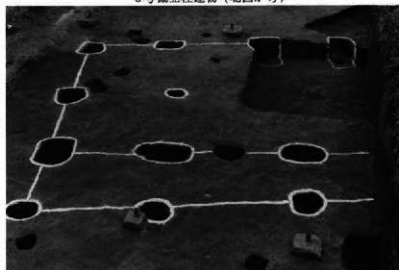
4号掘立柱建物（西から）



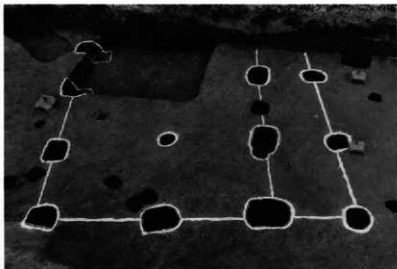
5号掘立柱建物（西から）



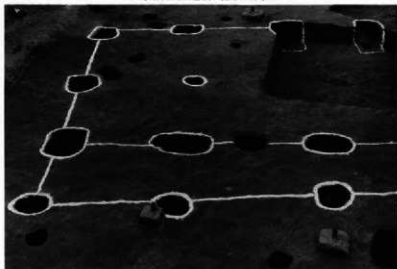
6号掘立柱建物（北西から）



7号掘立柱建物（南から）



7号掘立柱建物（西から）



7号掘立柱建物（南から）



8号掘立柱建物（南から）



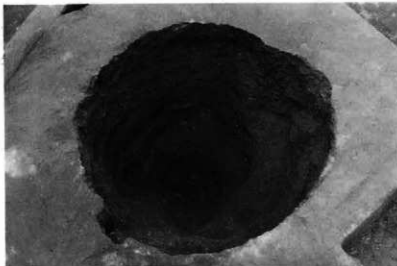
1号井戸



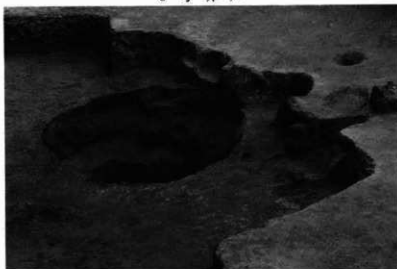
2号井戸(北から)



2号井戸(断面)



3号井戸



3号井戸・246号住居址（南から）



3号井戸付近全景（北から）



C 水田北半部 (南から)



C 水田 (西から)



C水田の畦畔と8号溝（南から）



8号溝（側道 西から）



C水田（側道中央部 北西から）



8号溝(東から)



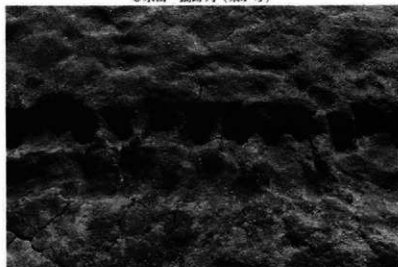
8号溝断面



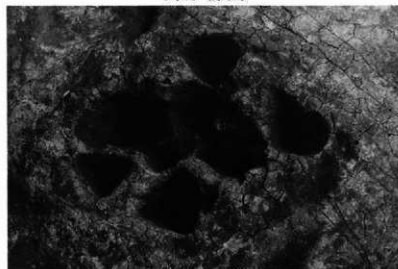
C水田畦畔断面



C水田 鋤跡列 (東から)



C水田 鋤跡列



C水田 鋤跡



C 水田下11号・12号溝（北から）



C 水田下遺物出土状態



C 水田下遺物出土状態



F A水田 北半部 (南から)



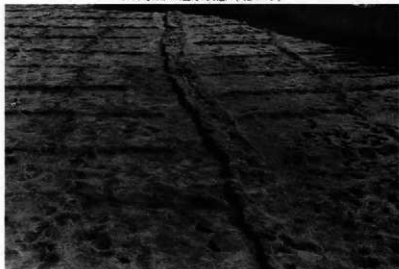
F A水田 南半部 (北から)



F A水田（手前）とC水田（奥）（北から）



F A水田の冠水状態（北から）



F A水田大畦と小区画（南から）



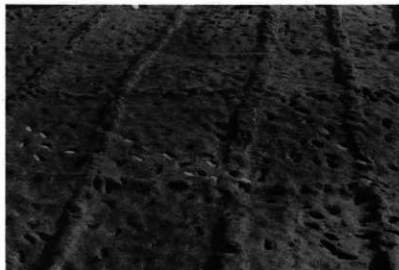
F A 水田の畦畔と水口



F A 水田の冠水状態



8号溝とC水田区画(北から)



F A 水田の畦畔と足跡



F A 水田中足跡の拡大



F A 水田調査風景



F A 水田 (側道 南西から)



F A 水田 (側道 北西から)



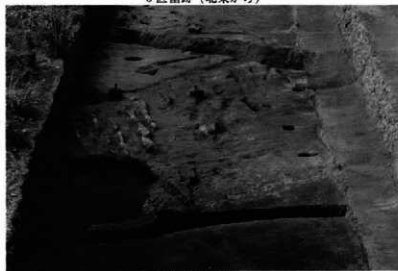
F A 水田 (側道 北西から)



3区畠跡（北東から）



3区畠跡（北東から）



2区畠跡（北から）



1号溝 (南西から)



2号溝 (北西から)



3号溝 (北東から)



4号溝 (西から)



5号溝 (東から)



6号溝 (東から)



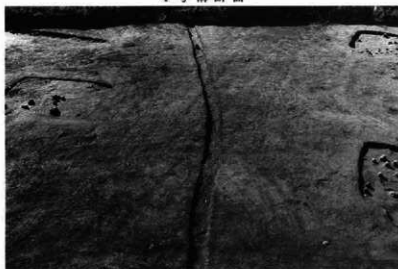
7号溝 (東から)



13号溝 (北東から)



4号溝断面



14号溝 (東から)



16号溝 (東南から)



26号溝 (北から)



28号溝 (北から)



4号 (右)・36号 (左) 溝 (北から)



36号溝 (南から)



39号溝 (西から)



40号溝 (南から)



24号溝 (西から)



34号溝 (南西から)



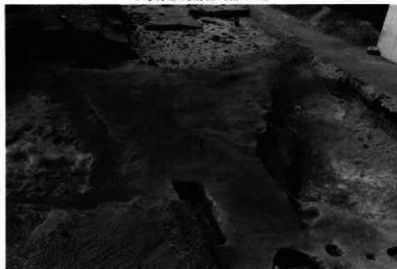
37号溝 (西から)



1号方形周溝墓（南から）



1号方形周溝墓（南から）



1号方形周溝墓前方部（北から）



1号方形周溝墓土層断面



1号方形周溝墓土層断面



1号方形周溝墓北東隅C 輕石上出土土器群



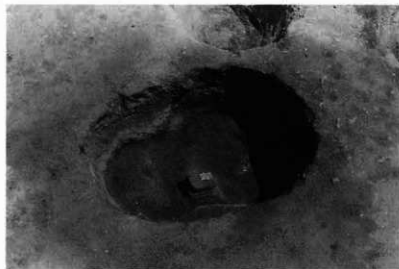
1号土坑



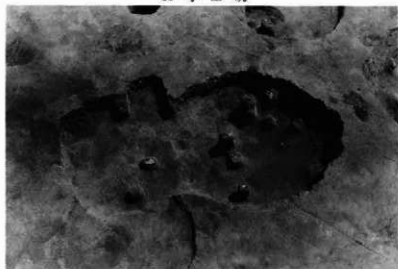
7号土坑



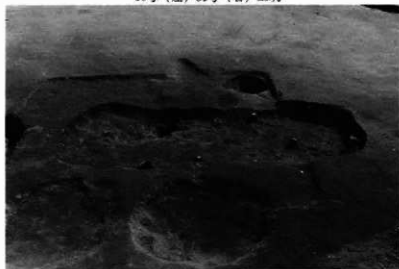
11号(左)·12号(右)土坑



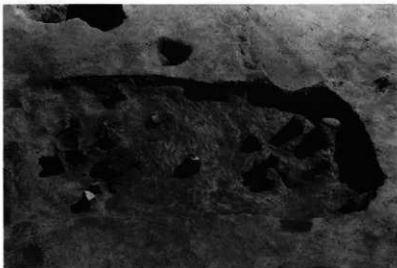
13号土坑



30号(左)・31号(右)土坑



50号土坑(西から)



36号土坑



36号土坑



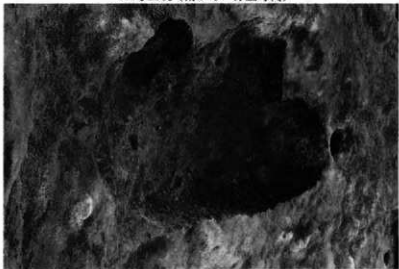
69号(左)・70号(右)土坑(南から)



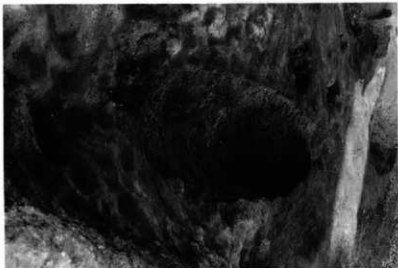
123号土坑



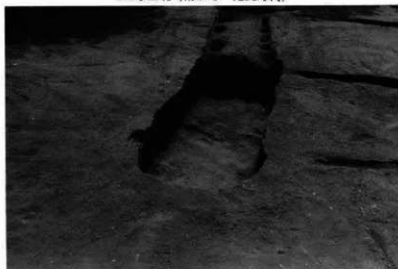
151号土坑(南から 弥生時代)



152号(中央)・153号(左上)・154号(左下)土坑(南から)



155号土坑（南から 縄文時代）



158号土坑（西から）



205号土坑（西から）



192号土坑（南から）



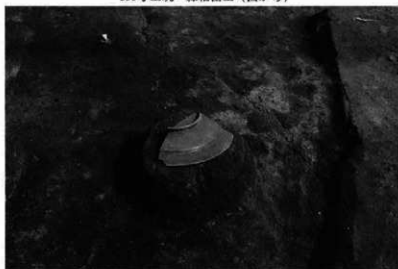
192号土坑馬歯出土状態



192号土坑付近全景（南から）



199号土坑・緑釉出土（西から）



199号土坑 緑釉段皿出土状態



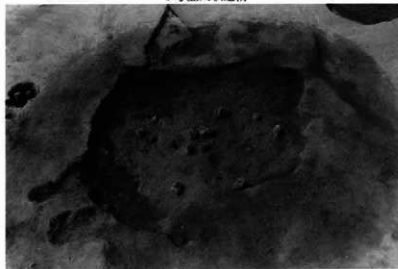
205号土坑 遺物出土状態（西から）



1号竖穴状遺構



3号竖穴状遺構



4号竖穴状遺構



5号竖穴状遺構



5号竖穴状遺構



6号竖穴状遺構

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第100集

熊野堂遺跡(2) 遺構編 2 一上越新幹線関係埋蔵文化財
発掘調査報告 第14集一

平成2年3月20日印刷

平成2年3月26日発行

編集／財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

発行／群馬県考古資料普及会

勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2

電話(0279)52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社
